らきのあるのとを取柄として、將來の發展と大成とを期待して置く。

## 五十四、尾上菊四郎

五世尾上菊五郎の門。初め尾上竹次郎。明治四十五年七月より小芝居を去つて帝劇の專屬となる。大正七年十一月死去。

何んとなし江戸時代の芬のついた老巧役者である。そして人氣も求めず、見得も張らず、舞臺に出るのを商賣のやうにして、コツ〳〵やつてゐる役者である。

菊四郎が小芝居役者になつてから、もう餘程になるだらう。何んでも源之助や死んだ馬十等の連中と今の三崎座に出てから、ずつと小芝居に出通してゐるやうに思はれる。それにしても藝がさして荒れもしなければ、小芝居臭くならないのは不思議である。不思議といふよりは、鍛込むだ腕だと感心する方が至當かも知れない。

菊四郎は舞臺をぞんざいにすることはあつても、藝の荒れてゐない人である。また舞臺で骨を盜むやうなことはあつても、臭いことはしない人である。舞臺で惡く色氣を出すやうなことをしないからであらう。

何にしろ枯れた役者である。枯れて平淡になり過ぎた役者である。當込氣が無いと謂つて恐らく菊四郎程當込氣のない役者も居ないだらう。舞臺に出てゐるのも、家で寢ころんでゐるのも、殆ど同じ心もちでゐるかと思はれるやうな役者である。菊四郎を見ると、松助や傳五郎などは尙だ〳〵芝居をして見せる役者だと謂はなければなるまい。

芝居をして見せずとも菊四郎の舞臺ぶりには、不思議に面白味もあれば味もある。名人藝とまで讃上げるのはお笑草だとしても、上手といふ境を疾うに通越して了つた上手役者である。只フラ〳〵と舞臺を歩いたり、ツクネンと坐つてゐるだけで、藝のサビがチラ〳〵光つて見える。但し椋右には、此の人が蟲が好いてゐるのかも知れない。

正直椋右は、菊四郎といふ役者が好である。してうにやこのわたを好くやうに、菊四郎が好である。してうにやこのわたが、大してうまい物でもなければ、また大した御馳走でもないやうに、菊四郎も然う大した役者でないかも知れぬ。よし大した役者でないとしても、味はある。その味は、少しづゝ舐めながら何時までも飽きない性質を持つてゐる。また無くてはならぬといふ程の物でもないが、無ければ膳が淋しい。

菊四郎は、うにやこのわたのやうな、淡いながらも、一度蟲が好いたとなつたら、忘れることの出來ない味を持つた役者である。しかし萬人向では無い。何んと謂つても滋味はないのだから、刺身やビフテキの代りにはならない。

其の柄と謂へば素敵なノッポである。團右衛門程大々してはゐないが、脊の高さは或は五

分とは違はないかも知れぬ。何しろヒョロリとしてゐる。それで何うかすると不恰好に見えることもある。顔の長い、柄や顔から謂へば、菊四郎は、仁木役者と謂つても光秀役者と謂つても、また熊谷役者と謂はうが、由良之助役者と謂はうが、少しも恠しくは無い。

しかし其の役柄は、殆ど松助と同じだと謂つて差支へは無いやうだが、松助ほど舞臺ぶりに緊張したとこもなければ、鋭く光つて見せるやうなとこも無い。其處が松助よりも役者を小さくもし安くもしてゐるところであらうが、その代り菊四郎は、松助よりも役の領分が廣いかも知れぬ。お安くても使道は多いやうである。

役者ぶりから謂つても松助には篤實といふ氣分が微塵もないが、菊四郎には實體らしいとこが見える。其の實體は、土臭いボク〳〵した眞つ正直な奴では無いとしても、苦勞人の番頭さん位は確にある。そして松助ほど深刻でないにしても、松助式狡つ辛いやうなとこも持つてゐる。

松助が端敵的世話者役者として特技を持つてゐるやうに、菊四郎もまた端敵的世話者役者として腕を揮ふ。がしかし、役柄は似てゐると謂つても、二人の役者ぶりも舞臺ぶりもスッカリ違ふ。從つて同じ端敵になつたとしても、二人の調子も心もちも、また行方も丸つきし違ふ。菊四郎の蝙蝠安は、菊四郎の蝙蝠安で、松助の蝙蝠安は松助の蝙蝠安である。只二人共に、洒落にも與三役者、お富役者にはなれないとこが似てゐるだけである。煩く謂へば二人ともに何樣な芝居に出ても、立役も行けず、實惡も行けぬとこが似てゐるだけである。更に駄目を押せば役者の質が似てゐるといふだけである。

松助が或種の老役が行くやうに、菊四郎も或種の老役が行く。それとても松助のは碎けて引緊つたとこがあり、菊四郎のは生眞面目でふやけたとこがある。松助は久作などをやるとカリ〳〵音がするやうに、しやつきりし過ぎてゐるが、菊四郎は半兵衛などをやると、グタリと首を落して奈何にも萎びきつてゐる。

勿論松助と菊四郎では、役者の位に大分相違がある。一緒にして論ずべき代者では無いかも知れぬ。松助にくらべては調子も低ければ味も薄いし、また輪廓といふやうなものも何んとなし小さく出來てはゐるが、しかし、菊四郎とても確に當代に於ける老巧役者である。よし品質は高くないにしても、また役者は安く賣つてゐても、的確に自分の領分を持つた腕のある役者である。

菊四郎は大いに他を刺戟して感動させるといふやうな質の役者ではないが、サッパリした藝風の底に淡い味が流れて好くとも惡くとも江戸が殘して置いた役者の一人であるやうに思はれる。白をいふ時に齒を露して見せる癖の如きは色氣の無い役者ぶりに免じて彼是いふに

も及ぶまい。

## 五十五、尾上芙雀

尾上梅幸の門。初め尾上梅次郎。のち尾上菊次郎をつぐ。大正八年八月死去。

女優といふ奴が出來てから、切に芝居の女形が何うの此うのと詮議されるやうになつて來た。詮議があるだけ其だけ、歌舞伎劇の女形の影が薄らいで來たのだとも謂へるだらう。左にまれ女形らしい女形は、年々に影を消して行く。梅幸のやうな頭抜けた女形でも、年には敵はない。年々に色が衰えて行く。しかも其に取つて替るやうな女形が居ない。所詮古い葉はふるひ落されて、新しい葉が芽出して來ぬといふ有樣である。此の心細い折から、芙雀と松蔦の居るのは些か人意を強うするに足るとでも謂はなければなるまい。

芙雀は市村座組の立女形ともいふべき地位に据つてゐる若手のバリ〳〵である。芙雀が居なくては、些つと女形役者に困ると謂つたやうなところから、幅も利き、人氣もあり、また優待もされてゐると謂はなければならない。淺く考へたら芙雀は好い日の下に生れた役者とも謂へるだらう。



雖然芙雀には芙雀の芝居が出來ない。出來ないといふよりもさせられないと謂つた方が至當であらう。謂はば芙雀にも尙だ芙雀の芝居をするだけの勢力がない。昔の立女形とか、今の梅幸や源之助のやうに、自分がシンになつてやる芝居をさせられるだけの役者になつて居ないやうである。何時も菊五郎や吉右衞門に附隨して、大役をやり、重なる働手となつてゐるといふだけである。

これはしかし格別不思議のないことかも知れぬ。取立てゝ謂ふのが野暮といふ奴なのであらう。何んと謂つても芙雀は尙だ年が若い。加之家柄といふものも無い。市村座の門閥家連の中に加はつて、立女形といふやうな地位を占めてゐるのは、まだしも役者冥利ともいふべきかも知れぬ。或意味からいふと、女形拂底といふことが芙雀を引立てゝ、割合に早く好い役者にしたとも謂へる。

芙雀は顏から謂つても、また姿から謂つても、然う大して優れた役者といふではない。顏も姿も小柄に出來てゐるのが、女形に適してゐるには違ひないが、取立てゝ美しいとも麗しいとも、また品が好いとも意氣だともいふ人では無い。

例へば押出しで見せる花魁になつたとすれば、奈何にも小さくて見てくれが安つぽいし、藝者になつたとすればスツキリとはしないし、お姫樣になつたとすればお品がなし、女房役

も時代物の重い役となると、腹に薄いやうなところもあれば、鰭とか位とかいふものにも不足がある。間違の無いところは、或種のお妾役とか、世話物の女房とか、または鮨屋のお里といふやうな娘役であらう。娘役も八百屋のお七とか野崎のお染とかになると、芙雀持前のひねこびといふ奴が邪魔をして、ういゝ〳〵しいとか無邪氣とかいふ心もちを出し得ない。

芙雀は色つぽいとか艶だとかいふ分子は持つてゐるが、オツトリとしたとこも、可憐らしいとこも、また氣高いとこも意氣なとこも持つてゐない役者である。そしてつかとまでは謂はれぬにしても、どこやら蓮葉な氣分を持つてゐる。假に娘になつたとしても、それは男を知つてゐる奴に思はれる。男から思をかけられるといふよりも、自分から男に思をかけて行くといふやうな奴である。所詮浮氣つぽいとこも見えるのである。或は芙雀にくつついてゐるひねこびといふ奴が然う見せるのかも知れない。

芙雀の娘役は、確にういゝ〳〵しいとこも出すに違ないが、同時に隱さうにも隱されぬひねこびたとこを持つてゐる。八重垣姫とか雪姫とかいふお姫樣になると、小柄といふので見てくれが悪いばかりで無い、何んとなし娘つぽい氣分が顏に體に漂ふ。それで八重垣姫の持つてゐるオツトリとした艶いた心もちも出し得なければ、雪姫が持つてゐるつましやかなうちに女の一心とでもいふやうな烈しい心もちを出すやうな物も不適當のやうに思はれる。

「吃又」のお徳は明治四十二年五月の市村座。

「後藤」の關女は大正二年一月の市村座。

「毛谷村」のお園は明治四十五年三月の市村座。

それは柄や顏のせゐばかりだとは謂へない。芙雀の芙雀式白にも大分禍されてゐると謂はなければなるまい。

芙雀の白は妙にペチヤペチヤする。柔に粘つて、響も優しいが、輕つぽい。何んだかオチヨボ口で、薄唇の人のやうに思はれる。それで時姫は勿論、初菊や雛衣になつても、姫樣ぶりを安くする。

よし藝に申分はない、爲ることが行屆いてゐるとしても感じの上に不得心である。そして役者の質が小さく出來てゐるやうに思はせる。

自分の見たうちでは、「吃又」のお徳や「後藤」の關女などといふ女房役は芙雀の役々のうちで、最も傑出したものゝやうに思はれる。「毛谷村」のお園なども然うだと謂はなければなるまい。して芙雀には、此ういふ役どころが、最も欽役のやうである。其のうちでも關女の如きは、芙雀の役者ぶりなり藝風なりにピツタリ合つて、今思ひ出しても心持の好い出來榮であつたやうに思はれる。但し型の好い悪いは解らない、また扮裝等全て古格にはまつてゐたか何うか、それも解らない。しかも自分等が「腰越狀」といふ淨瑠璃を讀むで知つてゐる關女といふ女性が能く躍動してゐたとは斷言される。

芙雀は少し老けた、そして品のないやうな女に最も成功するやうである。然ういふところ

は幾らか先進門之助に似てゐるところもある。似てゐるとは謂へぬまでも、少なくとも役者の質に似通つたところがあるとは謂へるだらう。但し芙雀は、門之助にくらべると、遙に意氣だとかてつかだとかいふ分子を持つてゐる。それは出雲出の女と、關東育ちの女ほどの相違はあると謂はなければならぬ。

芙雀は門之助の堅實はないが、その代り門之助のやうに淋しい役者ではない。これを女にすれば、門之助は心から堅氣で野暮で陰氣で、やさしい一點張の女である、芙雀となると、大分はねつかへりで、浮氣つぽいとこがある。それだけ色氣も濃なら、賑なとこがある。それがまた「鮨屋」のお里のやうな娘になつて、大に成功する所以であるが、同じお里でも「壺坂」の方になると、門之助畑の物になつて、芙雀でも些と哀氣が薄くなるだらう。

芙雀は可愛氣はないではないが、哀氣と謂つては微塵も無い役者である。よし奈何なる役に扮しても、芙雀から哀といふものを感じさせられる度は極めて僅少である。藝にも柄にもシンミリしたとこが無いからであらう。

一口に謂へば、芙雀の藝は理につむでゐるとでもいふやうな質である。智慧と器用とで押して行くといふやうな藝風である。して其の器用はケレン式でないから、パッと光つて見せるやうなとこはないが、手堅く間違のないやうに刻込むで行くといふやうな行方に見受けられる。

此ういふ見方からいふと、芙雀は「腕」の役者と謂はなければならないやうである。また確に「腕」の役者に違ひない。八重垣姫には向かぬ、初菊は感心されないとは謂つても、それは拙いといふのではない。其の上手ぶりは、人を點頭かせる力が充分にある。姫様役ばかりで無い、娘役者としても女房役者としても、奥様役、若女房役、または花魁になる、藝者になる、横櫛式の女になる、毒婦になる、烈女になる——何をやつても、芙雀の腕は、其の役になつて見せるだけの用意と鍛はあるとしなければなるまい。それで或る度までの成功をする。見る方でも一應は感服する、雖然其の成功も感服も、遂に並に出來しましたといふ範圍を出ないやうである、所詮優等滿點といふところまで行く物が少ないのである。

芙雀は確に上手役者である。行屆いた舞臺ぶりを見せ得る人である。

雖然好い役者とは思はせ得ない役者のやうである。好い役者といふ實力はあつても、また好い役者と思ひたくとも然う思ふには何か不足がある。

芙雀は人を引付ける力の乏しい役者である。或は藝に熱の無いせゐかも知れぬ。それもあらう。それもあらうが、其よりも更に重なる理由は其の役者ぶりにあるやうにも思はれる。

顔は美しいには美しいが、ひねこびたところがある。そして艶はあつても、うるほひといふやうな物も、うまみも無い。姿とても然うである。姿は俗にいふ、小股のきれたやうなところがあつて、きりりとはしてゐるが、柳のやうにスラリとしたしなやかなところもなければ、海棠または牡丹のやうに艶麗だとか豐麗だとかいふ趣もない。

芙雀は此の人を引付けるやうなところがないので損をしてゐる役者ではある。藝には實があつてもまた其實にはナカ〳〵うまい味は持つてゐても、花のない役者のやうに思はれる。更に別な言葉で謂へば、花の頃から實になつて了つたやうな役者である。しかし此の實には味はある。また芬もある。

芙雀は大味ではないが齒切も好ければ口當りも好い役者である。そして花こそないが、好く實りかけた麗はしい果物のやうな感じのする役者である。

## 五十六、市村龜藏

幼名片岡太郎。明治四十四年四月より羽左衛門の弟分となり東京に永住。

當代の大立者市村羽左衛門の弟分だと聞いてゐる。以前は、片岡太郎と謂つた。仁左衛門の弟子であつたのだ。上方仕込の人らしい。

歌舞伎座に來て、最初の當役は「桐一葉」の秀頼であつたと思ふ。其の時は尚だ太郎と謂つてゐた。

「桐一葉」の秀頼は明治四十三年十月の歌舞伎座。

此の秀頼は確によかつた。品位もあり落付もあり、麗しさもあり、またオツトリしたやうなとこも見えて、確に秀頼らしい秀頼であつた。幕數も出ず、また格別爲どころとても無かつたのであるが、其の顔、姿、今に眼に殘つてゐる。謂はゞ印象が深かつたとでもいふのであらう。印象の深いのは、出來が優れてゐたからだといふ結論になる。

龜藏は大阪に生れて、東京で育てられつつある役者と謂つて差支へないだらう。其の役者ぶりには大阪のカラーも際立つて見えぬ代りに、東京芬も尚だついてゐない。名づけて中性の人とでもいふのであらう。

役者の質もまた然うのやうである。龜藏は役者として尚だ何等の特色も有つてゐない。若衆役でもなし、若女形といふでもなし、まア其邊のところにウロ〳〵してゐる役者である。

役者ぶりもまた然うである。龜藏は頭抜けて美しい役者だとか好い役者だとかいふのではないが、中通りに出來てゐるとは謂へる。娘役とか若い女中だとか藝者にでもなると、些つとぎすつくやうなとこだの、所故らしいしなが目につかぬでもないが、それは上方の芬のとれきらぬからだと思へば、辛抱も出來る。

がしかし龜藏の若女形は、何がなし野暮つたくて繪でいふと、線は細くて些つと見ると綺麗なやうだが、どこかに堅いところがあつて、色彩も生々しければ、一體に未熟といふ調子が浮いてゐるやうに思はれる。

未熟といふと、何んだか龜藏が拙役者といふことになるが、茲にいふ未熟とは、必ずしも拙といふのでは無い。龜藏は上手役者といふことは出來ないまでも、決して拙とは謂へぬ役者である。歌舞伎座に於ける役どころから謂つても、また役者の地位といふやうなものから謂つても、龜藏は身分相應の藝もあれば働もあるやうだ。自分の見た限りでは、龜藏を大してうまいと思つたこともないが、また拙いと思つたこともない。またうまい拙いが際立つて目につくやうな役もしたことも無い。――未熟といふのは其點である。

平つたく謂へば龜藏は、尙だ熟した自分の腕を見せるだけの役者になつてゐない。よし自分には見せたい腕はあつても、見せるだけの資格を與へられて居ない。藝術品として所謂未成品なるものである。

雖然質を謂へば、前述の通り若衆役とも、若女形ともつかぬところにウロ〳〵してゐる。これを拔けて、鴈治郎式立役になるか、羽左衞門式立役になるか、それとも宗十郎のやうな兩刀つかひになるか、または門之助式純女形になるか、此の見當は些つとつけ難い。只しかし顏や柄で賣出せる役者に出來てゐないのだから、何處々々までも鍛えに鍛えた腕で大きな役者にならなければならない人であるといふことだけは斷言される。

九世市川團十郎の門。初め市川猿之助。大正十一年二月死去。

今の猿之助、八百藏、小太夫の父。

## 五十七、市川段四郎

市川段四郎

歌舞伎劇壇の大元老の一人である。門閥の笠を被らずに、低いところから腕一本で、今の地位に經登つた百戰の老將軍である。そして方今、有數な芝居道の故實家であるらしい。

其の藝の質を謂へば、面積に於て素敵な廣さがあるやうである。達者と謂つても、恐らく段四郎程達者な役者も少なからう。只達者と謂つては、或は段四郎の勿體に傷がつくかも知れぬが、左に右融通の利き過ぎる位に融通の利く藝である。謂はゞ好い意味の達者藝とでもいふのであらう。

先づ踊りが行く、型物が行く、世話物が行く。是を細に謂へば、時代世話の老役、敵役、端敵、立役、或は一種の老女役、それこそ四通八達で、座頭役者としても、ワキ役者としても、思ふまゝに確な腕を揮ふ。加之立廻りも上手なら、ケレン物も行けるといふ。段四郎は確に「腕」の役者で、役の領分の廣いだけでも、當代に於ける模範的役者と謂つて差支ない

だらう。

段四郎は大きな役者だとか立派な役者だとか、また頭抜けて好い役者だとかいふことは出來ないかも知れないが、鍛えに鍛えられた確な役者だとか、または優れた役者だとは敢て斷言される。

段四郎は鍛えに鍛えて出來た役者である。長所も其處にあるが短所も其處にある。鍛えに鍛えて圓熟した舞臺ぶりには、手堅さに於て無類としても、味に乏しいとこがある。藝も呼吸も、苦勞人らしく行屆いてはゐても、餘り光り得ない。成程と見物を納得させる力はあつても、あつと感服させる閃がない。

段四郎の舞臺は全て動いて見せるといふ行方である。味が乏しいといふのも何うも其點から來てゐるらしい。全く其ばかりとは謂へぬにしても、それが重なる原因となつてゐるらしい。

踊を見ても然うである。踊は段四郎の持つてゐる身上の大きな物の一つである。そして上手だとか、巧者だとか、或は名人だとか謂つて、殆ど極附の物になつてゐる。虛實は知らないが、段四郎の踊は、よし何樣な踊にしても、毎日踏む足どころが舞臺の板を一枚と狂はぬとまで謂はれてゐる。段四郎の踊は、其程に修練された手堅いきちようめんな物だといふ。



雖然何んだか味に乏しい。そして何んとなし安手なところがある。

一口に謂へば藝が平面的だからでもあらう。幅はあつても、底は淺いところがあるのかも知れない。腕はあつても、腹が平凡だからかも知れない。左に右段四郎は、その動にそつがないとしても、其の構に慊らぬとこのある役者である。構が慊らぬと謂つて、何も形が惡いといふのでもなければ、押出しが惡いといふのでもない。これを繪に例へていふと、段四郎は好く描かれた繪に違ないが、其の筆勢に言分のあるとでもいふのであらう。現はれた形や色彩に非點はないにしても、眼に見る物以外に何か缺點を持つてゐるやうである。

此の缺點を剴切に言現はすといふことは頗る難しい。しかし此ういふことは謂はれぬことも無いだらう。段四郎は萬能に長けた役者ではあるが、心の一角に缺けたところのある役者である、と。それで團菊兩方の繩張内へ足を踏み入れてゐる重寶役者でありながら、團十郎にもなり得なければ、菊五郎にもなり得ない役者である、と。

何をやらせてもそつの無いのは、段四郎の腕の力である。何をやつても頭抜けて光り得ないのは、役者としての天分に缺けたところがあるからであらう。何んにしても舞臺の調子の低いのは、段四郎に取つて大きな損とも禍とも謂はなければならない。

段四郎は其の役者ぶりも舞臺ぶりも、味が乏しいと同時に品位にも乏しい。と謂つて、

意氣なとこがあるといふではなし、根強いやうなとこがあるでなし、また梅玉のやうにふつくりしたとこがあるでもなければ、先代左團次のやうに武張つたとこか、調子の好いとこがあるでも無い。そんなら段四郎には、段四郎らしい際立つた特色があるかと謂へば然うでも無い。

何方かと謂へば段四郎には、特色といふほどの特色はないやうに思はれる。そして下品とまでは謂ひきれないにしても、調子の低いといふことが、ともすると然ういふ傾も無いとは謂へないやうである。

際立つた特色がない、味に乏しい、そして品位もないと謂つて了つては、段四郎といふ役者が甚だダイなしになつて了ふ譯である。けれども段四郎には大きな腕がある。鍛えに鍛えた大きな腕がある。そして四通八達の才と、その才を活かすだけの老熟した藝がある。此の腕と才と藝とは、彼の不足な天分を補つて、方今彼が劇壇の老將軍として濶歩してゐる所以ではあるまいか。

繰返していふ。段四郎は「腕」の役者である。そしてまた藝の役者、才の役者である。よし其の器は高い價値はないにしても、その力は敬重しなければならぬ。もし段四郎に、今少しの品格と、味とを有たせたなら、方今無類の「勸進帳」の辨慶役者であり、「對面」の五郎役者であり、「酒井の太鼓」の酒井役者であり、そして由良之助役者であり、仁木役者であり、實盛役者であり、御所の五郎藏役者であり、野晒悟助役者であり、そして大判事役者であり、定高役者であつたかも知れぬ。無論是等の役々のうちには、段四郎の當り藝とも得意藝ともなつてゐるものもあるだらう。

しかし假其が當り藝となり得意藝となつてゐたとしても、何れも夫々に多少の缺點と幾分の不滿足は免れぬ。また繰返していふやうだが、それはしかし藝が何うだかうだといふのでは無い。藝は立派だが、段四郎の顏とか柄とか、または調子とか白とかに、然ういふ役々に何うもしつくりしてゐないところがあるからである。

素顏でみると段四郎の顏は、眼付口元に、穩當で、且つ柔和な相が備はつて、奈可にも角立たない人のやうに思はれる。そして貴族的の品位とは謂はれないまでも、大どころの大旦那らしい品もある。それが舞臺顏となると、少しばかり高い頰が馬鹿に目について、柔和な眼までが、嫌に狡つ辛い光を放つ。そして顏が險相になつて、お品も穩當らしいところも無くなつて了ふ。それが何樣な扮裝であつても、些つと一と癖ありさうな油斷のならない氣分が顏に附纏つて、役柄に裏切する場合が多い。

白とても然うである。少し鼻にかゝるやうな段四郎の聲は、高い響もなければ、強い力が

あるといふではなし、また太い調子があるといふのでもない。さればと謂つて、しぶ味があるとか、根強いとこがあるとかいふのでも無い。さればと謂つて耳障になるやうな惡い癖もない代りに、又これと謂つて好ましいとこもない。好く謂へば者馴れた可もなく不可もなしとでもいふ白だが、少し苦りきつていふと、餘り有觸れたやうな、淺薄な俗つぽい白だとも謂へる。只調子が低いばかりではない、何んだかパサ〳〵して、此の頃の言葉でいふと、所謂藝術的氣分なるものが甚だ乏しいやうに思はれる。深味がない、大きさがない。そして重みもなければ、うまみもない。要するに鍛えに鍛えた手練で、誰にでも解るやうに描かれた繪のやうな白である。

段四郎は好く出來た役者である。しかし奈何にしても風韻といふやうなものに乏しい役者である。

椋右の見たものゝうちでは「在原系圖」の蘭平なぞは無類の出來であつたやうに思はれる。那如いふ腹とか氣品を要しない、謂はゞ動きで見せるやうな役になると、鍛えた藝が陸離たる光彩を放つて、段四郎を耐らなく好い役者にして了ふ。「新薄雪」の團九郎なども當り役のやうであつた。

「先陣館」の和田兵衞の如きも大いに光つて見せた。そして段四郎の大きさとか貫目とかい

「在原系圖」の蘭平は、明治四十三年三月の東京座。

「新薄雪」の團九郎は明治四十三年四月の歌舞伎座。

「先陣館」の和田兵衞は明治四十二年十月の歌舞伎座

「鎌髭」の良門は明治四十三年十月の歌舞伎座。

「菊畑」の智慧内は大正元年十一月の歌舞伎座。

「岡崎」の幸兵衞は大正二年四月の歌舞伎座。

「黑田騷動」の彌平次は明治四十一年十一月の歌舞伎座。

「春雨傘」の鐵心齋は初演以來の持役。

ふものも、丁度此の和田兵衞あたりの程度らしい。北條時政となると、顏付の陰險らしいとこが其人になつてゐたとしても、芝居味があり、立派に見えたことは反つて歌六の方が優つてゐたやうに思はれる。但し「鎌髭」の良門の如き錦繪的の姿となると、それこそ活きた錦繪で立派といふのか、華麗といふのか、其の形の好かつたことは、今にマザ〳〵と目に殘つてゐる。然に「菊畑」の智慧内となると、蘭平系に屬する役でありながら、不思議に段四郎の役者を小さくして、餘り芬しからぬ出來榮のやうであつた。「岡崎」の幸兵衞のやうな役になると、段四郎の優れた大部分と、小部分の弱點とが、かつきりけじめがついて見える。優れた部分とは、其の動とか形とかしぐさに、奈何にも行屆いた親切が見え、弱點の部分とは、氣魄に不足があつて幸兵衞といふ人物が小さくなつて見えることである。殊に幕切の笑の如きは、段四郎は遂に調子の低い役者であるといふことを思はずに居られなかつた。しかし段四郎は、役に依つては、此の調子の低いのが利いて、素敵な成功を見せることも少なくない。「黑田騷動」の獵師彌平次の如きは其の一例である。「春雨傘」の逸見なぞも然うだと謂つて差支はあるまい。逸見が曉雨の店に來て强談するところなぞは人柄と謂ひ巧さと謂ひ些つと眞似手はあるまいと思はれる。此の他尙だ然ういふやうな役は少ぐは無いだらうが、こにには只例として思出したまゝを書いたゞけのことである。

種々謂つては見たが、結局段四郎は、老練な上手役者で、調子が低いと同時に、うまみの無い役者だといふことになるのである。そして力はあり、腕は確であつても器は小さいといふことにもなる。質を謂へば世話役者のやうであるが、しかし藝は時代的にも出來てゐると謂へる。其の藝を謂へば、量から謂つても質から謂つても、當代五指に屈すべき座頭役者であらうが、其の器を謂へば、遂に着實老巧なるワキ役者を以て甘んじなければならぬ人のやうである。

## 五十八、市川荒次郎

先代市川荒次郎の男。

福藏時代には、所謂棒鱈組のチャンピオンで、福藏といふ人もなかつたやうである。ところが此の四五年來、荒次郎の名が大分賣れて來たのと同時に、腕もメキ〳〵上つて來た。そして此の人も矢張壽美藏左升などと共に、左團次組の新しい役者の一人で、荒次郎の名が賣れて來たのも新しい役者の仲間入りが出來たからである。

荒次郎は嚴しい意味でいふ、新しみのある役者だとか、新しい役者だとかいふのではない。在來りの物をやるよりも、左團次組の特色とも謂ふべき新作物の役々に扮すると、荒次郎式箇性を發揮するとでもいふのか、侮り難き腕前を見せるといふだけのことである。所詮在來りの役者に對して、新しい役者だと謂つただけのことである。それは左升壽美藏とても同斷で、彼等が果して新しい役者になり得るか何うかは、十年後の結果に見なければならない。

顏が長いといふよりも腮の長いのが、此の人の特色の一つである。それで何ういふ舞臺に出てゐても、荒次郎は直に誰の目にもつく資格を持つてゐる。藝といふのではなしに、また調子とか柄とかいふものでなしに、荒次郎は些つと目につく役者である。荒次郎に取つては腮もまたナカ〳〵大切な看板と謂つても差支が無いやうだ。

腮の荒次郎は、その白にも荒次郎式特長を持つてゐる。舌ッたらずといふ程でないにしても、然ういふ氣味がある。或は舌が長いのかも知れない。何んにしても甘つたるく縺れたやうなとこがある。その音は濁つて、響も太いが、その調子にゆるむだやうな、ぼやけたところがある。假にドスが利いたにしても、何うも腹の底から出る奴とは思はれない。所詮力が足りない。

年が若いと謂へば其迄である。しかし其ばかりでは無いやうだ。尙だしつかり性根が入つてゐない故もあるだらうが、荒次郎の聲には天性輕つぽいとか浮ついてゐるとかいふ缺點があるやうだ。

聲から謂つて荒次郎は、大きな役者とか、重味のある役者だとかいふ質の役者ではないやうだ。其の聲に些つと太いとこがあり強いとこがあるやうに、役に依つては、其の舞臺ぶりにも、些つと大きなとこが見え、重味があるやうに見えることもあるが、何うもどつしりしたとこがないばかりか、それが借物のやうに思はれて、重さも大きさも丸太ん棒式に見えることもある。

父荒次郎は丸々と肥つて、愛嬌で賣つてゐた三枚目役者であつた。舞臺はぶきつちようで、ぶきつちようのうちに人を引付ける愛嬌があつた。舞臺のぶきつちようなことは、荒次郎は頗る父荒次郎に似てゐる。しかし自ら愛嬌のあつた父荒次郎とは反對に、荒次郎は頗る無愛想である。そして荒次郎には無愛想である其事が反つて愛嬌のやうになつてゐる。

荒次郎の舞臺ぶりが、無愛想で、そしてぶきつちようなのは確に特色の一つである。顏にも柄にも、また藝にも、色氣もなけれどそつけもしなもない。嫌味がないと謂へば謂ふのだが、それにしても丸太ん棒式が餘り利き過ぎると思はれぬでもない。

しかし此の丸太ん棒式のところに、反つて荒次郎一流の面白味はある、若いとか新味があると謂はれてゐる役者たちのうちでも、荒次郎は際立つた特色のある役者である。うまいとか拙いとかいふことは別問題として、荒次郎は荒次郎の特色に活き、特色に目立つ役者である。

一時、猿之助に從いて左團次の許を脱したが、間もなく歸つた。

ぶきつちようだと謂つても、此の頃の荒次郎は決して棒鱈組に編入することは出來ない。普通の芝居の端敵なぞをやると、不手際なこともあり、お若輩たるを免れぬことがあり、また藝がないとか素人くさいとかいふけちをつけられぬでもないが、左團次芝居の新劇をやると失敗が少ないばかりでない、一流の腕前と、そして特色を發揮して、大に光もすれば、當ることもある。此の場合に於ける荒次郎は、素人くさいとかぶきつちようだとかいふことが、反つて彼に助勢して好い役者とするらしい。

荒次郎は融通の利かぬ役者であらう。また其の領分も少ない役者であらう、しかし特色は有つてゐる役者である。自分の欲る壺を發見したら、また荒次郎の柄にある役をさせたら、確に使へもすれば或程度まで發展もすれば大くもなる役者のやうである。少くとも平凡でない役者にはなれるだらう。更に割引をして謂つても、えらい役者にはなれないにしろ、左團次組には無くてはならない役者になるだらう。荒次郎に取つては、役者らしくないといふことが、價値でもあり、また誇である。

荒次郎は荒次郎のまゝに生長らせたい。惡く役者らしくなつたり巧者ぶつたりすることは此の人の爲に取らない。荒次郎は何處までも丸太ん棒式の役者として、早く重い役者になつ

て貰ひたい。繰返していふ、ぶきつちようとか、素人くさいとかいふとこがあるだけに、荒次郎には、今迄の役者に對する約束とは違つた、一種の見どころがあり、將來に期待されるところがある。器用と融通の利くのと顏の生つ白いばかりが役者の生命ではない。荒次郎には何うか普通の役者かぶれをさせたくないものである。そしてしつかりした性根と鋭敏な理解力とを腹の底に植付けて遣りたいものである。荒次郎君の奮勵を望む。

## 五十九、市川吉三郎

市川中車の門。初め市川百々次。死去。

八百藏門下の高足とでもいふのであらう、八百藏門下として歌舞伎座で名題披露をされたのは此の人が眞つ先で、また此の人だけであつたやうにも覺えてゐる。歌舞伎座に於ける役どころを謂へば中二階の女形さんである。自分の見た限りでは未だ此うと取立てゝいふ程の役をしたこともなければ、從つて腕を見せたこともないやうだ。芝賞や芝琴または歌門なぞと一緒に、少し氣の利いた腰元衆や仲居――まア四五人並んで出る若い女形ばかりやつてゐる。と謂つて、歌門のやうに小芝居で賣込むでゐるといふのでもないから、格別人氣もなければ舞臺に出て目に立つといふこともない。損な人だと思ふ。

初め中山鶴五郎、明治十年頃東上、同十二年八百藏をつぐ。大正七年中車と改名

若い女になると顏が貧弱で色氣に乏しいが年增にでもなると、スラリとしてゐて女ぶりを上げる。人氣もなければ、目にもつかないが、さすが歌舞伎で育つてゐるだけに、舞臺が神妙で、變にぶるとか出過ぎるといふやうな嫌味のないのを取柄とする。

## 六十、市川八百藏

八百藏は此の二三年來――的確に謂へば、左團次一座の上置として、本郷座で『安宅勸進帳』を出してから、些つと息を吹返して來たやうな形がある。何も八百藏が若返つて來たとか、舞臺に油が乘つて來たとか云ふのではない。八百藏が八百藏を見せるやうになつて來たのである。または見せられるやうになつて來たのである。平たく謂へば何んのことはない、役をするやうになつたといふだけである。八百藏自身に取つては何んのこともないかも知れないが、我等芝居好に取つては、先づ以て結構なことゝ祝つて置く。と謂つても八百藏は、その以前歌舞伎座に居據つてゐた時でも、滿更八百藏を見せぬではなかつた。けれども其の機會は確に少かつた。一時は段四郎ほどに役のつかなかつた時代もある。それが松竹の手の人になつて、左團次一座の上置となり、鴈治郎と一座するやうになつてか

ら、頓に八百藏が光つて來た。光つて來たといふよりも、光れるやうになつて來たといふ方が至當であらう。

そこで先づ此の二三年の間に、八百藏が八百藏の芝居として見せたものを擧げて見ると、「安宅勸進帳」を手初として、湯殿の長兵衛、十木傳七、求女塚身替新田、清正誠忠錄、是等を重なるものとして、他に仁木彈正や「寺子屋」の松王といふやうな大役をやつて、よし其のうちには左や右うの沙汰のあつたものもあるにしろ、兎にまれ好劇家を唸らせた。また大阪では、鴈治郎一座の「天下茶屋」で安達元右衛門といふやうな敵役で、大阪人に天下一品の折紙をつけさせた。——是等は何れも八百藏が八百藏を光らせた芝居、または役々である。

「安宅」の辨慶はこの優に書き卸し。大正元年十月、本郷座に再演

勿論八百藏は、歌舞伎座に居据つてゐる時分でも、座頭どころの大役をしないではなかつた。例へば「妹脊山」の鱶七とか、大判事、「三代記」の佐々木、「忠臣藏」の由良之助とか平右衛門「黑田騷動」の栗山大膳、「新薄雪」の幸崎と妻平、「春雨傘」の釣鐘庄兵衛、「志渡寺」の森口源太左衛門、「大晏寺堤」の加村宇多右衛門、或は「金閣寺」の大膳だとか、「先陣館」の和田兵衛だとか微妙だとか、「濱松屋」の南鄕だとか、「先陣問答」の平次景高だとか、「佐倉宗吾」の幻長吉だとか、「川中島」の山本勘助だとか、または齋藤内藏助だとか、「經ケ島」の清盛だとか隨分好い役をしてゐたに違ない。しかし自分の知つてゐる限りでは、八百藏の芝居として見せたものは、あの永い間に、「地震加藤」と「逆櫓」の樋口位のものであつたやうに思はれる。無論これだけが、團菊歿後、八百藏のした役のすべてといふのではないが、ざつと先づこんなところと謂つて差支はあるまい。さうすれば此の二三年來の八百藏の活動ぶりは大したものと謂つて可いやうだ。

舊歌舞伎座を脱して、當時東京では新しい興行師であつた松竹の手について冴えて來たのである。

それは然うとして、以上ならべた役だけを見ても、約八百藏といふ人の藝風が窺はれる。要するに八百藏は、役の領分の廣い役者である。以上ならべた他に尙だ得意藝とでもいふやうなものを擧げると、「先陣館」の盛綱とか、「布引」の實盛とか、「後藤」とか、「煙草切」の政右衛門とか、折紙つきのものが少なくない。また「伊勢音頭」の貢や、「恨鮫鞘」の八郎兵衛や、「安達三」の貞任や大藏卿、「東天紅」の菅相丞、「嫩軍記」の熊谷、島の爲朝、「天狗舞」の高時——是等も八百藏の立派な持役と謂つて然るべきである。まだ此の他に民谷伊右衛門と謂つたやうな色惡どころも行けば、「紙治」の太兵衛と謂つたやうな安敵も行く。而して織田大炊とか大久保彦左衛門、または「先代萩」の外記といふやうな老役は、極付の本役として、ワキ師としては富樫役者であり、「馬盥」の春永役者であり、また「金閣寺」の藤吉役者であり、對決の勝元役者である。更に其昔を謂へば、「女治店」の與三をさへやつた人であ

る。更にまた河内山とか、毛剃とか、「千本」の忠信とか、權太とか、知盛とかいふやうな役の心得もあらうと云ふ人である。それで「乳母爭」の篠原がいけて、「合邦」の玉手がいけて、「先代萩」の八汐がいけやうといふ人であるから、勿論「太功記」の操やさつきは何んの雜作もない役に違ない。

何んと謂つても、當今八百藏のやうに役の領分の廣い役者はないだらう。そして役が廣いと謂つても、八百藏は所謂達者役者だとか、重寶役者とかいふ質の役者ではない。謂はば何んでも出來る腕前を持つてゐながら、自分の眞んとの領分を堅く守つて、それから容易に足を踏出さぬといふ手堅い役者である。それで團菊のワキ役者として、永い間自分を沒却して腕を鍛えてゐた。鍛えた上にも鍛えてゐた。されば一口に謂へば、八百藏は腕の役者である。鍛えに鍛えた腕の役者である。而して腰も据われば腹も据わつて、只無法にしつかりした役者である。從つて舞臺も大きい。

しかし其の柄を謂へば、大きな人でもなければ、すぐれて立派だとか、または際立つて何うといふ方ではない。筋肉が引緊るだけ引緊つて、體つきがほつそりと、只ガツチリ出來てゐる。樹でいふと樫のやうな感じである。

顏付としても然うである。八百藏の顏は、小鼻が怒つてゐるのと、眼と口元に些つと柔な愛嬌のあるのが眼につくだけで、どこにも取立てゝ好いといふところが無い。もし役者が役者だつたら、貧弱とでも謂はれさうな顏である。けれども藝の力か、役者の位か、はたまた體質か、奈何にも緊張して、一分のゆるみもない。そして筋一とすぢにも恐ろしい反撥力が潜むでゐるかと思はれる。所詮柄にも顏にも華麗なとこはない役者である。また柔和にも乏しい。而して八百藏の柄にも顏にも、「分別らしい」と、「怜悧らしい」とが、何ういふ役にもついて廻るといふことが世の定評になつてゐる。それだけまた其の役者ぶりにも舞臺ぶりにも、落付と品位があるのだと謂へば然うも謂へる。

繰返していふ。八百藏は柄も小さい方なら、顏も好いといふ役者でない。けれども押出しが立派なら、調子も好い役者と謂はなければならない。押出しの立派なのは、鍛えに鍛えた體に自ら貫祿が備り、幅の無い柄に幅が加はり鰭がついて、歩きぶり一つにもドツシリした落付と重味とがあるやうになつたのであらう。そして調子の好いのは、その聲にすぐれた天分があるからであらう。

八百藏の聲は確に、八百藏といふ役者を大きくしてゐる重なる要素になつてゐると謂つて可いやうだ。成程その聲は一本調子である。けれども凛々として響渡る、その響には、底の知れぬ力が籠つて、明快であり、雄勁であり、奈何にも腹にこたへのあることを思はせる。

此の頃はや、聲量が衰へて來て幾分爽な感じは減つたが、その代り所謂サビがついて來たやうに思はれる。而して聲の出し方は、よし一本調子であるとしても、聲其物には相應に變化があると謂つても可いだらう。卽ち仁木のやうな役に扮しては、剛惡となり、「三人笑」の幸崎のやうな役に扮しては悲痛となり、地震加藤または「逆櫓」の樋口のやうな役をすると壯烈になる。只しかし顏にも相にもしながないやうに、聲にもしながない。色氣がないと謂へば然うも謂へる。けれども何時聞いても感じの好い聲である。

顏と聲と柄と藝——これを引つくるめて見て、八百藏は遂に華麗なとこのない役者である。これが役の上に、また人氣の上に大きな損をして、團十郎のやうな役者にも、また菊五郎のやうな役者にもなれずに了つた人らしい。實力を謂へば、そんなに大した違ひはないとしても、八百藏には辨天小僧も出來なければ、お祭佐七も、また髮結の新三も「菊畑」の虎藏も、八重垣姫も、保名も、葛の葉も、助六も、景淸も、道成寺も出來さうに思はれぬ。また羽左衞門式の江戸前らしいスッキリしたとこもなければ、鴈治郎式の口當りの好い味も有つてゐない。——所詮うまいとは思はせても、腕で感心はさせても、人を引付ける力を缺いてゐるのである。それで歌右衞門の亭主役者として、當代の第一人として的確な地歩を占め得ないのである。これは、しかしながら八百藏に取つて遺憾なことであるばかりでない、我等芝居好に取つても何んだか惜しいやうな氣がせぬでもない。

しかし斯う謂ふのは贅澤な沙汰かも知れぬ。八百藏は可成廣い八百藏の天地を有つてゐる役者である。八百藏の爲に辯ずれば、華麗でない其事が、色氣に乏しい其事が、八百藏の本領であるかも知れぬ。而して押しも動かしもならぬ立派な座頭役者である。殊に型物にかけては、當代此の人の右に出づる者はないだらう。要するに八百藏は、名人の芬のついた大きな上手役者である。骨つぶしの硬い腕利である。——何んにしても此の名器が、眞骨頭を發揮して、些々光つて見せるやうになつたのは、藝壇の爲に慶すべきことである。

## 六十一、中村吉右衞門

三世中村歌六の男。

代表的の人氣役者である。而して問題の役者である。それは好い意味にも惡い意味にも、所謂「吉ッちやん」なるものは、劇壇の瞰の中心になつてゐる。それだけ吉右衞門の人氣は大したものである。

一時體を惡くして、舞臺ぶりが荒く衰へてゐたやうであつたが、昨年あたりからまたスッカリ恢復して、盛綱、大藏卿と謂つたやうな逸品に、吉右衞門黨を唸らせた。今年になつて

中村吉右衞門

から「新薄雪」の幸崎といふやうな皮肉な難役に手をつけて、いよ〳〵其の本領を發揮しやうとした。

吉右衛門は人氣役者ではあるけれども、花形式の華麗なとこは微塵もない。何方かと謂へば地味一點張の役者である。而して子供役者時代のキビ〳〵した齒ぎれの好い藝風は、青年になつてや、因循になり、控目になつて來た氣味はあるけれども、根が大物をこなしつけて來た腕前である。左右うは謂つても、大物をこなしつける腕だけ購つても、傑物と謂はなければならない。

吉右衛門は正札のついた傑物である。よし早熟者に共通な缺點があり悲哀はあつても、若手役者中の出色である。嶄然として群小を拔いてゐる。

しかし吉右衛門の爲に謂へば、少年にして名を成し過ぎたといふ傾がないでもない。梅ケ谷は若くして横綱になつた爲に、面白い相撲の取れる盛りに、面白い相撲が取れなかつたと愚痴を謂つたことがあるさうだ。所詮貫祿が邪魔をして、若い心もちを縛りつけ、思ふまなる働をさせないのである。吉右衛門とても然う謂つたやうな窮屈な目に逢はされてゐないではない。そして其で損をさせられてゐないでは無い。

直截に謂へば、吉右衛門は餘りえらくなり過ぎた。なり過ぎたといふよりも、され過ぎたといふ方が至當であらう。吉右衛門は尙だ實も入らないうちから、ハシリの果物でも珍重するやうに、ワイ〳〵騒立てられた。吉右衛門が恰悧な人であつたら、少々面くらひの氣味もあつたらう。しかし人情といふ奴は、えらく思はれたら、えらく見せたくなつて來る、實が入つてゐないでも、實が入つてゐるやうに思はれたくなつて來る。吉右衛門にも多少其の氣味がないとは謂へないやうだ。

それで舞臺が苦しさうで窮屈に見える。けれども拙い役者といふことは出來ない。上手な役者を、より上手に見せやうとして、跼くやうなことはないではないが、奈何な非吉右衛門黨も拙な役者といふことは出來ないだらう。

吉右衛門は上手な役者である。そして何人にも同情され好かれるやうに出來、萬人向の役者である。それは舞臺ぶりが好いばかりではない、その役者ぶりに何んとなし人に好かれるやうなおとなしやかなところがあるからである。

役者ぶりがおとなしやかだと謂つて、吉右衛門の藝、または舞臺ぶりがおとなしやかだとはいへないかも知れぬ。成程性質を謂へば小心であり、それが舞臺に現はれて遠慮となり控目となつてゐるかも知れないが、おとなしやかとは謂ふことは出來ないやうである。强て謂へば、此の人の落付いた柄と、沈んだ調子と、地味な藝風とかが、おとなしやかに見せない

ではないが、舞臺ぶりの「質」とかいふやうなものは、決しておとなしいとは謂へぬ。

吉右衛門は果物でいふと、無花果のやうな役者である。花のない役者である。また花を咲かせずに直に實つて了つたやうな役者である。そして味も單純である。味が單純であると同時に、藝の領分も、丁と定つてゐる。そして其の定まつた領分の狹い役者である。しかし領分が狹いと謂つても、味が單純だと謂つても、それは吉右衛門といふ役者に何等影響するところが無い。

若くても吉右衛門はもう出來て了つてゐるやうな役者である。若い老大家である、其の努力的、壓搾的の舞臺ぶりに、一種吉右衛門式の型が出來て了つてゐる。而して吉右衛門は、確に當代に於ける座頭役者である。藝風が窮屈でも何んでも、役者の質が然う出來てゐる。そしてまた其處に吉右衛門といふ役者の强味もある。

藝の質も、役者ぶりも弱々しいが固く出來た方である。淋しいがしつかりしてゐる方である。それで型物役者とか時代物役者とかいふ方なのであらう。世話物も「夏祭」の九郎兵衛あたりの幾分古風物であつたら確なものであらう。女形となると、政岡のやうな物でも所謂柄にない方である。よくこなしにはこなしても、それは單こなすといふに過ぎぬ。時代物にしても全て白く塗らなければならぬ役は不向としなければならない。藝にも柄にもしなやかなとこが無いからである。それで型物も「實盛」といふやうな柔味を要する物にかゝると餘り芳しい收穫がないやうである。

夏祭は明治四十二年七月に、政岡は大正二年一月に、初めてつとめた。

雖然何んと謂つても吉右衛門は座頭役者である。弱々しくても何んでも、押も押されもせぬ座頭役者に出來てゐる。「陣屋」の熊谷役者である、「毛谷村」の六助役者である、「酒井の太皷」の酒井役者である、「八陣」または「地震加藤」の加藤役者である、その出來不出來は別として、それを賣物ともし、また然うした役どころの役者になつてゐる。「忠臣藏」では無論由良之助役者、平右衛門役者である。しかし定九郎は可いとしても、勘平となると其の領分以外の物のやうに思はれる。

吉右衛門はまた、藝にも柄にも「惡」の分子の少ない役者である。吉右衛門が奈何に顏を險相に扮つても、また奈何に構を圖太くし猛々しくしても、剛にも、奸にも、佞にも——すべて惡人にはなり得ない。

吉右衛門は顏にも柄にも、艶も柔味もないと同時に、憎氣の無い役者である。そして淋しいうちに一種の愛嬌のある役者である。それで「馬盥」または「十段目」の光秀でも、或は仁木彈正でも、よし押出しは其人らしく見え、貫目には不足はないとしても、腹から骨から其人になることが出來ないやうである。いや、其程の大惡人でないにしても鐵山式の惡人

も權太式の惡黨も、すべて「惡」と名のつく役には不適當のやうである。

それだけ吉右衛門といふ役者には「善良」といふ分子が多いのだと謂へば、然うも謂はれる。顏を見ても、姿を見ても、また聲を聞いても、吉右衛門は、何んとなし善良らしく見える役者である。これがまた人好がして、人氣のある所以であらう。

座頭役者として、吉右衛門は餘り畑の廣い方とは謂へぬ、ワキ役者としても矢張然うである。しかし何點かに頭抜けて傑れたとこを持つた役者である。今の年で、立派に由良之助が出來るだけでも凡庸な役者でないことは保證される。

藝か、人柄か、吉右衛門には甚く大人びた落付のあるのも尊い特色である。そして其が此の人の全生命とも謂つて可いやうだ。

何うか吉右衛門には餘りいぢいぢして貰ひたくないものである。そして餘り惡跪きをして貰ひたくないものである。吉右衛門が平靜に、割合にサラ〳〵した舞臺ぶりを見せる時に限つて自なる吉右衛門の才氣と面白味とが流露する。同時にキビ〳〵とした齒切の好い腕前を見せることがある。

それにしても體の癖とでもいふのか、首が突出し氣味になつてゐると同時に、體の前こごみになるのは、よし其が何ういふ役柄であつても、見た眼に形がよろしくない。それで吉右衛門の役者ぶりの傷つけられる場合も少なくないやうだ。矯められるものならば矯めて貰ひたい。

吉右衛門は一體に落付いた役者ぶりであるが、うるさい癖がある。そして其が段々と父歌六に似て來るやうである。殊に「布引」の瀨尾と謂つたやうな役をやる場合に其が目立つ。而して歌六の影響を受けない癖としては、妄と首をギクシヤク動かしたり、下唇を嚙むだり、または切に口をあけたり閉ぢたりする。そして其が何うも神經的に發作するらしい。勿論それは誰にでも夫々の癖がある。必ずしも仰々しくいふほどのことはないが、しかし吉右衛門としては、それが折角の落付をぶちこはす場合もあるといふことを考へて貰ひたい。

もし吉右衛門に此のうるさい癖が無くなり、もう少し平靜に、もう少し大膽に、而してもう少し樂に、舞臺に立つやうになつたならば、吉右衛門の役者ぶりに一段と光彩が加はつて來るだらう。昨年暮の「大藏卿」の如きは、必ずしも平靜であつたといふのではないが、しかも吉右衛門としては樂に動いてゐるやうに見えたので、見てゐて心もちが好かつたばかりでも、吉右衛門近來の當り藝であつたといふを憚らぬ。近いところでいふと、扇屋の熊谷——

——これは此の人の陣屋の熊谷よりも確に優れた出來であつたと思ふ。それは扇屋の熊谷が、陣屋の熊谷よりもしやすい役であるといふよりも、吉右衛門の心もちに然ういふやうなゆと

「大藏卿」は大正二年十二月の歌舞伎座

りがあつたからではないだらうか。要するに吉右衛門には、見物や、對手の役者を氣にせずに、自分の思ふまゝに、信ずるまゝに、落付けるだけ落付いて芝居をして貰ひたい。例へば「新薄雪」の幸崎で、三人笑のところの花道を歩いてゐた心もち態度——毎那の呼吸で芝居をしてゐて貰ひたい。此の幸崎は、全體を通じて決して好い出來ではなかつたが、花道から枝折戸を越え、更に二重にかゝるまでの間だけに、息を凝らして見詰めてゐるだけの緊張した藝術的價値があつた。所詮吉右衛門といふ役者の長所が、極めて自然に流露してゐたからである。

吉右衛門は若いにしては種々の大役をやつた。其の種々の大役よりも、自分が此の人にやらせたらばと思ふのは、「清玄」である。殊に庵室の清玄である。清玄役者としては、大阪に璃珏といふ名人がゐる。けれども璃珏はもう年を老つて朽木のやうになつて了つた。そこで種々な意味からして、新しい清玄役者として吉右衛門を推す。そして吉右衛門といふ役者は然ういふ方面を開拓して行く天分のある役者と思ふ。

繰返していふ。吉右衛門は好い役者である。若いながらも立派な座頭質の役者である。しかし其の役割を見て、殆ど其の出來不出來の想像される役者である。それは吉右衛門といふ役者が、或程度まで出來て了つて、或る型の中へ押込められかゝつてゐるからだとも謂へる。

「新薄雪」の幸崎は、大正三年四月の市村座。

清玄と同じ質の岩倉宗玄は、大正十二年にやつた。

初名岩井久次郎。明治座から小芝居に落ち、明治四十一年市村座附となつたが、今は大劇場にその影を見ない。

## 六十二、岩井粂三郎

岩井粂三郎

粂三といふと直に昔の花形が思出される。事實昔から明治の初年まで、粂三といふ名は代々花形役者の代名詞のやうになつてゐたのである。そして粂三から半四郎といふ名に進むのが、岩井家の定法とでもいふやうになつてゐたらしい。

粂三郎は半四郎に進むといふよりも、なる役者だか何うだか知らない。が五代六代七代八代の半四郎の似顔繪を見ると、粂三郎が何うやら半四郎らしい役者でないやうに思はれてならない。半四郎の歴代は、それこそ優れて艶麗な人ばかりであつたらしい。殊に五代とか八代とかは、「眼千兩」と謂はれるほど眼に魅力を持つてゐたらしい。また八代などは長襦袢一つでゐても立派な女に見えたと謂はれてゐる。

粂三郎は舞臺顔の惡いといふほどの人ではない。扮裝に依つては、美しくも見えぬことは無い。が奈何にしても頰が出て尖つたのが目に立つてならぬ、また腮の細いのや頰のこけてゐるのが目に立つてならぬ。全て線の細く出來てゐるのは結構だとしても、餘り弱々しいのは困つたものである。一口に謂へば貧弱とでもいふのであらうが、それにしても微風にも堪

へぬ罌粟の花とでもいふやうな風情がある。

風情と謂つても、何も粂三郎が風情のある役者といふのでは無い。風にも堪へぬ弱々しい風情があるといふだけである。もし粂三郎が眞の風情があつたら、女形拂底の折から、もう少し人氣があり、もう少し花形役者になつてゐたのであらう。

粂三郎は花形になるべくしてなり得ないでゐる役者である。人氣がありさうでゐて、人氣のない役者である。粂三郎といふ役者が餘りに稀薄で、また餘りに淋しいからであらう。

粂三郎は顏や姿が淋しく弱々しいばかりでない、藝も舞臺ぶりも淋しい役者である。艶がないとか、綺麗でないとかいふばかりでない、若いにしては餘り活氣に乏しくて、靜といふよりは、打沈むでゐる。それが色氣があつて沈むでゐるのであつたら、其處に反つて趣もある譯だが、粂三郎のは淋しくて沈むでゐるのである。だから何樣な場合にも何か屈托があるやうに見える。從つて陰氣である。

それならば、小春や梅川をやつたら成功しさうなものであるが、困つたことには前にも謂つた通り色氣が不足である、うるほひがない。それで「なさけ」を生命とする小春のやうな役柄には不向になつて了ふ。

雖然粂三郎は矢張若女形である。無論女房役も行けるに違ないが、若手として若女形のチヤキチヤキである。內氣な娘役なぞは其の柄にうつてつけのやうに思はれる。靜とか辨の內侍とかいふ役なぞも惡いとは謂へない。八重垣姫とか時姫とかいふ役になると、品が足らないのと色氣がないのと、淋しさがついて廻るので、少々頂戴が出來兼ねると謂はなければならない。雛衣や初菊にしても血の氣が不足といふ難があるだらう。「比翼塚」の小紫や「お祭佐七」の小糸と謂つたやうな役どころも貧血といふ謗を免れまい。と謂つて「三曲」の阿古屋役者とか、朝顏役者とかいふのでもない。そんなら政岡役者、重の井役者かといふに然うでもない。

斯う謂つて來ると、粂三郎といふ役者が甚だ要領を得ない役者になつて了ふ。實際粂三郎といふ役者は要領を得ない役者に思はれるところがないでもない。綺麗なとこや色氣のあるところを見せやうといふには、貧弱で淋しいし、シンミリとしたとこを見せやうとすれば、愁の利かない人である。芙雀は娘役をすると蓮葉だが、「後藤」の女房なぞをすると些つとホロリとさせる。粂三郎には其がないやうだ。

其の代り粂三郎には奈何にも女らしい一種のやさしさがある。それは「なさけ」が深いとか、「情」が熱いとかいふ性質のものではなしに、一種の女にみるやうな反抗力のない優しさである。叱られたら只メソ〳〵泣いてゐさうな優しさである。柔和とか、温順とかいふのと

も違ふ。要するに弱い優しさである。

此の優しさは粂三郎の特長であり、また生命でもある。其處に粂三郎の微弱な要領がある と謂へば然うも謂はれる。

融通の利く方とは謂はれぬにしても、粂三郎は決して役に窮屈な役者とは謂へぬ。しかし何をやつても目立つて拙いこともない代りに、際立つてうまいと思はれることもない役者である。藝にむらがないと謂へば然うも謂へるが、むらがある程爲出來すこともないと謂へば然うも謂へる。要するに役をする割に光り得ない役者である。活氣のない故もあらうが、藝の質が平板な故もあるだらう。

人を引付けるといふ力に乏しいのは此の人の損である。舞臺または藝に實の入らないのは此の人の不覺である。古人田之助は脚が無くても、色氣のある華麗な舞臺を見せたといふ。粂三郎とても、幾ら柄が貧弱でも、もう少し突つ張つた心もちになつたら、もう少し舞臺に活躍して見せられぬことも無いだらう。粂三の名の爲に粂三子の發奮を望む。

## 六十三、實川延二郎

大阪の羽左衛門と謂はれてゐる人氣者である。東京に於ける人氣も大したものである。何

實川延若の男。大正六年延若をつぐ。

「乳貰」の四郎次郎は大正二年五月の新富座。

しろ東京座時代から賣込むで來た河内屋である。其の頃は尙だ卅には遠い廿臺であつたらうが、今の嵐吉の雀三郎と一緒になつて、東京座の舞臺狹しと那の腮を活動させて、勇氣凛凛たる奮闘ぶりを見せてゐた。

腕は達者である。剛健といふ程度まで達者である。質を謂へば器用で、そして太つ腹である。藝度胸から謂つても確に關西の羽左衛門といふことが出來るだらう。そして女にかけてもすばらしい腕があるといふ。

延二郎と女——興味のある話題だが、こゝには問題外である。

しかし「乳貰」の四郎二郎といふ役を見て、此の人の女道樂は眞に三味に入つてゐるのではないかといふことがツク〴〵感じられた。芝居の人物には遊蕩兒も多いが、四郎二郎の如きは骨から髓まで遊蕩兒になつてゐる人物である。而して延二郎の四郎二郎は、頭の先から足の爪先まで其の人物になりきつてゐた。四郎二郎が延二郎になつたか、延二郎が四郎二郎になつたか、その境が蠟のやうに溶けて流れて、何方が何方だか解らぬやうに融合して、それこそ渾然たるものであつた。えらいものだと思つた。遊蕩兒四郎二郎の面目が舞臺に活躍して見えたと同時に、延二郎自身の面目もクッキリと舞臺に浮上つて見えた。延二郎がやつしの名人だとか成功したとか何んだとかいふ、そんなまだるいこと

實川延二郎

ではない、四郎二郎の血が延二郎の血管にも流れてゐたと見做すが至當である。

延二郎は腕の達者な人だけに、藝の領分は廣い。其の土地が肥えてゐるか何うかは大に詮議しなければならぬとして、持つてゐる領分は素敵に廣い。

輕いところも行く、重いところも行く、柔なところも行く、固いところも行く、若女形も、年増役も、敵役も、デン〳〵物も、世話物も、また新派物も、何んでも自由自在に行く或は傍若無人にやつてのけると謂つても可いだらう。役者だから何んでもやるといふのが延二郎の信仰箇條の第一となつてゐるらしい。所謂役者——器用な役者の多い大阪役者のうちでも、延二郎は嶄然として頭抜けた方の人であらう。

由來よろづ屋さんには、得て大店がないものだが、延二郎はよろづ屋さんでありながら、大店らしい構もある。よし構とは謂はれぬにしても、構らしい物を持つてゐる、それが延二郎の强味であり、えらいところであり、且つ東西劇壇の賣つ子として、次第に頭を擡げて行く所以であらう。

延二郎は近來目立つて大きくなりかけた。人氣のせゐばかりではないやうだ。人氣と使へるのとで中芝居の頭目の一人であつたのが、何うやら大歌舞伎の立者になりかけて來た。

延二郎の芝居は確に面白い、芝居を面白く見せやうとする呼吸に於て、形とか現はれ方が違つても、鴈治郎に似通つたところがあるやうだ。何れにしても延二郎は芝居を面白く見せうとして努力する役者である。そして其が可成に成功してゐる。

延二郎は背の低い役者である。けれども顏が大きいだけに、舞臺は割合に大きな役者になつて見える。が何うかした場合、または役に依つては、顏と體との不釣合が著しく目について、甚く不恰好に見えることもある。殊に後姿が悪い。延二郎が後向になつてゐて恰好の好く見えたといふことは殆んど無い。顏が大きいのに首が短いからである、首が短い上に背が低いからである。顏の方を幾分なりとも背の方に加へたなら、延二郎は役者ぶりに於て一段と延二郎を光らし得たであらう。

延二郎は役者ぶりに於て決して優れた役者ではない。何うかすると甚くヅングリムツクリして見えることもあれば、ブク〳〵して見えることもある。けれども何處かに色氣があり、艶もある。

顏にしても然うである。延二郎の顏は、取立て、斯うといふほど立派な顏でもなければ、優美だとか綺麗だとかいふ顏でもない。しかし役者の顏としては決して平凡な顏ではない。面積が廣くて長いだけでも平凡でない。そして雜作が嚴く出來てゐる割合に柔な輪廓にくるめられて、程好く調和も保つてゐれば、艶もあり色氣もある。此の艶と色氣に依つて、延

二郎の顔は役者らしい顔になつてゐる。が強いて謂へば、肉が厚ぼつたく見えるので、ふやけてゐるとは謂へぬまでも、少々ブヨ〳〵した感じがないでもない。

延二郎の顔と謂へば、直に長さと大きさとを思はせる。そして其の腮は有名でもあり、また素敵に長いものでもあるが、それで延二郎の顔に嚴さと強味とが加はつて平凡でないやうにもしてゐる。

腮の次に目立つのは眼である。延二郎の眼は大きいといふほどではないが光ることはナカナカ光る。その光には男性的の怖ろしさもあれば、蕩すやうな色氣もあつて、一口に謂へば先づ複雜な働きがあり變化があるといふ方なのであらう。延二郎が役者として働けるやうに、延二郎の眼もナカ〳〵働きがある。そして延二郎の顔に嚴い分子と、柔な分子があるやうに、眼の光も柔さと嚴さとが程好く調和されてゐる。

顔が大きいので、延二郎の舞臺ぶりは多くの場合、引立つて見える。けれどもまた何うかすると其が裏切をして、役者ぶりを臺なしにして見せることも少なくない。何う考へても顔と體の不釣合なことは、延二郎に取つて小さな損害でない。

延二郎は顔と體の不釣合で損をしてゐると同時に、聲でも役者の價値を少からず割引されてゐる。延二郎の聲は調子を張つた時も、またゆるめた時も、沈めた時も、同じやうに聲がつぶれたやうな、一種嫌な響と、落付のない調子がある。

一體上方の地音とでもいふのか、大阪役者の聲は大概、濁つた響とぼやけた調子がある。我童のごとき美音家にしても然ういふ傾がないではない。況や聲の惡い延二郎に於てをやである。

延二郎の白が拙いと謂つたら叱られるかも知れない。雖然調子に浮ついたところがあり、響に嫌な濁音と、そして出さうに出し得ない苦しい障礙のあることは事實である。延二郎の喉には何か故障があるやうだ。故障があるのは爲方がないとして、延二郎に其の故障を補ふだけの苦心と努力があつたら、もう少し上滑りのしないやうに、もう少し底力のあるやうに、そしてもう少し快い白を聞かせることが出來るだらう。

延二郎は聲の惡い人に違ないが、聲量に不足があるとは思はれぬ。假に不足があるとしても、白にもう少し落付があり、もう少し味のあるやうに出來ぬことはあるまい。延二郎の白は上滑りがするばかりでない、何うかすると氣障に輕薄に聞えることさへある。性根にしつかりした据りがないからではあるまいか。

藝とても其の嫌がないでもない。働けることに於て、藝の領分の廣いことに於て、延二郎は當代チヤキ〳〵の役者である。そして延二郎一流の面白味と、或る味も持つてゐる。し

かし上つ滑りがしてゐる。深味がない、落付が足らぬ。器用にこなしつけて行く腕と才には敬服しても、舞臺に立つてゐる心もちと性根とに言分がある。不眞面目とは謂へぬまでも、餘りに役や舞臺を輕々しく取扱つてゐる嫌がないとは謂へぬ。度胸も好い加減でないと、咕めてゐるといふことになる。

殊に延二郎には悪い癖が一つある。それは餘りに度胸があり過ぎるせいでもあらうが、只自分を見せやう〳〵として、舞臺全體をおろそかにすることである。露骨に謂へば自分さへ儲かれば、他の役者が何うであらうと、舞臺の氣分が壞されやうと、其等のことは一切おかまひない風の見えることである。

尤も是は延二郎一人に限つたことではない。鴈治郎を其の隨一人として、大阪の役者には一體に然ういふ傾向がある。して是は或る場合には、それで役者ぶりの好くなつて見えることもあらうが、多くの場合、役者を安つぽくして了ふ。

芝居は、自分一人で出來るものでもなければ、するものでもない。器用で、そして怜悧な延二郎には特にこの事を考へて貰ひたい。然うでないと大向には受けさせても、具眼者には嗤はれる。それからもう一つ延二郎に目につく缺點は花道から引込む場合などに、何うかすると中程から、張りつめた氣分がスッカリ弛むで、殆ど素の延二郎になつて、無雜作に、ノンキに揚幕に入つて行くことがある。これも些か見物を喰つた爲方で、心がけのある役者のすべきことではあるまいと思はれる。

要するに延二郎は、芝居を面白く見せる呼吸に於て、鴈治郎に似てゐるばかりでない。一人で芝居をし、一人で光つて見せやうとするとこまで鴈治郎に似てゐる。

然うは謂つても、延二郎は鴈治郎を張つてゐる役者といふのではない。成程物に依つては延二郎の舞臺ぶりが頗る鴈治郎張に思はれることもあるが、延二郎には延二郎の本領があり、自ら其の繩張がある。第一、延二郎と鴈治郎では、役者の質も違へば藝の根柢も違ふ。

延二郎は出來るだけ廣く網をひろげて、廣く渉らうとする人である。鴈治郎は出來るだけ深く網を落して深く探らうとする人である。鴈治郎は既に出來た人であり、延二郎は出來かからうとしてゐる人である。鴈治郎は役者ぶりに於て既に鴈治郎の價値があり、延二郎は藝で其の役者ぶりを補つて行かなければならぬ人である。

四面八面に切りまくる延二郎の勇氣は確に長所であり敬重すべきものである。例ば「忠臣藏」をやつたとすれば、由良之助、師直、判官、勘平、平右衛門、定九郎、――殆ど何んでもやる。次第に依つたらばお輕をも九太夫をも御覽に入れる勇氣もあれば、またやつてのけもする。「太十」をやるとすれば光秀も、十次郎も、操も、初菊も、左程の屈托や脱線なしに

こなして見せるだらう。「先代萩」をやつたとすれば、政岡も、八汐も、仁木も、男之助も、頼兼も、勝元も、何れが得手とも不得手とも解らぬ位にやつて見せるだらう。無論權太とおさとを演分けて見せる位のことは樂であらう。去年は大阪で「毛剃」をやり、新富座で「吃又」のおとくを見せ、帝劇で「めくら兵助」といふやうなものもやつた。何時か大阪で「四ツ谷怪談」のお岩をさへやつた——數立てたら際限がないが、延二郎の多藝には我々素人はびつくりする。

何處かの商店の看板に薄利多賣と書いたのを見たことがある。延二郎の多藝と、此の薄利多賣主義とは、勿論意味は違ふけれども、多賣主義の店の品物に吟味が行屆いてゐないといふ心配があるやうに、延二郎の多藝には研のかゝつてゐる度が少ないとも謂へる。

延二郎は尙だ若い。腕に實が入り、藝に深味が加はり、體に貫祿がつき、そして役者ぶりも舞臺ぶりもドッシリして來るのは是からである。今分は只有餘つた才と器用と、舞臺度胸と、そして芝居を面白く見せるといふ呼吸に敬意を表して、將來の雄飛を期待して置く。何んにしても色の白いのは七難隱すといふ。延二郎は確に然ういふ質の役者である。けれども理合がザラ〳〵して手觸が粗い。まだ研が足らぬからであらう。

## 六十四、吾妻市之丞

市村羽左衞門の門。初め市川猿之丞。一旦歌舞伎座に入つたが今は小劇場の人となり、病氣で多く出ない。

おつまは、明治四十二年七月の宮戸座。

吾妻市之丞、十年前、東京座で猿之丞時代の市之丞を見た時には、薄ボンヤリした、棒鱈役者だと思つてゐた。其後四五年も經つてから、宮戸座で見た時には、猿之丞も大分役者になつたと思つた。

一體役者の質が尋常に出來てゐるとでもいふのであらう。これといふ大した見榮もない代りに、これといふ嫌なところも無い。羽左衞門門下となつて、市之丞となり、歌舞伎座に出るやうになつても、決して成上つて來たといふアラを見せない。所謂お名題さん連のうちでは腕もあり、役者ぶりにも落付があり、舞臺も親切で、先づ質の好い方と謂つて可いやうだ。

加役として立役もやる、けれども市之丞は女形として成功し、それで賣つてゐる役者である。餘程前のことだつたが、亡くなつた芳三郎の八郎兵衞で、おつまをやつたことがある。此のおつまなぞは、確に猿之丞時代の當り役であつたと思ふ。そして市之丞には然うした役が柄に嵌るらしい。顏付が肉厚にポッテリしてゐるせゐもあるだらう、此の人には若い綺麗なところよりは、少し年增の落付いたところが好いやうだ。

落付いてゐると謂つて、何もお品があるといふのでは無い。市之丞は女形としても、また立役としても、品があるの、色氣があるの、また艶ッぽいの、スッキリしたとこがあるのといふ方ではないが、地味で、何處かオットリしたとこがある。オットリと謂つても「女河内山」を見せやうといふ人だから、ウブだといふのでは無い。此の說明は難しいが、碎けたうちに鷹揚らしいとこがあり、物馴れてゐながらおとなしやかなとこがあるとでも謂はうか、悪くコセコセしたり、悪跳をしないところに此の人の長所がある。そして其がまた歌舞伎座の役者としてもアラを見せない所以である。

押出しは悪くない、白にも仕打にも、此うと目につくほどの癖もなければ嫌味もない、顔も素敵に美しいとは謂へないまでも、見ッともないといふ方ではない。そこで役者ぶりが紅い着つけよりも、黑い着つけが似合ふ方である。

市之丞は尙だ功者とか上手とか云ふ役者にはなッてゐない。またこれといふ當り役とてもないが、圓く纏はついてゐる役者である。そして控目といふよりも、出過ぎないところに、またおとなしやかなところに、此の人だけの味もあり特色もある。好い役者とは謂はれぬが、好くなりさうに思はれる役者である。

初世中村歌六の男。初め中村時藏。大正八年五月死去

# 六十五、中村歌六

大向では大播磨屋と敬語を放つ劇壇の大古老である。昔の役者である。昔の役者らしい昔の役者である。强ち年が年だからといふばかりでは無い。

歌六は以前から一癖ある役者として持囃され、且つ或る側には人氣もあッた。或劇通の大家は此の人に「くさやの干物」と銘を打ッた。それだけ癖のある役者である。それだけ臭味のある役者である。そしてまた味のある役者である。

藝の質を謂へば團十郎前派で、役者の質を謂へば、立役役者で、そして座頭役者である。近年になッてから、身分が古老株になッたのと共に、大歌舞伎では專ら老役ばかりに廻つてゐる。爺さんもやれば、婆さんもやる、世話物でも然うなら、時代物でも然うである。市村座の若手一座に加はッても、後見役として、且つ隱居役として、白髮頭を振立てるやうな役ばかりしてゐる。

しかし時に道樂が出て、壽座とか宮戸座あたりで「彌作の鎌腹」を見せたり、「沼津の平作」を見せたり、「吃又」を見せたりするやうなこともある。

明治四十一年の夏、宮戸座でやつたのが最後の勘平。

一體足腰の達者な時分には、座頭役者、立役々者として、隨分働いた方の人である。役の領分も廣かつた。歌六とて何も老役々者として、またワキ役者として年を老ッて來たのでは無い。若い頃には今の吉右衞門のやうな役者として働いたこともあつたらう。自分が知つてからでも、時藏時代の一と頃の人氣はナカ〳〵盛なものであッたと覺えてゐる。其頃は三尺帶物なども可成行つたやうであつた。無論「忠臣藏」の役々の如きは大概やれもし、やつた人である。近年になつても、勘平をやつて見せたことさへある。今でもやゝ元氣はあるだらう。由良之助、師直となると本役といふ方であらう。

しかし師直役者由良之助役者として、歌六は餘りに年を老り過ぎて來た。加之根が死ンだ團藏のやうに性根に骨が無い。師直をやると、慾の深さうなとこだけが出て、色深い爺とも思はれず、また小意地の惡いネチ〳〵した、そして權高な心もちも出て來ない。何うも氣樂なお爺さんになり過ぎて了ふ。由良之助とても然うである。由良之助といふ役の性根に對する種々な詮議は別として、四段目にしても七段目にしても、由良之助が餘り歌六化されて、愛嬌があり過ぎる。そして其が歌六のやる役の癖てに渡つて然うだといふことも出來る。

歌六が得意藝としてゐる「彌作の鎌腹」をやつても然うなら、「沼津の平作」をやつても然うである。其の他「蓮生物語」をやつても、「本藏下屋敷」の本藏をやつても、「安達三」の貞





任をやッても、「毛谷村」の六助をやッても、「盥登城」の彦左衞門をやッても、乃至光秀をやつても、「琵琶の景清」をやッても、「猿廻しの與次郎」をやつても然うである。

歌六には、悲痛も、悲哀も、壯烈も、豪快も、全く樂天化されて、歌六式愛嬌に卷き込まれて了ふのである。

それで歌六の芝居は面白い。歌六は何樣な芝居でも、歌六一流の味を出しながら、芝居を面白く見せるといふことに成功して、役には失敗する役者と謂つて差支ないだらう。

歌六は確に芝居の上手な人である。そして年は老つてゐても芝居に元氣がある。此の上手と元氣と愛嬌とで、歌六は只芝居を面白く見せやうと努力する。努力するといふよりも自分自身が面白くなつて了ふらしい。

功成り、名遂げて——といふ程でないにしても、歌六の舞臺ぶりには自ら舞臺を樂しむといふ風が見える。若い息子ドンが舞臺で窘むのとは反對に、お爺さんは舞臺を面白がつて、何うかするとはしやぎ過ぎはせぬかと思はれるやうなこともある。

はしやぎ過ぎても、ウヅ〳〵してゐても、歌六の舞臺ぶりは面白い。癖も面白ければ、首の振り方、歩きつき、眼遣、全てに昔式と歌六式とが發揮される。白にしても然うである。先代芝翫のバア〳〵は有名なものだつたが、歌六の白はバア〳〵ではないが、誰でも眞似を

するやうな、また眞似の出來るやうな特異な調子がある。

面白いだけ愛嬌があるだけ、歌六の舞臺ぶりには何うもシンミリしたとこが無い。彌作や平作といふやうな然うなければならぬ人物に扮しても、愛嬌とか滑稽味とかいふものが妄と活躍して、役の性根が何處へか吹飛ばされて了ふ。「先陣館」の時政といふやうな役をしても然うである。時政の如きは押出しに於て、古今無類と謂つて可い位古風で立派な陰險な人物をさへ、やゝ剽輕な、氣の好いお爺さんにして了つた。去年歌舞伎座の「岡崎」で幸兵衛の女房をやッたが、これなぞは何うかすると喜劇中の人物になつて了ひさうであつた。此の女房が糸車を廻しながら——來いといふたとて、行かりよか佐渡へ——といふ唄をうたふところがあッたが歌六は大層聲の好いお爺さんだと思つた。そして此の糸車を廻してゐる間だけ歌六の愛嬌と傍の氣分とがよく調和して、歌六によッて舞臺を引緊められてゐたと思つた。

左に右歌六は、つまらないワキ役者として、舞臺に出てゐても、舞臺を賑にし、且つ自分の存在を大きく明にするといふやうな德のある役者である。近頃の言葉でいふと、印象の深い役者とでもいふのかも知れない。

歌六は輪廓の大きく見える、影の濃な役者である。顏を見ても勁い腕と大きな鑿とで、グイ〳〵彫りつけた木像のやうである。それで舞臺が賑でもあり、また思切つて賑にもする。

初め坂東勝太郎。





る。

何にしても、歌六は德のある役者である。年功の德か、藝の德か、それとも歌六其の人の德か、何時までも元氣で且つ相應に人氣のあるだけでも、大播磨屋には何か其だけの德があると謂はなければならない。

## 六十六、坂東秀調

秀調は嘗て勝太郎と謂つて、長唄の謠手で、故團十郎の「勸進帳」に——人目の關——を謠つた人だといふ。勿論美音だッたからであらうが、長唄も拙くなかつたに違ない。それが故人秀調の一粒種のお福さんこと、のしほに思ひつかれて、良人になつた。

顏が綺麗だつたからである。男前が好かつたからである。

所詮此の人は、役者としては、中年者である。當今役者の中年者と謂へば、名優と謂はれてゐる市川權三郎、十代目團十郎になると謂はれてゐる堀越福三郎、それに秀調を加へて、これを中年者の三幅對とする。尙だ此の他にもあるかも知れないが、左に右此の三人を重なる者とする。そのうちで秀調だけ女形として立つてゐるが、そのせゐでか此の人が最も役者

新派に入つたのは、明治四十一年より一年後。

らしいやうに思はれる。勿論年功も此の人が一番積むでゐるにも違ないが……

秀調は一と頃新派に入つて、立者らしく扱はれてゐたことがあつた。その後左團次組の若手一座に加はつて、松蔦と相對して、些ッと准立女形といふやうな位置に坐つてゐることになつた。中年者としては、先づ成功した人と謂はなければなるまい。

のしほといふ指南番兼相談役がついてゐるせゐか、秀調は型物とかいふ、古い物をも相應にこなす。好い悪いは別として、八重垣姫でも、お輕でも——所謂若女形の畑でも、また女房役でも、花魁形といふやうなところでも、何うやら斯うやら間に合はせて行く。そして新作の才となると古い物よりも一層融通が利くやうである。柄にあるものでさへあつたら、然う不出來といふほどのことはないやうだ。お座なりに謂へば確に然うである。

けれども此の人の役者ぶりにも舞臺ぶりにも何ンとなし生々しいところがある。こなれてゐないところがある。繪で謂へば、安い繪具を妄と塗りつけて、色彩で筆意を誤魔化してゐるといふやうなとこがある。て些ッと見は綺麗だが、見てゐるうちに直に見ざめがして了ふ。お世辭氣なしに謂へば尙だ繪が出來てゐないのである。

先づ顏からいふと、鼻が馬鹿に高いといふのか、大きいといふのか、何うかすると秀調の顏は鼻ばかりになつて見えるやうなこともある。殊にうひ〳〵しい娘かなぞになると、鼻が變に突出して、色氣も可愛氣もあつたものでない。これで秀調は折角の役を臺なしにして了ふことが少なくない。これしかしながら、秀調の鼻の咎ばかりではないやうだ。舞臺で見せる役者の顏として、化粧法に至らぬとこがあるのではないだらうか。

全體秀調の顏は、素顏で見ると、松蔦などにくらべて、すぐれて好い顏でありながら、舞臺で見ると、何ンだか變に見えるとこがある。それは鼻ばかりでなしに、顏の線にも肉付にも、また眼にも唇にも、しッくりしないとこがある。娘役ばかりでなく、女房役になつても然うである。と謂つて無論悪い顏でもなければ、素人臭いともいふのではないが、只何ンとなし變でしッくりしないとこがある。そして秀調の顏と、役とが離々になつてゐることが少くない。それが歌舞伎劇の場合にのみ限られて居れば「役者に新しみがあるから」として辯護の餘地もあるのだが、新作物の役をする場合にも然うだとすれば、秀調の顏は頗る研究物である。

顏ばかりでない、白にしても、藝風にしても然うである。唄うたひとして美音と謂はれたほどの人であるから、秀調は決して聲の悪い人ではない。優しさもある。響も好い。また癖といふほどの癖もないのだが、何ンだかスカ〳〵したとこがあつて、情味がない。趣がないと謂へば然うも謂へるし、色氣がないと謂へば然うも謂へる。よし色氣があるとしても、妙

に所故とらしいとこが耳に立つ。そして藝風も結局然うだといふことに落ちて行くのである。

要するに秀調は、顔にも體にも白にも、はた藝にも、役者として練れてゐないとこのある役者である。假に其質に好いところがあるとしても、まだ〳〵役者ぶりにも舞臺ぶりにも、好いところを出し得ないでゐる役者である。而して歌舞伎劇の役者として物足らぬところがあるばかりでない。新しい側の役者としても、どこにどうといふ特色も有つてゐない。役者が練れてゐないばかりでない、その質が平凡に出來てゐるのだと謂へば然うも謂へる。

しかし女形として一通融通の利く役者とは謂へるやうだ。小手が利くとか何ンとかいふのではなしに、役者の質が器用に出來てゐるからであらう。此の點は松蔦の一種の娘役一點張の藝風と違ッて、秀調はやゝ複雜な傾向を有つてゐるやうである。而してそれがまたまた秀調の大きな缺點ともなつてゐる。

その故奈何にとならば、秀調が「新しみ」のある舞臺で活動する場合には、古い型とか味に累はされてゐるのが目についてならないし、また歌舞伎劇の舞臺に立つたとすれば、生々しい新しさ——または素の秀調の飛出すのが目について爲樣がない。成程稼業の上から謂へば、此の兩刀づかひは重寶なことでもあらうが、何ンとなし役者が安ッぽくなつてゐるのは事實である。所詮秀調といふ役者は、特色も趣も、はたまた面白味もないのも斯ういふところから來てゐるのでは無いだらうか。

繰返していふ。秀調は器用に出來た役者である。そして女形としてその質には不足のない役者であるけれども、役者が練れてゐないと同時に、その舞臺ぶりにも、役者ぶりにも、特色も趣もない役者である。少くとも今のところ然うである。而して此の人には、若い綺麗なところ、またはお品の要る役よりも、やや色ッぽい年增役が最も欲るやうである。別の言葉でいふと、花車形、または世話女房と謂つたところが、此の人の畑らしい。

澤村訥子の男。大正十三年四月死去。

## 六十七、澤村宗之助

澤村宗之助

宗之助は歌舞伎役者のうちでは、所謂新しい役者の一人である。少なくとも新しみのある役者の一人である。

それは自由劇場などに入つて、新しい芝居をやつたからといふ意味ばかりでない。また帝劇式新作物の役で成功するからといふばかりでない。其の役者ぶりに、何ンとなし所謂歌舞伎役者の型に囚はれてゐないところがあるからである。

一體宗之助は、その顔付からして、甚だ大正式に出來てゐるとでもいふのであらう。顔の

形にも、筋肉にも、また表情にも著しく知識の影がさしてゐる。平ッたく謂へば、怜悧に出來てゐるといふのであらう。これに好意を表して謂へば、引緊つて、寸分のたるみもゆるみもないといふのであらうが、蹴飛ばして謂へば、顔が變に固くつて爲樣がないとも謂へる。何ンにしても宗之助は、帝劇の幹部のうちでも、チヤキ〳〵の新知識、正札つきの大正ッ子である。

宗之助は立役もやるけれども、女形を本役としてゐる。而して女形として、歌舞伎畑の役者としては些ッと異彩を放つてゐる。また一部には若手中の上手役者——或は帝劇の人々のうちでは、一番上手な役者だと謂つてゐる人もあるが、一部にはまた那の若老人じみた分別くさい顔付から氣に喰はぬと謂つてゐる人もある。

これは各自の好々で、その好不好にまかせるしかないとして、さて藝風子は、局外中立と出掛けて、無遠慮なよたを飛ばして見たいと思ふ。

歌舞伎役者として宗之助は、一種變つた型に出來た役者である。歌舞伎劇傳統の眼で見たら、或は宗之助の役者の價値が餘程割引されるかも知れぬ。けれども歌舞伎役者としてと——いふ條件を撤回したならば、宗之助は若手役者のうちでは傑れた腕前のある役者と謂つて可いやうだ。女形として色も香も乏しいが、別の言葉で謂へば情趣にこそ乏しいが、一味の風格はある役者である。また別な言葉で謂へば、うま味もなければ敬服するやうなとこはないが、何點かしつかりしてゐるやうなとこのある役者である。宗之助の役者と、藝風に就ては、嘗て本誌の牛魔王が詳論したことがある。重複するやうだが、茲に其の一節を引用する。

——役柄が若女形といふところに居るからでもあらうけれども、白の一ト言々々にも苦しい程の加減をして、控目々々にしてゐる。それが自らなる可憐らしい感情から來るのでなしに、しつかりした考へ——所詮智慧からやるのであるから、何ンだか親しみとかなつかしさといふものが無い。そして少し複雜ッた感情をあらはす場合には、那のムッツリした顔の筋肉に或る苦艱が微動する。時に依つては激動もする。それと同時に白までが澁つたり、蹌いたり、せッぱ詰つたやうになつたりする。尤もそれで成功する場合もあるが、聞いてゐる此方まで苦しくなつて了ふ場合が少なくない。

父訥子は發揮する役者として有名であるが、宗之助は、父の其を內面的に幾分か繼承して、人の目につかぬやうに、內輪に發揮もすれば活動もする。その內訌的發揮が醱酵して、一種の氣分になつて彼の聲に絡まり、あの欣衝的な、燥ついた、なつかしみのない白となるのである。

更に分析的に謂へば、宗之助は太い線と粗い纖維から成立つてゐる聲を、無理に細工を加

へて、柔にもし、細くもし、手觸好く聞かせやうと努力してゐる。その努力は購つてやらなければならぬが、奈何なる細工も、遂に其の素質は何うすることも出來ない。松の木は、奈何なる座敷の天井板になつても松の木である。控目々々とする下から、がさつな木地が無遠慮に飛出すのは何ンとも爲方がない。と謂つても宗之助の聲を惡聲だとか何ンだとかいふのではない。決して然うではない。相應にあやもあり味もあり、力もあるが、それが奈何にしてもあくどいので、折角の努力を無駄にして、宗之助獨特の柔味のあるがさつに陷つて了ふ。而して藝風とても然うだと謂ふことが出來る。

奈何なる宗之助最眉でも、宗之助の那の努力的の藝風から、盛にがさつな分子の發散することを氣付かずに居られまい。努力とがさつと生々しさ——其處に若い宗之助の前途が閃いてゐると謂へば謂ふのだが、それにしても木地が餘りザラ〳〵爲過ぎてはゐないだらうか。

成程宗之助の藝には熱がある。そして思慮がある。で爲ることは、ぎごちないが、拙いとは謂はれぬ。柄も貧弱といふほどでない、顏にしても不足はあつても、普通の若い女に扮して役柄を損ねるやうなことはない。聲も然うである。先づ部分々々を大まかに見て、よしよしとして手を拍つ……として、さて何點に斯うといふ頭拔けた點がなくて、那の生々しさとがさつだけが眼に殘る。

宗之助はナカ〳〵賢明の人だと聞いてゐる。それで役者としての木地に申分があり修練の足りぬを、氣と智慧とで補つて行かうとして努力する。宗之助の藝は確に努力的である、苦鬪的である。燃えやうとして燃え得ないで燻つてゐる藝である。顏にも、聲にも、その氣分が漲つてゐる。而して宗之助は、その藝が有つてゐる熱までが內訌的だと謂はなければならぬ。そしてまたがさつな分子の發散によつて、藝の風格に野育といふ色を塗りつけてゐる。

繰返していふ。宗之助は決して拙い役者ではない。何方かと謂へば器用過ぎるほど器用な役者である、達者過ぎるほど達者な役者である。しかし歌舞伎役者としては損な役者である。花で謂ッたならば、培はれた畑が惡くて、花の相も色も些かお粗末に咲いて了つたやうに思はれる。所詮人を引付ける力に乏しいのだ。言葉を換えれば歌舞伎役者としての天分に不足があるのである＝以下略

要するに宗之助といふ役者は、先づ斯う謂つたやうな役者である。實はあつても、花のない役者である。それで昔から精練されて來た歌舞伎劇の役々には、餘り芬しくない出來榮を見せると謂つて可いだらう。立役でも、女形でも、また世話でも、時代でも、型物でも、所作事でも、何をやつても大きな失敗も見せない代りに、また斯うと謂つて推賞するほど好い物を見せたこともない。所詮相應な腕前と堅實性はあるが、歌舞伎役者特有の色も芬もない

永らく明治座にゐて左團次と舞臺を共にしたが、明治四十四年四月から帝劇附となつた。

と同時に、人を引付ける力に乏しいといふことになるのである。

しかし何ンと謂ッても宗之助は帝劇の人氣者である。帝劇に入つて光り出した役者である。而して立派に幹部の一人として、役目もはたし、活動もしてゐる。殊に帝劇式喜劇に對しては、確に獨得の腕前と味とを持つてゐる。また新作物であつたならば、史劇にしろ家庭的のものにしろ、大概の役は或程度まで成功する。——それだけまた宗之助は、在來の歌舞伎味に乏しい役者だとも謂へるのである。

結局宗之助は、一種新しい役者で、そして上手役者である。而して若いにしては地味一點張の花のない役者である。



## 六十八、河原崎國太郎

初名實川延太郎。大正八年八月死去。

河原崎國太郎・名前は素敵に立派な役者である。先の國太郎は名人藝の女形として、團十郎でさへ服してゐた人だとか聞いてゐる。國太郎は何ういふ蔓に縋つて、國太郎の名を冒したのか知らないが、今のところ些ッと名前負の形が無いでもない。何しろ延太郎と謂つてゐた頃は、小芝居中芝居を渡り廻つて、發展役者として可成賣つてゐた人である。修業が變則であつたのは謂ふまでもないことである。

それが何う發心してか歌舞伎座に入つた。そこで足掛二年が程氣の利いた腰元位で辛抱してゐるうちに、菅原東天紅で刈屋姫といふ大役がついた。これが抑々國太郎が大歌舞伎で役らしい役がついた初であつたと思ふ。そして此の刈屋姫は、先づ〳〵好い出來との評判であつた。實際またしつくり格にはまつてゐたか居ないかは別問題として——所謂難しい詮議さへ加へなかつたら、普通出來の部には違なかつた。而して一部には有望な女形として認められるやうになつた。

「對面」の虎は大正三年一月の市村座。

その後國太郎は菊五郎榮三郎の實妹お梅さんを妻君にした。それと同時に市村座組に加はつて、そも〳〵のお目見得が「對面」に大磯の虎、息女千草、腰元十六夜といふやうなところであつた。つゞいて「秋津島切腹」に傾城大淀、「野崎」のお染、「新薄雪」の左衞門、娘おれん——此ういふところで相應に美しいところを見せた。そして國太郎は今のところ此ういふ役どころの役者と謂つても然るべきであらう。

國太郎は左衞門のやうな役や、または若衆役殿樣役位は樂に出來る人である。顏から謂ッても柄から謂つても、また藝風から謂つても然うである。而して若女形は其の本役であらう。

若女形としての國太郎は、顏も綺麗である、姿も悪くない。それで刈屋姫のやうなお姫樣どころも、お染、おれんのやうな娘役も、また傾城も藝者もいける。年が年だけにそれだけの色氣も艶も——まあ有ると謂つても可いだらう。しかし此の色氣も艶も何ンとなし醇化してゐないとこがある。そして柔味がない、ふツくらしたとこがない。あながち固いとか、ギクシヤクするとかいふのではないが、何うもぎごちないところがある。これはしかし柄が悪いとか、顏が悪いとか——所詮生地に悪いとこがあるのでは無い。全體の鍛え方に缺點があるからである。平ツたく謂へば修業のせゐである。

繰返していふ。國太郎は決して役者の生地の悪い人でない。東京の水で研き上げたら、隨分意氣にもなるだらう、また鍛え方によツては自然と柔味も出て來れば、品も備はり、艶も一段と加はつて來るだらう。けれども今のところでは、ぎごちないと、生々しいとが際立つて目について、長所といふほどの長所を有つてゐない役者である。

要するに國太郎は、白にも、藝にも、體つきにも——歩きぶり一つにも、育ちが悪いといふやうなところのある役者である。從つて今のまゝでは爲樣がないが、修業次第では見込のあることは保證つきである。すべて藝道の修業は、毎いろはからやり出すこゝろがけがなくてはならないものだ。特に國太郎には此の心掛を有つてゐて貰ひたい。

尾上多見藏の門。のち多見藏をつぐ。

死去。

## 六十九、尾上多見之助

大阪劇壇一方の雄鎭で、鴈治郎につづいて、大阪の大立物である。一ト頃は人氣もすばらしいものであつたといふ。若い頃には嚴笑、死んだ霞仙等と共に、大阪の花形として人氣も熾ンなら、競爭も盛ンなものであつたとか聞いてゐる。

今でも東京でこそ餘り左や右う謂はれないが、大阪では鴈治郎と多見之助との優劣が問題になるさうだ。無論多見之助黨も相當にあるに違ない。そしてつむじの曲ツた連中は、鴈治郎よりも多見之助の方が役者が上だとか藝があるとかいふ。成程然う謂へば然う思はれぬでも無い。

多見之助は藝の多方面の人らしい。藝の領分の狹い鴈治郎にくらべたら、無論畑の廣い人である。畑の廣いといふことは、無論役者が好いといふ保證にはならないが、しかし多見之助の廣さは、只駄々ッ廣いのではないやうだ。種々な意味からして、其の廣さには好い役者としてといふ條件がつけられるやうである。多見之助に取つては、畑の廣いといふことが、確に强味であり誇であるに違ないが、また禍ともなつてゐないでもない。

何ンにでも使はれる、どんな役にも立つ——役者としてまた人間として、然うありたいものだが、世間といふ奴は勝手である。使ふ時の重寶を忘れて、重寶を輕侮する。そして直に間に合ふとか、容易く使はれる者よりも、直に間に合はず、容易く使はれぬ者を敬重するといふ傾がある。不條理なことだが人情が然うである。

此ういふ理由からして、多見之助は少々役者を賣損ッてゐるといふ形がある。固々何ンにでも使はれるやうに、腕が重寶に出來てゐるのだから、場合に依ッては何ンでも引受ける、そして相應に間に合はせて見せる。具體的に謂へば、相談次第なら、新派の仲間に入つて新派式の芝居もして見せる。それがまた結構間に合ひもする、また次にも賴まれる——然ういふことは、多見之助の役者を少々づゝ小さくして行ッても、決して大きくはしない。

役者は或點まで、自分でならないものを固守してゐる方が、自分を大きくも見せ、また重味をもつけるらしい。所詮勿體ぶられるだけ勿體ぶッてゐる才が、世間をおどかすに都合が可いやうだ。

何う割引をして考へても、多見之助は實力よりも役者を安くして賣ッてゐるやうである。それは何ンでもやる。何ンにでも間に合ふといふことの祟りが、重なる原因と謂つて差支ないだらう。

「板額」は大正二年三月の本郷座

去年東京に乘込むで來た時にしても然うである。多見之助といふ大立者が三十幾年ぶりかで、東京に來たのにしては、乘込方が些か輕々しく、安ッぽくは無かつたらうか。三十幾年ぶりと謂へば、殆ど初めて東京の土を踏む人である。謂はゞ役者としては初お目見得である。それにしてはもう少し何か乘込方もあれば、多見之助の芝居の出し方も無かつたものだらうか。

東京には都會の田舍者が多い。多見之助の藝を何う此ういふ奴よりも、先づ評判におどかされて、評判に雷同する方が多數である。殊に本郷は、新派の繩張うちである。近來左團次芝居が新味を振りかざして、其の繩張を崩しかけてゐるところである。そこで多見之助が古風な「板額」を見せたのは、大なる不覺ではなかッたらうか。

それに一座が惡かつた、何も對手の役者が惡いといふのでもなければ、左團次一座が古い芝居に適せぬとか、または多見之助が新らしい芝居に適せぬとかいふのでなしに、其の座組が多見之助に適しなかつた。幾ら團十郎でも團十郎一人では芝居が出來なかつたらう。また對手に依つては、芝居が大きくもなれば小さくもなるといふことを免かれなかつたらう。然ういふ意味からして、多見之助は座組と其の出物に就て、もう少し考へなければならなかつたのだ。

而して結論は此ういふことになる――板額にしても、吃又にしても、多見之助自身の出來不出來は別問題として、一座次第では、芝居をもつと大きく見せることは出來たに違ない。新富座の時なぞは、延二郎も多見之助も格別違のない役者のやうになつて見えた。萬一すると顏馴染の多いだけ延二郎の方が、反つて役者が好くなつて見えたかも知れない。

何も多見之助を買被つていふのではない。雖然多見之助といふ役者に對しては、此う謂つても差支はないと思ふ。大阪の役者として、上方流の役者として、何ンと謂つても多見之助は根ッコの太い役者である。押しも動もならぬ大立者である。傑出した達者役者である。賣方次第では、隨分鴈治郎の上を乘越して出た人でもあつたらう。

多見之助の舞臺ぶりは、器用が五分、鍛えた腕が五分で出來てゐるやうである。鍛えた腕の部分には、昔の役者の俤と古風な巧者と味とがあり、器用な部分には、付燒刄の「ハラ」と生々しい技巧とが見える。多見之助は此の好い部分と嫌な部分とけじめがはッきりしてゐる役者である。言葉を換えて謂へば、器用と鍛えた腕とが程好く融和してゐない人だとも謂へる。そして何うかすると器用が出しやばり過ぎて、折角の「味」までを損ねることが少なくないやうだ。もし巧者といふことが藝の極致であつたなら、もし器用といふことが役者の全生命であつたなら、多見之助は完全に大成した劇壇の巨人といふことが出來るかも知れない。勿論多見之助は大成した役者には違ない。けれども巨人とまで讃美することは勿論、渾然として大成した役者といふことも出來ない。性根とか「ハラ」とかいふものに言分があり、其の天分に不足があるからである。

これが鴈治郎となると、性根とか「ハラ」とかに慊らぬとこはあつても、顏とか姿とか、または藝の質とかに、際立つて優れたとこを持つてゐるから、よし藝が行渡らなくとも、狹い領分内に於て渾然として大成してゐるとこがある。それがまた今日多見之助が、鴈治郎に一枚上に拔かれてゐる所以であらう。

多見之助は確に好い役者である。役者らしい役者である。しかし萬能足つて、一心足らずといふやうなとこがある。技には長てゐても、其の技が神に入つてゐない。煩いやうだが、出來には出來てゐても、達してゐないとこがある。だから一應はうまいと感心させても、その感心を何時までも人の頭に殘し得ない。人を魅するとか、感服させる力に乏しいからである。藝に德がないのだと謂へば然うも謂へる。役者にうまみが薄いのだと謂へば然うも謂へる。

多見之助の店は擴げられるだけ擴げられてゐる。そして店の間口の廣いのとは反對に、奥行が淺いといふ風がないでもない。

「室町御所」の彈正は大正二年三月の本郷座。これが初演。

「吃又」は大正二年五月の新富座。

本郷座の板額を見た時には、昔の嵐某とか淺尾某とかいふ板額役者が再現して芝居をしてゐるのかと思はれた。それが其の一時間ばかり前に、新史劇「室町御所」の松永彈正といふ活歴風の奸悪な謀叛人に扮した役者とは思はれなかつた。多見之助は板額といふ人形化させられた芝居の人物と、松永彈正といふ史劇の人物とを能く演分けてゐた。板額で上手を見せ、古風な味を出して見せるのは不思議はないとして、松永彈正でスツカリ史劇の人物になつて見せたのを見ても、奈何に多見之助が「腕」の役者であるかといふことが解る。更に「戀の火起請」といふ新式近松物で、平兵衛といふ和事師を見せたに至つては、其の多能に驚かざるを得なかつた。只此の多能といふ點だけでも、新進氣鋭の延二郎の奇才を以てしても、到底多見之助には及ばぬやうである。

新富座に於ける「曾我」の禪司坊は、御馳走役として、格別謂ふことはなかつたとして、さて「吃又」である。蓋し「吃又」は多見之助の得意藝に屬する物の一つであらう。而してこれが、役として、多見之助の器用な方面と、鍛えられた「腕」とが、最も明にチャンポンになつて現はれたものである。鍛えられた腕だから、動に於て運に於て間然するところが無かつた。一體に多見之助の藝風は隙の無い藝風であるけれども、其の隙のないといふことが「吃又」に於て最もよく發揮されたと思ふ。それに器用といふ奴が、面白く見せやうとか輕く見せやうとかいふ方面で、油斷なしに働く。物見をする時でも、將監に縋る時でも、雅樂之助と張合ふ時でも、死なうとする時でも、裏から表に投げた畫像を見て驚く時でも、乃至「舞」の件になつても、ともすると器用といふ奴が出しやばツて來て、「吃又」を小悧怜な手ばしこい人間にして爲樣がなかッた。「舞」の如きは殊に見てゐて心もちの好い程手に入つたもので、後になつて思出しても手際の鮮さ面白さがマザ〳〵と眼に浮ぶ。

雖然此の「吃又」は名人の「吃又」ではなかつた。假に名人の心もちがあり、其の氣込はあつたとしても、その魂に名人の深味とか心熱とてもいふやうなものが無かつた。而して多見之助もまたやがて然ういふ役者だといふことが出來る。

もう少し叮嚀に謂へば、此の「吃又」はもつと不器用であつて欲しかつた。もつとぶつきらぼうな人物であつて欲しかつた、そしてもつと茫ッとした、それでゐてどッしりしたところのある人物であつて欲しかつた。極端にいふと、多見之助の「吃又」は餘り凡俗であり過ぎたのである。行方が餘りに賑であり面白過ぎたのである。繪でいふと、線とか色彩とかに非凡な腕前を見せても、肝腎の心もちが疎にされてゐるといふ傾があつた。これも多見之助といふ役者が然うだからだと謂へば、然うもいへる。

繰返していふ、多見之助の「吃又」は才氣横溢で、隙が無さ過ぎた。それで體の構、眼の

配り、或はこなしに、茫ッとしてゐるといふよりは、薄恍けてゐるといふ風が見えて哀氣も薄ければ、靈性の閃といふやうなものも無かつた。しかし名人ではないが、藝道に一心を凝らしてゐる「工人」氣質がよく現はれてゐた。

多見之助は動に重きを置き、また動いて見せて了はうとする役者には違ないが、しかし決して性根を拋出してかゝつてゐる役者ではない。何れかと謂へば、或程度まで性根を捉へてゐる役者である。雖然それが才氣とか器用とか、また顔とか調子とかいふものに禍されて名人を普通の工人にして了ふといふ、先天的、または後天的の缺點を持つてゐるのである。所詮萬能足つて一心足らずとでもいふ質の役者といふことに歸着するのである。

しかし多見之助の役の全が然うだといふのでは無い。物に依つては、多見之助の性根がシックリ役の性根に當嵌ることもあれば、またしッかと捉へて、鮮に浮出して見せることもある。「板額」にしても然うなら、「室町御所」の松永彈正にしても先づ然うだといふことが出來る。

要するに多見之助は才人である。老いたる才人である。從つて此の人の「ハラ」も複雜なら藝も複雜である。

藝の複雜なことを謂へば、惡の分子、善の分子、實の分子、花の分子、柔な分子、固い分子、それが程好くこなされて何れの分子も、持つてゐる。役で謂へば、光秀彈正などの叛逆人も出來れば、操も出來れば、十次郎も、次第に依ッては初菊をもやる。「忠臣藏」の役々で脫線するのは九太夫と伴内位なものであらう。無論二枚目は樂なものだらうし、尾上も岩藤もお初も、實盛や盛綱も、太兵衞や八右衞門も、また上方式の三尺帶も、丁と演分けて行く腕前が備はつてゐる。そして新派も行けば、新史劇物にも可成に適る。而して板額とか政岡とか、重ノ井とか、相模とかいふかたはづし物や、「鳴門」のお弓と謂つたやうな女房役を得意藝にしてゐる。勿論上方役者は、大概何ンでもこなしつけるといふ流義ではあるけれども、多見之助のこなすには、器用以外に大分實の入つてゐるとこがあるやうだ。

柄を謂へばヅングリした方である。顔はと謂へばボテ〳〵してゐる。雜作も輪廓も整つてゐるながら、ボテ〳〵してゐる。加之首が短いので、何うも舞臺姿がスッキリしてゐない。またふッくらしたとこも、華麗なとこもない。さればと謂ッて、淋しいとか沈むだ方とかギスギスした方とかいふのでも無い。先づ普通と謂ッて了へば其ぎりだが、これといふ特色がないだけに、變化が自在である。重い役に扮れば可成どッしりしたとこを見せ、柔な役に扮れば柔にもなり、惡人になれば可成根强いとこを見せる。勿論根强いと謂つても、團藏のやうに骨ッぽいものでもなければ、柔いと謂つても鳴治郎のやうに渾然ともしないが、そ

の代り何方へでも向くといふ融通性がある。もし多見之助に先代菊五郎のやうな一味の凄味でも加へたら、今頃は大した役者になつてゐたらうと思はれる。

聲は上方固有の濁音で、大にぼやけたとこがある。太いには太いが引緊つてゐない。それでドスも利くけれども、割合に強味がない。よし強味はあつても、深刻なとこがない。そしてうまみも面白味もない。もし多見之助の聲にもう少し調子の高いとこがあッたら、其の役者ぶりに一段の光彩を加へたであらう。そして白廻には、矢張上方役者共通の癖が出て、聞馴れぬ耳には些か異樣に響くこともある。

註文を出せば際限がない。難ずれば何樣な役者にだつて夫々難がある。何ンと謂つても多見之助は東西の劇壇を通じて大きな役者の一人である。而して其の役の範圍が廣くて、藝の根柢も相應に固いとこに此の役者の生命がある。

## 七十、市村羽左衛門

坂東家橘の男初め竹松、のち市村家橘、明治三十六年、十二世羽左衛門をつぐ

名優か、但し只の人氣役者か。實力の人か、人氣の人か、今の役者を研究する上に於て、羽左衛門と菊五郎ほど興味のある役者はあるまいと思ふ。然ういふうちにもいろ〳〵な意味に於て羽左衛門の方が興味が深い。

竹松から家橘に、家橘から羽左衛門に――羽左衛門の役者運は、さながらに順風に帆を擧げて乘出すやうな勢でひらけて來た。すべて大頭になるには、手腕とか、實力とかの他に、運の神の助力が無くてはならぬものである。而して羽左衛門は、可成運の神に可愛がられてゐる人であらうと思はれる。

竹松時代には、娘役などをすると、背のヒョロリとしてゐたのが眼に殘ッてゐるだけで、格別何う此ういふほどのことは無かつたと思ふ。一部には棒鱈役者と謂つてゐた人すらあつた。家橘になつて抑々の當り役は「大晏寺堤」の新七であつたと覺えてゐる。羽左衛門が歌舞伎座に出て光つて見せたのは此の役が初めてゞあつたらう。家橘になつたばかりの家橘は、新七で天才の閃を見せると同時に、棒鱈から一轉して、將來を思はせる有望役者と折紙がつけられた。正に一飛躍であつたのだ。

それから年々に家橘といふ名は膨むで行くばかりであつた。宮戸座眞砂座あたりで大役をして納まつてゐた家橘は何時の間にか歌舞伎座といふ檜舞臺で、團十郎の甘輝を向うに廻して和藤内をこなしつけたり、或は同じ人の仁木に男之助といふ大役を擔つて立つたり、或は「春日局」の高圓に、見事當りを取つたりして、傍ら本郷座や東京座で「直侍」や「切ら

れ與三」や「八百屋半兵衞」や「實盛」や「仁木」や其の他樣々の大役をして、人氣は隆々として、少々大袈裟に謂へば一世を風靡するかの觀があつた。要するに淺草または中洲本郷あたりで賣出した家橘は、一飛躍、また一飛躍、花々しく檜舞臺に乘出して、押しも押されもせぬ人氣者になつたのである。其の活動ぶり、または出世ぶりは、實に目覺しいものであつた。

團菊の歿後——といふよりも、團十郎が歿してから間もなく、彼は家橘から羽左衞門になつて一段と役者を光らせるやうになつた。そして家橘時代に鍛えて置いた腕と、養つて置いた人氣とを以て、歌舞伎座に無くてはならぬ役者になつたばかりで無い、二番目は是非とも此の人の物でなければならぬやうになつて了つた。而して位置は左もあれ、其の働きどころに於て、菊五郎の繼承者になつた。

人氣か、實力か、運か。竹松時代のことを考へると、羽左衞門といふ役者は寧ろ不思議な役者のやうに思はれる。

事實また羽左衞門は、不思議な「能力」を持つてゐる役者のやうである。

端的に謂へば、羽左衞門の藝の根柢は左程深からうとも思はれぬ。けれども生氣潑剌たる其の舞臺ぶりには只何ンといふことはなし引つけられて了ふ。それが不得手な物であつても何ンでも、どこかに他の目を引きつけて置くだけの力を有つてゐる。これを一種の魅力だと謂へば然うも謂へる。而して羽左衞門は、半ば此の魅力に依つて好い役者になつたのだとも謂へる。

羽左衞門の魅力は天分である。奈何に練磨した技巧を以てしても、技巧だけでは此の魅力を有つことは出來ない。而して羽左衞門の强味と長所は其點にある。舞臺度胸があるといふ其の度胸も、此の魅力があるからではないだらうか。

度胸を戸板返しにすると、自信といふ奴になる。羽左衞門は、自覺してゐるにしろ、して居ないにしろ、確に自信のある役者である。尤も多勢の見物を眼の前に置いて、藝當を御覽に入れる程の者で自信のない者も無からうが、しかし大抵の役者はうぬぼれといふ程度で納まつてゐる。自信とうぬぼれとは親類うちではあるやうなものゝ、少くとも鳶と鷹ほどの相違がある。うぬぼれは嫌なものである。自信は小氣味の好いものである。而して羽左衞門が毎小氣味の好い舞臺ぶりを見せるのは、確かに强い自信があるからで、其の自信は自分に魅力があるといふ自覺といふやうなものがあるからだといふ論法になつて行く。

世間には羽左衞門の男前を讃美する人が多い。成程羽左衞門は役者ぶりの好い役者に違ない。横から見ても縱から見ても正眞正銘の好男子である。だがしかし、それで羽左衞門の魅

力を那のスツキリした男前の故だといふ人があつたら、それは至つて淺薄な考だと謂はなければならない。只男前だけで那如までに人を引付け得るものでない。もしまた男前、卽ち魅力であるとしたならば、羽左衛門の他にも羽左衛門位の魅力を持つてゐる役者も少くはないだらう。けれども羽左衛門のやうに魅力のある役者は居ない、斷じて居ないやうである。

繰返していふ、羽左衛門の魅力は男前の故ばかりでない。藝か、風格か、氣合か、調子か。それは容易に何れと定めて了ふことは出來ない――謂はゞ羽左衛門といふ役者のすべてに魅力がひそむでゐるのだとでも謂はうか。眼にもある、顏にもある、氣合にもある、藝にもある、そして白は勿論。那の小肢にチョコ〳〵刻むやうに歩む歩きぶりにまで、それがあると謂つて可いやうである。

眼に就て謂へば、誰かも謂つたことがあるやうに覺えてゐるが、羽左衛門の眼は「銀の猫の眼」といふやうな感じのする眼である。格別やさしいとか、柔和だといふ眼ではないが、と謂つて怖いとか險しいとかいふやうな眼でもない。尤も光に幾分の鋭さはあるけれども、それとても「鋭い」といふほど强度のものでない。只奈何にも隙のない眼である。叡智らしい眼である。平ッたく謂へば慧しいとも賢い眼だとも謂へる。そして冷い、勝氣らしい眼である。

冷いと謂つても、羽左衛門の眼は冷酷といふほど邪氣は無い。其程の壓力も嫌な分子もない。要するに自分の我儘の爲には、他を顧ぬ――といふよりも、――頓着しない――といふよりも、頓着しない風をしたり、また敢てすることの出來る程度の冷たさである。結局好い意味にも惡い意味にも怜利な眼だといふことになるのである。

だが此の羽左衛門の眼にも矢張魅力がある。それは愛嬌があるとか、色ッぽいとか、また團十郎式靈性の閃があるとか、團藏式の凄味があるとかいふのではないが、何となし感じが好い。所謂「銀の猫の眼」を見るやうに感じが好い。そして此の「感じが好い」といふことが、羽左衛門といふ役者の魅力になつてゐるとも謂へる。

顏にしても然うである。羽左衛門の顏は「銀の猫」を見るやうに感じの好い顏である。どんな羽左衛門嫌な人でもこれは是認しない譯にはいかないだらう。腮が小さいとか、尖つた顏だとか、または痩こけてゐるとか、色氣がないとか、愛嬌がないとか――まアいろ〳〵けちをつけては見るものゝ、結局それでスツキリしてゐて「感じが好い」といふことは打消すことは出來まい。いま少しく羽左衛門の爲に辯じて謂へば、よく非難をつけられる「腮が小さい」といふことも、左や右う非難をつけるほどのことはあるまいと思ふ。假に那の腮がもう少し大ぶりであつたとしても、それで羽左衛門の顏に何程の光彩が加へられたらう。言葉

を換えて謂へば、羽左衛門の顔は、腮によつて調和を破られてもゐなければ、顔つきを拙くしてもゐないばかりか、寧ろ腮の小さいことに依つて顔の調節が保たれてゐるのかも知れない。要するに羽左衛門の腮は羽左衛門の腮である。羽左衛門といふ役者の腮らしい腮である。そしてまた羽左衛門の顔は羽左衛門の顔である。羽左衛門といふ役者の顔らしい顔である。

「銀の猫」といふやうな感じがする顔——感じの好い顔！　感じの好いことに於て、羽左衛門の顔は、當代芝居國の逸品と謂つて然るべきであらう。

しかし此の感じの好い顔にも癖がないとは謂へぬ。先づ眼に就て謂へば、これは確か鬼太郎氏も謂つたことがあると覺えてゐるが、羽左衛門は見得を切つたり、または憤つた表情をする場合などに、拙な似顔繪のやうに兩の瞳を極度に寄せて變に眼を白くして見せる癖がある。それから何うかした場合に、眉と眉の間に八の字を寄せて、さも不機嫌らしい顔をして見せるが、是等はまだ〳〵我慢も出來るし、また羽左衛門の役者ぶりを下げもしないとして、こゝに一つ、是非とも止めて貰ひたい癖といふのは、白を張つていふ場合などに、羽左衛門は大きな口をあけ過ぎる。固より羽左衛門は大きな口といふのではない。平常は可成締つた口でありながら、例へば盛綱の注進受の後とか、「先陣問答」の平次で問答しながら突ッ込むで行くところとか、または富樫が詰寄ッて行つて、「さ、さ、何ンと、何アンと。」と極るやうな場合などに、白を張れば張るだけ口をあけるのが目についてならぬ。それで折角感じの好い顔があけつぱなしになり過ぎて見えることも少くない。尤もこれは聲を張れば、口も大きくなるのは當り前のことだと謂はれゝば其迄のことだが、それにしても羽左衛門ほどの人が目に立たぬ程度に加減の出來ないことも無いだらう。して此の口をあけたがるのは、白を張つた時ばかりとは限つてゐない。大きいか小さいかの違はあるけれども、世話物などをやつてゐて、輕い氣分で——謂はゞふざけた心もちであける。と謂つても、これは眞ンの些細のことである。所謂白璧の微瑕とでもいふべきである。

而して羽左衛門は、顔が感じが好いやうに姿も感じの好い役者である。實盛などになつて後向になつてゐると、足の割かたが少ないとでもいふのか、但しは内輪に過ぎるとでもいふのか、羽左衛門といふ人の素の脚つきが目について、些か弱々しい、そして見窄らしいといふ氣味もないではないが、これが正面を向いたとなると、スッカリ其の感じが消えて了つて、奈何にも鮮な、水際立つた姿に醉はされて了ふ。時代物にしても然うである。況や世話物になると——殊に羽左衛門の物になつてゐる直侍やお祭り佐七や切られ與三になると、歩きッぷりが何うの後向の脚つきが何うのと謂つてゐる段でない。姿と魅力だけで、見物が堪

能して了ふ。

羽左衛門の姿は、確に纎細で、爽で、麗しい。それだけ腰の骨がしつかりしてゐないやうにも思はれる。

羽左衛門は、顔から謂つても、姿から謂つても、しつかりしてゐるとか、がつしりしてゐるとかいふ質の役者ではない。白とても然うである。羽左衛門の白は、サラ〳〵と平地を流れてゐる水のやうな響があるとでも謂はうか。奈何にも爽な、輕い、快い味がありながらも、さてそれを耳の底に取止めるやうに聞澄ましても、只サラ〳〵と流れて行つて、一向に取止めることの出來ないと謂つたやうな感じのある白である。變化もあり、あやもあり味もあり快さもあるが、何うも力がない。音と調子上羽左衛門らしい特長はあつても、音量に不足があるとでもいふのか、聞いてゐる者の胸を打つて來るやうな強い響がない。けれども顔や姿と同樣、感じが好いので、その不足を補つて、且つ魅力といふ奴で、七難を隱してゐるといふ風がある。

而して、羽左衛門は、顔と、姿と、白と、藝と、そして舞臺ぶりとが、よく調和してゐる役者だとも謂へる。其處に羽左衛門の役者としての價値があるとも謂へる。そしてまた羽左衛門といふ役者は、此の調和と、魅力と、舞臺度胸とでも持つてゐる役者だとも謂へるかも知



れない。

繰返していふ、羽左衛門はすべてよく調和の取れてゐる役者である。役者の噂が出ると、那の役者の那の顔で、もう少し白が好かつたらとか、また柄は好いが藝は何だとか——よく不足な一面を捉へていろ〳〵なことをいふものだが、また謂はれるやうな役者も多いが、羽左衛門に限つて、それは謂へないと謂つても可いだらう。何も羽左衛門といふ役者が、其程に完全だとか、立派だとか、または傑出してゐるといふのではない。只調和が取れてゐる、よし各部分に不足はあつても、不足は不足なりに、奈何にもよく調和が取れてゐる。例へば顔が小さいとか、貧弱だとか謂つても、その顔は那の柄にピツタリ適つてゐる。また柄に重味がないとか、厚味がないとか謂つても、その柄は、那の藝とシツクリ適つてゐる。更にまた白がスラ〳〵し過ぎるとか底力がないとか謂つても、その白は那の藝と柄とにピツタリくつついてゐる。結局羽左衛門といふ役者は、その器は大きくないにしても、氣が利いてゐて、よく纏まりのついた名品であるとは謂へる。

藝の「質」にしても然うである。羽左衛門の藝は、氣合に於て團十郎をねらひ、形に於て菊五郎で行つてゐるとも思はれるが、しかも自分の柄と調子と力とを會得むで、強ひて團十郎式の意氣にも囚はれず、無理に菊五郎ぶりの形にも拘泥まず、氣合も形も、何處までも自分

の方に引きつけ、或は市村化して、巧に、且つ自由に運用して、そこに自分との調和をはかつてゐる。蓋し羽左衛門の自我と理性と才氣とは團十郎は團十郎、菊五郎は菊五郎、自分は自分とその差別をよく知つて、自分は何處までも自分で押して行かうとしてゐるらしい。そして其點に極めて氣の利いた、纏りのついたところがある。

その舞臺ぶりを謂へば、氣が利いてゐて、纏りがついて、何んの障礙もないところに特色があり、そして小氣味好く、齒ぎれの好いところに二重の魅力と快感がある。しかし熱がないと重味が足りないので、何うかすると上滑りになりたがる心配はないでもない。そして根はと謂へば、氣と度胸と調子とで行つてゐる藝であるから、味には乏しいと謂はなければなるまい。また幅の無いのと、深味が足らないのも缺點と謂つて然るべきであらう。

けれども幸に羽左衛門には魅力といふ強い武器を持つてゐる。それですべて不足の部分の補をつけてゐるやうなもの、、それにしても「切られ與三」などをやると、熱がないのとオツトリしたとこがないので、與三に若旦那上りといふとこが見えず、また度胸と怜悧とが出過ぎて、與三が奈何にも落付きはらつた眞の惡黨らしくなつて見えるといふ傾向を持つてゐる。そして「直侍」となると、幅のないせゐか、重味の不足か、直次郎に御家人といふ芬がついてゐないで、腹からの小强請らしく見える傾があるやうだ。

と謂つても、羽左衛門に品がないといふのではない、役者の柄として、小意氣な點に於て菊五郎より劣つても、品の點では恐らく羽左衛門の方が優つてゐるかと思はれる。それで「實盛」や「富樫」になると、よし貫目は及ばぬにしても、品に於て菊五郎を凌いでゐる。でありながら、「與三」や「直侍」になると人柄を幾分安くし、且つ小さくするのは、主として、熱がないのと、幅のないのと、そして尙だ藝に深味が足らないからだと謂はなければなるまい。

熱のないのは恐らくその性分であらう。そして二枚目式色氣のないのはその柄のせゐであらう。けれども幅の無いのと、味に乏しいのと、重味とか深味に不足のあるのは、柄と性分のせゐばかりとは謂へないやうである。露骨に謂へば、羽左衛門は尙だ藝の鍛えに不足がある。

何ンと謂つても、羽左衛門は尙だ四十を越したばかりである。役者としては、春秋に富むである。眞に藝の鍛えられるのは、これからであらう。そして眞に冴えた腕を見せるのは、これからであらう。

要するに羽左衛門は、役者ぶりとして藝壇の名品である。しかし役者として名人といふには、尙だ大分距離があるやうである。

而して今の羽左衛門は、「氣」と「調子」と「役者ぶり」と「魅力」とで持つてゐる好い意味の人氣役者である。しかも羽左衛門の人氣は、いろ〳〵な意味から、命が長いと思はれる。大概の人氣役者は、好い加減の年輩になると人氣が凋落する。けれども羽左衛門といふ役者は、その大概の役者ではないやうだ。好い加減の年輩になつても、ナカ〳〵人氣の凋落する人ではないやうだ。藝の質から謂つても、役者の風格から謂つても、何ンだか然うのやうに思はれる。

個人としての性格を謂へば、羽左衛門は極めて天眞爛漫な人だといふ。天眞爛漫を平つたく分析すると、邪氣がなくて、ずぼらだといふことになる。そしてこゝに何時の間にか、幕内または芝居好の間に、市村式、または羽左式といふ言葉がはやつてゐる。それにはずぼらとか、無頓着とか、物にかゝはらないとか、すばやいとか、いたづら好きだとか、放膽だとか、——いろ〳〵意味が籠つてゐるやうであるが、羽左衛門は果して然ういふ人であらうか。成程羽左衛門の一面には然ういふところもあるだらう。

しかし羽左衛門を眞のずぼらといふには、餘りに賢明であり、理智があり過ぎる。そして物にかゝはらないといふには餘りに近代人的の神經があり過ぎるやうである。若し羽左衛門を眞のずぼらと思つて接する人があつたら、羽左衛門は何處までもずぼらしい風をしながらも、腹の底で極めて冷に笑つてゐるだらう。要するに羽左衛門のずぼらは、自分の都合から來たずぼらではないだらうか。突ッ込むで謂へば他に對してのずぼらで、自分自身は案外ずぼらでないのではあるまいか。何故とならば、羽左衛門のずぼらには、何うも程と加減があるやうだ。

いろ〳〵謂つて大分ダラ〳〵氣味になつて來た。餘り長くなると、此方が襤褸を出すやうになるかも知れない。

要するに羽左衛門は、何時見ても感じの好い役者である。「銀の猫」を見るやうに感じの好い役者である。そしてスッキリした其の役者ぶりには不思議に魅力と、可成豐な江戸前の芬とがあつて、それが人氣の源泉となつてゐる役者である。其の舞臺ぶりを謂へば、上手といふよりも巧者質に出來てゐて、ゆるめる時にはゆるめ、張る時には張り、樂をして可い時には樂をし、骨を折る時には骨を折り、その活殺は自在である。そして些の屈托なしにスラスラと流れるが如き藝風は、毎見返つて見なければならぬ程に切れ味が鮮である。味を謂へば苦味も澁味も、またうま味とてもないが、一味ピリ、ッと辛いところがある。

最後にもう一度繰返して置く。羽左衛門は役者として名人とは謂はれないが、その風格に於て、確に當代歌舞伎壇の名品である。

五世尾上菊五郎の男。大正四年、坂東彦三郎と改名

# 七十一、尾上榮三郎

榮三郎といふ役者は、いろ〳〵な意味に於て興味のある人である。榮三郎は、將來大に伸びて行くか、それとも今のまゝで押して行つて終つて了ふか。もしまた伸びるとすれば何の程度まで伸びて、どんな風の役者になるか――これだけ考へても頗る興味がある。

それに榮三郎といふ役者は、一箇の人としても大分變つた人らしい。同時に藝風も變つてゐる――變つてゐると謂つては、言葉が適當でないかも知れないが、少くとも今の若手役者とは、殆ど全く異つた境地に立つて、的確に榮三郎獨特の領分を持つてゐると謂つて可いやうだ。

繰返していふ。榮三郎といふ役者を研究することは、いろ〳〵な意味に於て興味がある。一口に謂へば、榮三郎の舞臺ぶりは、歌舞伎劇のヌーボー式である。それだけ大きなとこがあり、大味なとこがある。それは必ずしも榮三郎の柄が大きいからといふばかりでなしに、藝の質に大きなとこがあるからではないだらうか。



その代り榮三郎の舞臺ぶりには、無器用らしく見えるとこがある。鈍いやうな、茫つとしたやうなとこが見える。榮三郎の舞臺ぶりは、一見甚だノホンに好い心もちの人のやうに思はれる。そして眞んとに然うだと思ツてゐる人もあるらしい。

よし然だとしても、榮三郎といふ役者だけは、それで貶すことが出來ないやうである。何故とならば、ヌツとしてゐること、茫つとしてゐること、ノンキらしく見えることが、卽ち榮三郎の榮三郎らしい特色であるからである。所詮こせつかず、騷がず、ノンビリとしてゐるところに、榮三郎といふ役者の味があるのである。名づけてヌーボー式とも、また大人式ともいふのであらう。それで榮三郎といふ役者が感じが可い。

無器用でも、ヌーボーでも榮三郎は感じの好い役者である。ヌーボーの本家ともいふべき高田實は何點かに邪氣と嫌味があつて、他に反感をもたせるやうことがあるけれども、榮三郎のそれには微塵も然ういふことがない。何處までも純である。眞に大人式である。それだけ榮三郎のヌーボーは無器用であり、且つ前受けはしない樣である。

それは然うとして、榮三郎は一見ノホンに見えるけれども、頭は素敵にハツキリしてゐて、所謂數學頭といふ方らしい。これを親近の人の話を聞くと、榮三郎は少年の時分から學問が好で、成績も好かつた方だといふ。それで理窟ばツたことで、菊五郎と議論でもすると、

必ず菊五郎を言ひこめて、お禮によく菊五郎のボンコツを二ツ三ツづゝ頂戴したものだといふ。今でも世間的の問題になると一門の分別者の一人として問題の解決者たる場合が少なくないとのことである。

それと、榮三郎が細工物に巧なことは可成有名であるが、これは指先が器用だからといふよりも、頭が數理的で物の割出し方が巧いからであるらしい。一體榮三郎は以前から全ての機械をいじくることに興味を有つてゐて、一時は工藝家にならうといふ志望もあつたとか聞いてゐる。是等のことから考へても、個人としての榮ちやんなるものは、決して舞臺でみるやうな、また外から見かけたやうな人でないといふことが證明されるだらう。

しかし何れにしても心持は純な人らしい。恰悧ではあるが、變なわだかまりとか、嫌なとこのない人らしい。そしてそれが舞臺にもよくあらはれてゐる。

榮三郎の「顏」に就ては、近く此雜誌に出たから謂はぬとして、さて聲である。榮三郎の聲は、榮三郎の有つてゐるものゝうちで最も惡いと謂はなければなるまい。菊五郎も聲が氣苦勞になつてゐる人だが、それでも此の方は尙だまだしまつたとこがある。

ぼやけてゐると謂つても榮三郎の聲は隨分ぼやけた方である。調子は太い方であるからドスが利かぬではないが、響に力がないので、いつも聞いてゐて齒痒く思はれる。白廻しに技巧がないだけに、これといふ嫌な癖もない代りに、餘り曲が無さ過ぎると思はれる。しかし何處に榮三郎式一種の愛嬌がある。もし愛嬌といふほどのもので無かつたら、榮三郎といふ役者が有つてゐる親しみと謂つて可い。此の愛嬌——または親しみが、榮三郎の聲の不足を補つて、餘程感じ好くはしてゐるが、榮三郎は遂に聲で損をしてゐる人である。もし榮三郎の「白」に鰭がつき、せめて菊五郎ほどの技巧としまりが出來て來たら、榮三郎は一躍して傑出した大家の一人になり得るだらう。而して役者ぶりから謂つても然うである。

榮三郎の舞臺ぶりは前にも謂つた如くヌーボー式である。そして大まかである。で大きさに於て、重味に於て、所謂市村座組の役者のうちで山のやうに聳えてゐる氣味がありながら、何うもふやけてゐるやうに思はれる。別な言葉でいふと、ハツキリしないとこがある。これは榮三郎といふ人の性質から來てゐるといふよりも、藝の質、または其の柄から來てゐるので、榮三郎の爲に奈何に辯護しやうとしても、辯護することの出來ない事實である。所謂榮三郎の藝は尙だ、榮三郎の柄を持ちあつかつてゐるのだとも謂へる。

それだけまた榮三郎は將來といふことを考へさせる。卽ち榮三郎の柄に實が入り、そして其の實の入つた柄を思ふまゝにあつかふやうに藝が熟して來たらば——然うしたら榮三郎は頭拔けたものになるに違ひない。少くとも頭拔けたものになるだらうと考へさせる。

何ンにしても榮三郎の藝にも柄にも尙だ實が入つてゐない。そしてこれから「實の入る」人のやうに思はれる。而して其點に現在の榮三郎といふ人に、興味もあれば、また役者としての强味も價値もある。要するに榮三郎は有望で、且つ大きな未成品である。すべて大きくなる代物は、發達が遲いといふ。そして大成するまではのゝいとか鈍いとかいふ分子を有つてゐるものだといふ。近いところでいふと、團十郎の如きも、若い時分には大根と謂はれてゐた。今の羽左衛門の竹松時代にも然ういふ傾があつた。よし其の柄と藝の質に相違はあつても「役者の質」として、榮三郎にも其の傾があるのではないだらうか。但し榮三郎は、大根といふほど拙な役者ではない。

そこで榮三郎の藝と、柄と顏と調子から割出して、榮三郎が大成したならば、どんな役者になるかといふことを考へて見たい。

榮三郎は何うしても重く大きくならなければならない役者だと思ふ。所謂世話物よりも、時代物に適した人とでもいふのであらう。此の意味に於て、榮三郎は、父の菊五郎に似ると いふよりも、團十郎に似た役者になるだらうと思はれる。

假に團十郎に似た役者になるとして、榮三郎は柄にも藝にも、團十郎よりも餘程世話味のかつた役者になるだらう。そして團十郎の役者ぶりを莊重といふ言葉で形容するとすれば、榮三郎は壯麗とでも形容するやうな役者になるだらう。柄か、藝か、左にまれ榮三郎は、團十郎の役者ぶりにくらべて大分華麗な分子がある。その點は幾分先の芝翫に似た役者になるかも知れない。同時に此の役者は現に何處か古風な味を有つてゐるのだから、或は團十郎よりもずつと古風な役者になるかも知れない。

と謂つても、榮三郎の舞臺ぶりに古いとこがあるといふのでない。柄か、顏か、要するに藝を離れて榮三郎といふ役者の風格に、一味古雅な趣がある。役者ぶりが大まかでノンビリとしてゐるせゐもあるだらう。そして其が無器用に見えるからでもあらう。

榮三郎は何時までも無器用らしく見える役者ではないかと思はれる。無器用が渾然として來ると「大味」になる。そして其處に榮三郎といふ役者の生命があり、大きな天分が發揮されはしないだらうか。

左にまれ榮三郎は器の大きい質の役者である。こゝに器といふのは、形ではない。形から謂へば、歌舞伎座の名物男團右衛門の如きは、恐らく當代大器の隨一人であらう。けれども團右衛門は遂に柄の大きいだけの役者のやうである。榮三郎の大器は柄のみのことでない。勿論大きな柄も、榮三郎の大器たる要素となつてゐるに違ひないが、それよりも寧ろ其の大きな柄の內面に大器らしい何物かゞひそむでゐるやうである。

榮三郎には何處までも「大味」な役者、無器用らしい役者でゐて貰ひたい。そして其が榮三郎といふ役者を大きくする最も賢い行方のやうに思はれる。

役に就て謂へば、活歴味を拔いた團十郎畑の一部分と、先代芝翫畑の一部分と、それと故人多見藏あたりの一部分が此の役者の持つてゐる領分ではないだらうか。卽ち團十郎どころとしては、直實役者であり、大判事役者であり、樋口役者であり、由良之助役者であり、松王役者であり、芝翫どころとしては、「山門」及「壬生村」の五右衞門であり關兵衞役者であり、意休役者であり、智惠内役者であり、「千本」の忠信役者であり、而して多見藏どころとしては、筆助とか「龜山噺」の藤兵衞と謂つたやうな奴役が確な領分のやうに思はれる。而して無論平右衞門とか、和田兵衞とか、鰻七とかいふやうな走り廻りと謂つたやうなところも可からうし、また「金閣寺」の松永だとか、「皿屋敷」の鐵山だとか、「箱根」の上野だとか、「矢口」の頓兵衞だとか、「十段目」または「馬盥」の光秀のやうな役も可いに違ひない。然うである。もし榮三郎のフヤ〳〵したやうな舞臺ぶりが引緊つて來たら、確に然ういふ役者であるといふことを躊躇しない。榮三郎の天分は確かに然ういふところがあるのである。

要するに榮三郎といふ役者は、今のまゝでずつと不器用役者で通して了ふか、それとも頭拔けて大きな役者になるか、二ッに一ッ、何方かといふ役者である。言葉を換えて云ふと、好い加減上手役者になつて、宙ぶらりんになつてゐることの出來ない役者である。出來ないといふよりも、なり得ない役者である。名優か大根か、大將か雜兵か、――眞に何方かである。而して其處に榮三郎といふ役者の興味もあり、價値もあり、また非凡なところもある。榮三郎は結局大なる未知數である。

## 七十二、澤村宇十郎

大正六年三月死去。

どんな大歌舞伎に出ても端敵役者として、老巧役者として立派に通れる人である。しかも身分から謂へば、澤村家嫡々の血筋をうけて、今の宇十郎には叔父に當る人だといふことだ。でありながら、弟子筋の源之助に向つて、「太夫さん、太夫さん」と平氣で謂つてゐるほど洒落な人である。婆婆ッ氣がないと謂へば、婆婆ッ氣のない人、物を心得てゐる人と謂へば、物を心得てゐる人、――何ンにしても人間が些ッと變つて出來てゐるやうである。而して舞臺ぶりもまた變つてゐると謂へば、然うも謂へる。

宇十郎の舞臺ぶりは、サラ〳〵したうちに、一味古風なところがある。そして其處に面白味もあれば、腕に確なところがあるやうにも見える。此の人は中年者だとか聞いてゐるが、それでも舞臺巧が積むでゐるだけに、藝風の何處やらに生粹らしい江戸らしい芬が殘つてゐる。

三座時代の舞臺には、宇十郎のやうな役者が大勢ゴロ〳〵して、立者の芝居を面白くしたやうに思はれる。虚實は何うだか知らないが、何ンだかそんなやうな氣がする。そして宇十郎といふ役者は然ういふやうに思はせる役者である。

先づ顔付を謂へば、宇十郎の顔は見るから一と癖ありさうである。眼は落込むで、ギロリと鋭い光がある。頬と腮に尖りがあつて、それが顔の調子を嶮しくしてゐる。で、憎々しいとか太々しいとかいふものではないが、何ンとなし狡ッ辛さうで、また人が惡さうである。

而してまた其が利いて或る種端敵役者として、自ら其人になつてゐることがある。

要するに宇十郎は、或る種の端敵役一點張の役者のやうである。それも大時代のものとか、色氣がなければならぬといふやうな物は、絶對に可けないと謂はれぬまでも、先づ不向の方であらう。そしてまた此の人は、道化式の味にも乏しいやうである。

此ういふと何んだか、宇十郎の舞臺ぶりが甚く生眞面目のやうに思はれるが、必ずしも然うでない。

成程宇十郎の舞臺ぶりには堅いところがある。それは手堅いといふよりも、少しぎすつくやうなところがあつて、何ンとなし堅い感じがする。そして此の堅さは、藝よりも寧ろ其の人柄から來てゐると謂つた方が、至當であるらしい。

四世嵐璃寛の門。死去。

宇十郎の骨つぽい顔、凹んだ眼――何處の舞臺で見ても顔付からして些ッと變つてゐる。而して其の顔付が骨つぽいやうに、舞臺ぶりも骨つぽい。

宇十郎のやうな質の役者は、よし大歌舞伎に居据つてゐたとしても、見物には餘り目立たずに了ふ人の方である。況や宮戸座あたりに燻つてゐては、遂に浮む瀬がないやうである。けれども芝居に取つては――よし其が何ういふ芝居であつても、無くてはならぬ役者である。――宇十郎のやうな役者は段々に無くなつて行く。然ういふ意味から謂つても、宮戸座あたりで、此の人の舞臺ぶりを見るのは何ンだか悦しいやうな氣がする。

## 七十三、嵐巖笑

大阪役者大頭の一人である。東京には一度も來たことはないやうだが、東京には些ッと例のない地位にゐる役者である。もし故參とか、古顔とかいふことをえらいとしなければならぬとすれば、隨分えらい役者である。それだけ小村屋は、隨分古い小村屋である。

團藏が大阪にゐた頃であつたと思ふ。何ういふ譯であつたか、巖笑が團藏をつぐとか、つ

がせるとかいふ噂があつた。此の頃でこそ鴈治郎が勘三郎をつぐといふ噂がある位だから、格別驚くにも當らないが、その頃としては可成異ンなことに思はれた。だが幸か不幸か、噂は噂だけで立消になつて了つた。けれども噂にしろ何ンにしろ、團藏をつぐとまで謂はれた役者であるから、所謂千兩役者には違ひないのだらう。千兩役者と謂へば、小村屋の親方は梅玉と駢んで、役者中の分限者であるさうだ。

それは然うとして、大阪役者のうちでも此の親方ぐらゐ地位のぐらつく人はないやうだ。時には大阪の大歌舞伎、浪花座あたりで、鴈治郎一座に加はり、多見之助などよりも番付面が上にゐるかと思ふと、小さな芝居に出て光一芝居をやつたり光一で旅廻りをやつたりしてゐる。そこで理窟が、巖笑が一流の大名題であつたり、また長太夫松之助輩の達者連と變りのない役者であつたりするといふことになるのである。

役にしてもまた然うだといふことが出來る。巖笑は大芝居で下廻り式の役をして納まつてゐることがあるかと思ふと、多見之助といふ上手を源藏に廻して松王をして反りかへつたり由良之助をやつて納まつたり、また仁木彈正で眼をむいて見せてゐることもある。で素人には、巖笑といふ役者は、えらいのかえらくないのか頓と解らぬ。しかし地位、或は役者としての身分を別として、巖笑は餘りえらい役者ではないやうだ。所詮藝が根ッから芬しくないのである。

大阪では巖笑のことを、古い、そして大きな大根といふ説があるさうだ。そして大根の二字「大」の字を鴈治郎の賢息長三郎が頂戴して、「根」の字は巖笑が貰はなければならないことになつてゐるとか聞いてゐる。長三郎の大根は若いだけに反ッて見込があるとして、巖笑の方は老大家の列に加はつてゐるだけ、大根の根が張つてゐるらしい。

或大阪の芝居好は、もしも巖笑が、東京役者であつたならば、權三郎以前に名優と奉られ、關三以前に親方と崇められてゐただらうと謂つてゐた。これは勿論チト皮肉に過ぎるやうであるが、それにしても穩當な大阪人は、小村屋を大根、大根と謂ひながらも、鴈治郎一座にでもゐる時は、相應に敬意を拂つてゐる。そして中には「巖笑はんは何も謂はずに坐らしとくと、綺麗で立派おますナ」といつてゐる度量の廣い芝居好もある。

確か明治四十一年の秋の頃であつたと思ふ。中の芝居で鴈治郎の「太十」の十次郎といふ極付物に對して、巖笑が初菊をして見せたことがあつた。また何時だつたか此の人の時姫を見たことがある。凡そ此の二役を見た人で、巖笑の大根たる所以を解しない人もなからうと思はれる。それが單に昔振袖役者だつた人が、臺が立つたからだといふだけならば大目にも見る。我慢もする。けれども苟くも時姫や初菊をしようといふ人が、女形の作法すら心得て

居らぬげに見えたに至つては、呆れざるを得なかつた。仁左衛門の虎藏の如きも種々な意味に於て、左や右うの沙汰のある代物であるけれども、それでも巖笑の初菊などにくらべると、仁左衛門の虎藏は尙だ〳〵有難いものである。

妄と悪くいふやうではあるが、達者揃ひの大阪の大頭のうちで、巖笑一人だけは全く棒鱈と謂つて可いやうだ。

しかし何ンと謂つても若い時分は、多見之助よりも一足先に出た花形として、綺麗でもあり、人氣もあつた役者である。今でも立派な方なら、押出しも大頭だけの構はある。成程默つて坐ツてさへゐたら、何處へ出しても大名題の代物に違ひない。

加之此の人には、所謂「新し味」を出すだけの技倆も、才覺もないだけに、明治式藝風にかぶれたことが無い。で古臭いと謂へば謂ふものゝ、何處か古風な味がないでもない。それが安つぽい骨董品に對するやうな味であるにしろ、幾分「古風な味」といふものを有つてゐる。そして其處に巖笑といふ役者の興味もあれば、生命もあるやうだ。もしも大根巖笑に取得があるとすれば、これである。只此の一點である。

役でいふと、「兒來也」のやうに柄だけで見せるものは、大阪では先づ此の役者の物と謂つて可いだらう。それとしても上手だとか、巧者だとか、または當り藝だとかいふ方ではない。所詮柄から來た欲役で、どこか「好い」といふだけである。極言すれば、「見て呉れ」が可いといふだけである。而して其他の役——巖笑の領分になつてゐる其の他の役々も殆んど全て然うだといふことが出來る。

何しろ那の顏である。「役者の顏」として先づ完全に近いと謂つて可い位立派で、そして美しさもある顏である。上手拙さへ謂はなかつたら巖笑は隨分役の廣い役者と謂つて可いやうだ。

茲に試に些つと自分の見たゞけの役だけを並べて見やう。先づ「忠臣藏」の役々からいふと、判官に平右衛門、由良之助、それに戸無瀨、「曾我」の十郎、「先陣館」の盛綱、「封印切」の忠兵衛、「菊畑」の智惠内、「鳴戸」のお弓、「新薄雪」の腰元籬、「寺子屋」の松王、鈴木主水、「野晒」の提婆の仁三、「先代萩」の仁木、——數えると隨分ある。無論巖笑とても役者であるから、それに不思議はないのだが、巖笑の「藝」といふものから考へると、些か不思議でないでも無い。尤も此のうちで何うにか戴ける代物と謂つたら、十郎とお弓位のものであらう。

要するに巖笑は、「柄」だけで持つてゐる役者のやうである。それは年が年だけに、舞臺の甲羅が經てゐるので、小芝居または旅廻りの座頭役者として、おどかしが利く。强て謂へば、內儀役なぞは好い方であらうが、それとても大舞臺向とは謂へない。巖笑は遂に柄だけの千

兩役者のやうである。

初名黒川市藏
死去。

## 七十四、中村嘉七

嘉七では甚だ通りの悪い向もあるだらう。黒市、またはデボ市と謂へば、名古屋から西へかけて、津々浦々まで響いた古い達者役者の一人である。

嘉七は古い役者といふばかりでない。役者としての苦勞といふ苦勞を嘗めつくして來た人ださうだ。腕も鍛えに鍛えたといふ方らしい。て些ッとした輕い役をやつても、巧者らしい。そしてナカ〳〵確な腕前が窺はれる。先づ大阪での百戰練磨の古强者と謂つて然るべきであらう。

一體嘉七は、黒市時代には旅にばかり出でゐて、大阪に居ついてゐる事が少なかつた。それが仁左衞門に引立てられて、嘉七と改名した。以來名前に免じてと云ふ譯か、よく大歌舞伎に顔を見せるやうになつた。

一つは大阪には段々老練な巧者役者が少くなつたせゐもあるだらう。言葉を換えていふと、嘉七は必要によつて引上げられた役者と謂つても可いのである。それだけまた嘉七は腕に確なとこのある役者とも謂へる。



黒市時代には隨分思切つた場當りをやつて、大阪式鈍臭を極度に發揮してゐた。それが大歌舞伎に出たとなると、行方をぐつと地味にして、黒市とは殆ど別人のやうな舞臺ぶりを見せるやうになつた。そこらから考へても、嘉七の腕には實質のあることが解る。

自分は此の人の黒市時代に、或る小芝居で平右衞門を見たことがあつた。それが所謂大變物とでもいふのであつたらう。此ういふ役としては顔が既に餘程珍であるのに、變挺な聲を出して切りに見得をきつて大芝居をする。場合によつては鈍臭も結構として、大概の鈍臭に驚かぬ自分も遂に大中にあてられて退却したが、その後程經てから、羽左衞門が大阪で「お祭り佐七」をした。その時が丁度黒市を嘉七と改めたので、黒市改めの嘉七は伴平をやつてゐた。そして此の伴平役は、黒市が嘉七と名の異つたやうに、人も異つたかと思はれるやうな出來であつた。出來が好い悪いといふよりも、小芝居の大立者が、スッカリ三枚目になりきつてゐたのに感心させられて了つた。殊に大阪役者としては、大舞臺ならば大舞臺、小芝居ならば小芝居と、場所柄のわきまへのあるだけでも購つてやるだけの價値はある。

役者の質を謂へば、端敵を身上として、或種の敵役と道化も行くと云ふ方であらう。藝ばかりでなしに、顔付からして然うだといふことが出來る。自體此の役者のおでこッぷりはナカ〳〵振つたものであるが、そのおでこの下に、いつも天井を覗つてゐるやうな眼がまた頗

るギョロリとして、小面憎くもあれば變つてもゐる。

何ンにしても嘉七は、犬上刑部式のお家騒動の張本人や「お祭り佐七」の伴平式の悪侍が上手である。がしかし此の人の悪黨は、純大阪式の色に染上げられてゐるだけに何處までもお芝居の悪黨である。もう少し説明的にいふと自分たちが子供の時分に見た芝居で、甚く小面の憎かつた奴として頭に殘つてゐる敵役の俤——嘉七の悪黨を見ると、つい其が思ひ出されるといふやうな悪黨である。それだけ他の敵役と異つた味があると謂へば然うも謂へる。假に東京の役者を引合に出すとしたら、誰に似てゐると謂はうか。さしづめ適當な人がないが、強て謂へば宇十郎を野暮に太ッこくして、更に達者にした役者とでもいふのだらう。左にまれ安い役どころの役者でありながら、どこかに太ッこい、しッかりしたところのある役者である。

それで品と貫目に乏しくとも、中芝居ならば結構工藤もいけるだらう。また「兒雷也」の八鍾鹿六などは、大阪式人形振で見せたりなどして、臭からうが何ンであらうが、古風と達者でやんやと謂はせて了ふ。それから「小笠原騒動」の岡田良助といふやうな役になると本役ともいふべき方で、「伊賀越」の蛇の目の眼八なぞは樂な方である。そして「鈴木主水」の源左衞門とか、「お祭り佐七」の伴平とか、または「本藏下屋敷」の伴左衞門といふやうな色氣のある端敵になると、少くとも大阪では折紙のついた此の役者の專賣物である。要するに嘉七は、箱登羅と甄助新十郎あたりを丸めて一つにして、その上宇十郎のやうな一味古風なとこを加へた藝風とでも謂はうか。役次第、舞臺次第では、ナカ〳〵光る役者である。

大阪では例の箱登羅が樂屋名人だとか何ンだとか謂はれてゐるさうである。けれども箱登羅の舞臺ぶりは何處までもオッチョコチョイで、小細工で、薄ッぺらである。そして藝にも役者にもまだ〳〵これといふものがついてゐない。嘉七となると、藝にも役者にもサビがついてゐるばかりでなく、その血管には大阪傳統の安敵の血が流れてゐるかと思はれる。其程嘉七といふ人は古い匂のついた役者である。そして嘉七といふ役者の價値は其點にある。所詮嘉七といふ役者には古臭いといふことが生命となつてゐるのである。

松本幸四郎の門、初名市川桃吉。死去。

松本高麗三郎

## 七十五、松本高麗三郎

背がスラリとして、役者ぶりは些ッと江戸前に出來てゐる。顔も中高で、役者の顔として甲種合格の方と謂つて差支が無い。宮戸座あたりでは、ナカ〳〵大役もつけば、無人の時などは、納つたとこを見せてゐることもある。また大した畑違の物でさへ

なかつたら、何ンでも普通は行けるやうである。所謂ドン臭がないのと、悪く上手ぶらないので、嫌味がないのが、何よりの取得であらう。自分の見た限りでは、少々武張つた物が此の人の柄にはまるらしい。體の何點かに落付いたとこがあるからであらう。

體に落付があるばかりでない、高麗三郎は舞臺ぶりにも相應に落付を持つてゐる。それにはよし若いにしてはといふ割註がついたにしても、落付がある。落付が仰山だといふならば、神妙なところがあると訂正を加へても可い。左に右此の人には、育か質か、變に輕はずみのとこや、コセ〳〵したとこが無い。尤もこれは、こせつき屋の多い宮戸座あたりにゐる故もあるかも知れない。そしてまたこせつかぬだけ其だけ、器用がないとか、小手先が利かないとか謂はれるかも知れない。

自分は嘗て此の人の「紅葉狩」の更科姫を見たことがある。また「車引」の梅王と「寺子屋」の千代と「双蝶々」の長吉と「碇知盛」の義經といふやうな役々を見たことがある。或物は甚だ水ッぽいものであり、或物は甚だ氣の無いものであり、而して或物は甚だ神妙であつた。

高麗三郎は決して上手な役者でもなければ、面白味のある役者でも無い。悪く謂へば、平凡とも、ヌッとしてゐるとかいふのであらう。其の代り是といふ癖がない。樂之助のやうに妙にコセ〳〵もしなければ、傳次郎のやうに悪く役者ぶつても見せない。また權三郎のやうに糞落付に落付いてゐるといふ風でもない。と謂つても、此の人等よりも、高麗三郎の役者が好いだとか、上だとかいふのではない。只役者が尋常に出來てゐるだけである。

それにしても高麗三郎のいきみ聲の那の白は困つたものである。粘ッこいなら粘ッこいで我慢もするが、それがいきむだ切口上式とあるから、變に耳觸りで、頗るあやまらざるを得ない。高麗三郎は折角の役者ぶりを、白で少からずぶち壞してゐる人である。

顔か、姿か、それとも全ての樣子か、高麗三郎は全ての樣子が、何點か、故人權十郎に似たとこがあるやうに思はれる。殊に兩刀をさして裃をつけた場合に然う思はれる。或は自分だけに然う思はれるのかも知れない。

白さへ聞苦しくなかつたら、小芝居の役者として、高麗三郎は先づ筋の好い役者と謂つて差支ないだらう。しかし高麗三郎には何うか小芝居の役者になりきつて貰ひたくないものである。機會を見て修業になるやうな舞臺に出て貰ひたい。鍛え方さへ好かつたら、玉とは光り得ぬまでも一と花咲かせることもあるだらう。

五世嵐璃寛の男、初名嵐和三郎。のち璃寛をつぎ、大正九年九月死去。

# 七十六、嵐德三郎

此の人は和三郎時代に一度東京へも來たことがあつたと思ふ。しかし格別此うといふ程のことも爲出來さず、東京で極めて馴染の薄い人である。けれども大阪では一と頃の人氣といふものは、それはすばらしいものだつたといふ。丁度十年前のことで、その頃の大阪の人氣は、殆んど此の人と芝雀に集つてゐたと謂つて可い位だつた。今の人氣者でいふと、延二郎と我童――或は其以上に人氣があつたかも知れぬ。

人氣の蔭には大勢の女がついてゐる。德三郎も隨分女から取りつかれた方らしい。それと此の人は役者ばなれのした熱の加減で、よく駈落をしたものだ。それで駈落役者といふ異名をさへつけられた。或る新聞に葉村屋にやりたいものは自動車だなどと書かれたこともある。それほど此の人はよく駈落をした。それが爲に此の人を引立てゝゐた仁左衞門に迷惑をかけたことも一再でない。また其が爲に人氣に影響したことも輕少でない。けれども心もちが若樣式に出來てゐる德三郎は、そんなことには少しも頓着しなかつた。女が出來て些ッと義理に絡められると、直に舞臺でする意氣事を其のまゝにドロンを極込んだ。そして福々だつた葉村屋の身上も滅茶々々にして了つた。

此の無分別極まる爲方は、今の人に謂はせると馬鹿だといふだらう。しかし德三郎の爲に辯じて謂へば、そこに德三郎といふ人に、昔の花形らしい面白味も、なつかしさもある。此の人の無分別と不行儀を責める前に、先づ此の人の意氣と情熱とを購つてやりたい。

それは然うとして、記者は德三郎の和三郎時代の舞臺ぶりはよく知らない。只振袖のよく似合ふ役者であつたことだけを覺えてゐる。何ンにしても若女形には年が敵である。七八年前までは、德三郎の振袖姿は、確に大阪劇壇の花であつた。そのほッそりした姿は、ういういしさと可憐らしさに於て優り、古風で艶であつた。それが當今となつて見ると、人氣の凋落と共に、ういゝしさも美しさもスッカリ衰へて了つた。蓋し臺が立つたといふのであらう。

と謂つても、それで德三郎の役者が駄目になつたといふことは出來ない。若女形として衰へた德三郎は、内儀役として年增役として、役者ぶりに落付と深味が加はり、なつかしみが一轉して、ゆかしみが付いて來たやうである。そして所謂年增美なるものを發揮して來た。自體葉村屋の若女形としての美しさは、福助の若女形としての美しさから、あの些ッと強い理性の閃きといふものを引去つて、更に弱々しさと可憐らしさを加へたやうなものであつ

た。その儚ないやうな淋しい美しさが今に殘つてゐて、此の人の年增美に一種の情趣を添へてゐる。而して此の人の藝風も矢張然うだといふことが出來る。こゝに其の一例を擧げて見やう。

鴈治郎の例の「椀久」の書下ろしの當時のことであつた。鴈治郎はこれを神戸で見せたことがある。その時德三郎は許婚のおさんといふ役をしてゐた。此の時には「店の場」がついてゐたので、おさんの演どころがあつた故もあらうが、此のおさんは大した出來であつた。大した出來であつたといふよりも、德三郎といふ役者の柄にシツクリ嵌つて、さながらにおさん其人を見るやうであつた。といふのは、あのおさんといふ娘上がりの若い嫁の「あきらめ」といふものに充ちた溫順な心もちと、おとなしやかで淋しい、しかも色氣のある人柄とが、奈何にも鮮に浮出して、大阪の船場あたりには、今も德三郎式おさんのやうな女が居さうに思はれたからである。尤も福助のおさんとても惡くはなかつたが、「椀久」のおさんとしては、德三郎の方が遙に優つてゐたやうに思ふ。顏にしても、其頃はまだ〳〵德三郎の方に軍配が上つた。所詮「椀久」のおさんといふやうな役で、德三郎の特色が最もよく發揮されるのである。それは弱々しい女性である。淋しい、そしていた〳〵しいやうな女性である。

一口に謂へば德三郎は際立つた特色のある役者である。同時に鼻につくやうな癖のある役者である。德三郎は無論此の癖と特色によつて、役者ぶりを損ね、舞臺を窮窟にしてゐるが、代りにはまた此の癖と特色とを生命としてゐる役者だとも謂へる。で癖と特色とに依つて、役に成功した場合には、殆んど天才者ではないかと思はれるやうな出來榮を見せる。而して德三郎の得意藝なるものは、何れも此の癖と特色との醇化したものだとも謂へる。

要するに德三郎は、何ンでも間に合ふ大阪式器用な役者ではない。また上手とか、達者とかいふ質の役者でもない。只何ンとなし好いとこのある役者とでも謂はうか、少くとも德三郎好に謂はせたら然う謂はれる質の役者である。殊に德三郎に嬉しいのは、所謂附燒刄といふ氣味の微塵もないことである。好からうが惡からうが、何處までも自分の物だけで——德三郎は德三郎で押して行つてゐることである。

これはしかし、德三郎が自覺してやつてゐるのでは無いかも知れぬ。何方かと謂へば藝の根柢の淺いのと、柄と不器用とに制縛されて、止むを得ず然うなつてゐるのであらう。よし然うだとしても、德三郎が每掛値のない自分を見せてゐる卒直な藝風は購つてやらねばならぬ。

人氣は落ちても、花が衰へても、德三郎の役者の價値と特色には何等の影響はない。假にあるとしても、娘が年增になつたといふだけのことである。

年増になつても、德三郎はまだ〳〵お光役者、お三輪役者である。中將姫なども大阪では先づ此の人の物であらう。お三輪の如きは、型とか、型と役者ぶりから出る味にいろ〳〵な不服はあつても、德三郎に那如した憐れな女の血と魂が通つてゐるかと思はれるやうなことさへある。殊に竹雀のとこと、手負になつてからとは、一段と德三郎といふ役者の特色が活躍する。それだけ八重垣姫や時姫のやうな濃艶なとこのなければならぬ役に適しない人だと謂へば然うも謂へる。

更に内儀役としての德三郎は、若女形としての其よりも一層勝れたるものがある。前にも謂つた如く今の德三郎は娘役よりも年増役に適してゐる。中にも「酒屋」のお園とか、「卅三間堂」のお柳などは、殆んど此の人の專賣物として、他には眞似の出來ぬところがある。また「四谷怪談」のお岩の如きは、よし菊五郎式の凄味や怖ろしさはなくとも、化物にならぬ前、卽ち那如したみじめな目に逢はされる女として、淋みに於て、いた〳〵しさに於て、德三郎には德三郎としての面白味と味があると謂つて可いやうである。而して是等の役々の成功は、主として、此の人の役者ぶりから來る。そこで片はづし物になると、藝よりも寧ろ其の役者ぶりが禍して、多く芳しからぬ出來榮を見せるのは、蓋し止むを得ぬことであらう。

要するに德三郎は、役の領分の狹い役者である。しかし其の狹いうちに頭拔けて光る物を持つてゐる役者である。そして其の狹い領分さへ呼吸してゐたら、一種天才肌の役者として大阪劇壇の一異彩たるを失はぬ。女形としての德三郎は確かに然うである。役者ぶりから謂つても、藝から謂つても然うである。

雖然時勢にかぶれてか、德三郎が立役をやるのは甚だ以て悲觀すべきことである。此の人の人氣頓に衰へたといふのも、一ツ是が祟つてゐるのでは無からうか。

德三郎が立役に手を出しかけたのは、確か仁左衞門の荒木又右衞門で、柳生飛驒守をやつた頃からであつたと思ふ。それから新作の内藏之助をやつたりして、葉村屋の太夫さん、大分納まつてゐるげに見えた。そして當時大阪の或新聞は、此のいた〳〵しい太夫さんの立役なるものを推賞した。以來德三郎は追續々々そりツかへる役を見せるやうになつて來た。而して此の惡傾向は次第に膨張して、遂に「野晒」の提婆の仁三を見せたり、何うかすると旅などで「鞘當」の不破を見せたりするやうになつては、全く以て言語道斷、折角の太夫を減茶にして了つた譯である。

これはしかし德三郎自身の考違か、それとも興行師側の罪か、それは別問題として、左にまれ、德三郎の立役は何れの點から見ても取得がない。先づ白には妙な癖が連發する。顏はと謂へば似而非なる羽左衞門式で頗る非常なる貧弱とある。而して體の構へがヘナ〳〵で頭

でなつて居らぬ。所詮德三郎の顏にも白にも體にも、はた藝にも、立役としての資格がないのである。されば立役としての德三郎を左や右ういふのは氣の毒なやうにも思はれる。で、ここには女形としての葉村屋を尊重して、唯出來るならば、柄にない立役は廢めて貰ひたいとだけ謂つて、後の文句は預つて置く。

よし然うだとしても、それは德三郎といふ役者に取つて、少しも不名譽なことではない。寧ろ一切の立役の出來ぬといふ其事が、德三郎の眞價であり、際立つた特色のあることを證明してゐるのかも知れない。卽ち德三郎は眞に女形らしい女形であると謂へるかも知れない。何ンでも出來るといふことは必ずしも役者の誇でないと同時に、特殊な、——それは窮屈と謂はれる位特殊な藝に活きてゐることが役者の誇となることもある。

德三郎は何處までも德三郎の領分を固く守つてゐて貰ひたい。そして狹いが優れた天分を充分に發揮して、將に殘燈明滅の體にある葉村屋の家を復興して貰ひたい。近年大阪では芝居熱が衰へると同時に、役者崇拜熱が著しく下降したといふことであるけれども、それでも芝居道では江戸と對抗してゐた土地である。中には葉村屋の家が大阪芝居と何ういふ關係があつたかを知つてゐる人が居ないでも無いだらう。そして此の名門の衰微を惜むでゐる者も居ないとは謂へぬ。痩せても枯れても德三郎は、所謂大瑪寬の嫡統である。德三郎も其を考へたら少し態度を愼重にして、變な野心から、間違つた道へ踏込むやうなうろたえたことはして貰ひたくないものである。

しかし德三郎は何處までも上方式に出來た役者である。芝雀なども其方であるが、德三郎となると芝雀よりも一層大阪で生れて大阪で果なければならない人のやうに思はれる。それほど此の人の藝風は大阪の地方色といふやうなもので染つてゐると謂へば然うも謂へる。左にまれ延二郎や我童福助あたりは、大阪臭いといふうちにも、何點か大阪ばなれをした萬人向のところがある。けれども、芝雀や德三郎となると、純粹な大阪役者といふ感じがする。それだけ、東京の芝居好には悅ばれぬかも知れぬが、大阪趣味を愛好するといふ點から謂つても、また一種の特色を愛するといふ心もちから謂つても、二人の藝風の妲きは大切に保存して置きたいと思ふ。但し芝雀と德三郎では藝風も役者ぶりもスツカリ違ふことは謂ふまでもないが、只大阪味の深いこと濃なことに於て、二人は殆んど兄弟のやうに酷似した役者と謂へる。

繰返していふ。德三郎は極めて領分の狹い役者である。けれども一種の風格のある役者でその天分から謂つてもその實力から謂つても、決して今のやうな悲境に沈倫させて置くべき人ではないと思ふ。

# 七十七、市川松蔦

市川左團次の門。初名市川左喜松、のち莚若。

明治四十五年、三世松蔦をつぐ。

今の女形のうちで、松蔦ほど變つた役者は無いだらう。其の立場から謂つても、その出身から謂つても、其の藝から謂つても、また其の風格から謂つても味から謂つても然うだといふことが出來る。

もし特別に松蔦を毛嫌する人でなかつたら、また何等かの反感のある人で無かつたら、誰しも松蔦を嫌だといふ人は無いだらう。平たく謂へば人好のする役者、難しく謂へば魅力のある役者といふのであらう。好きといふことに程度はあつても、松蔦は誰にでも好かれる役者である。藝者も好く、女學生も好く、令孃も好く、娘さんも好く、書生さんも好けば、紳士も好く。所謂人氣役者である。ひゐき役者である。

但し人氣役者と謂ひ、ひゐき役者と謂つても、松蔦の其は從來の其とは些か意味が違つてゐるやうである。何う異つてゐると謂はれると些ッと說明に當惑するが、ひゐきにする態度も心もちも違ふと謂へば然うも謂へるし、またひゐきにする動機なり要點が違ふと謂へば然うも謂へる。ましてひゐきにする人の種も違へば、ひゐきの爲方も違ふと謂へば然うも謂へる。もう少し具體的に謂へば、松蔦ひゐきには若い人が多い。若い人といふうちにも、文學好とか何ンとか謂はれる知識階級に多い。從つて引幕を贈るとか、見連を作るとかいふ質のひゐきよりも、一人で松蔦を見て感激し、そして繪葉書でも机上に飾つて悅んでゐるといふ人が多いのである。此ういふひゐきには遊戯的氣分が乏しい。謂はゞ眞率である。例へば松蔦に舞臺の戀をしたからと謂つても、心もちは眞率である。所詮松蔦のひゐきには眞率な人、が多いとも謂へるのである。而して松蔦といふ役者の强味は、此の眞率なひゐきを持つてゐるといふ點にあるとも謂へる。

然らば松蔦は、其程好い女形であり、其程優れた腕前を持つてゐる役者だらうか。これは好不好を別にして、松蔦の見方と解釋によつて、目安が少々ならずぐらつくとしなければなるまい。

一口に謂へば松蔦は感じの好い役者である。誰が見ても感じが好い——これは設何ういふ松蔦ぎらひにしても否むことは出來ないだらう。而して松蔦に鍾まるひゐきの源泉は其處にある。

感じの好い重なる要素は、松蔦が美しいからであらう。松蔦は美しい、顏も姿も美しい。而して其の美しさは、艶麗とか、濃艶とかいふ方ではない。言葉で形容すれば淸楚とでもい

ふべきであらう。成程艶も色氣もないではないが、それよりも清らかさが餘程勝つてゐる。清らかな美しさ、露に濡れた撫子を見るやうな美しさ――松蔦の美しさは然ういふ美しさである。婦にすれば、佳人といふ方に屬する。而して松蔦は正しく藝壇の佳人である。

佳人といふ質の女は、概して弱々しいものである。病的のところがあつてならぬものである。肉體に於て、健全でないのだから、すべての意味の刺戟的分子に乏しい。卽ち他を壓するやうな氣品もなければ、また他を煽りつけるやうな强烈なとこもない。代りに可憐らしさとか、またはゆかしさとか、なつかしみがある。而して松蔦は、可憐らしさに於て、ゆかしさに於て、人をそゝる不思議な力を持つてゐる。

此の力は松蔦の生命である。松蔦といふ役者の「全」を支へてゐる。極端に謂へば、もし松蔦に那の清らかな美しさが無かつたならば、そして可憐らしさとゆかしさとが無かつたならば、役者としての松蔦に何程の價値があり、長所があるだらう。

單に顏や姿ばかりで無い。聲にしても然うである。松蔦の聲には一種感じの好い響があつて妙に人をそゝり、またシミ〴〵と胸に沁み込ませるやうな調子を有つてゐる。普通に謂つて了へば優しい聲といふのであらう。細く美しく透通つた聲といふのであらう。而して之も病的の響があり、何ンだか賴りないところがある。自分は嘗て此の聲を、秋の終りにすだく鈴蟲のやうな聲だと謂つたことがある。一種の哀音だと謂へば然うも謂へる。いた〳〵しい聲だと謂へば然うも謂へる。何れにしても明るい聲ではない。朗々とした聲ではない。と謂つて勿論陰氣な聲といふのではないが、何方かと謂へば濕ッぽい聲である。切々としてかすかに人に迫る氣味がある。しかもその果敢ないやうな賴りないやうな、――要するに病的なところに、不思議に人をそゝる力を有つてゐる。

而して此の病的な優しい聲と姿とは、殆んど神祕的に調和し融合して、其處に松蔦といふ役者に一段と生彩が加はつてゐる。思ふに松蔦といふ人は、松蔦といふ役者ぶりの女形になる爲に生れた人かも知れない。顏と姿と聲から謂へば確に然うである。

左に右松蔦は清らかに美しい役者である。優しく弱々しい女形である。

その藝風とか、または女形としての風格に就て謂へば、何處までも今の言葉でいふ「若い人」といふ方であらう。新しい人とは謂はれぬまでも「新しみ」のある人と謂はなければなるまい。それだけ古い味を貴ぶ「歌舞伎」の女形に裏切つてゐるところもあれば、質にも腕にも不足があるかも知れない。

倘松蔦を純歌舞伎の女形とすれば、芝居道で所謂若女形といふ質の女であらう。若女形も娘形專賣といふ役者であらう。年の故か、藝のせゐか、それとも役者の質か、片はづし物な

どは謂はずもあれ、女房役も、花車形も、先づ以て柄にないと謂はなければならぬ。姫にしても然うである。

自分は嘗て松蔦の八重垣姫を見て甚だ失望したことがあつた。清くて美しい松蔦は、何故此の役に失敗したのであらう。理由はいろ〳〵あらうが、先づ第一に此の人の有つてゐる「新しみ」が八重垣姫といふ役に裏切つたのだと謂はなければならぬ。次に柄が小さいのと、顔の細つこく小さいのも、聲が餘り女らしく細いのも、八重垣姫といふ役柄に適はぬやうであつた。而して一體に歌舞伎味に乏しかつた。

これはしかし役者ぶりの故ばかりでない。藝の素養にも依るだらう。何ンにしても純歌舞伎の女形としては松蔦には種々な不足があるやうだ。それだけまた松蔦には松蔦の長所があり、新しい生命があるに違ないが、それにしても全ての點に歌舞伎味に乏しいといふことは打消すことは出來ないだらう。

而して單に八重垣姫ばかりでない。時姫にしても、雪姫にしても、種々の理由からして遂に此の人の領分外の物としなければならないだらう。「太十」の初菊や「八陣」の雛衣、または「菊畑」の皆鶴、或は「千本」の靜などにしても、決して松蔦の役者ぶりを上げる役々ではあるまい。お三輪などにしても然うである。そんならお富役者、三千歳役者かといふと然うでもない。松蔦には然ういふいきな分子もなければ、また傾城もの、出來るやうな濃艶なこともない。そして是等も純歌舞伎の女形として言分ある一要件としなければなるまい。

然らば「鮨屋」のお里は何うであつたか、「野崎」のお染は何うであつたかといふに、謂ふまでもなく此ういふ役々は松蔦の領分内のものである。見方に依つては、見た目は美しいばかりでも、お染役者、お里役者と謂はなければならないのかも知れない。

雖然お染には智的分子があり過ぎて、ういゝしさに不足があり、美しさに色氣よりも、清らかさが勝つて、姿にも氣分にも、何うも「野崎」といふ芝居の情緒と融け合つて居ないところがあつた。少なくとも色彩に於て、明治前後に其處らに見かけた町娘といふ感じがあつた。さてお里となると、此の役の生命ともいふべき蓮葉な色氣と、古めかしい「あまみ」とが無かつたので、「寢て花やろ」といふやうなお里の魂の抜けた甚だスカ〳〵したものであつた。同時におとなしやかであり過ぎ神經質であり過ぎ内氣であり過ぎたとも謂へれば、ふツくらした艶かしさが無かつたとも、甘い夢を見てゐるやうな心もちが無かつたとも謂へる。此の種のものとして、此の人の當り藝と謂はれてゐる八百屋お七にしても矢張然うだといふことが出來る。よしや顔に於て、姿に於て、ういゝしさに於て、美しさに於て、人を醉はせ魅する力はあつたとしても、遂に古い年代によつて釀されたお七の歌舞伎味とでもい

ふべきものを有つてゐなかッた。而して結論は、松蔦は遂に歌舞伎味に乏しい役者であるといふことになるのである。

よし其としても、それは松蔦の生命にも價値にも何等の影響がないと謂へる。「松蔦といふ役者」に限つて然うだと斷言することが出來る。何も所故に辯護するのでもなければ、所謂ひゐき目でいふのでもない。

歌舞伎味から突放されても、歌舞伎系から生れた新しい役者、または新しみのある役者として、松蔦には松蔦自らなる風格があり、そして其の風格が強く人を引付ける力を有つてゐる。而して的確に左團次一派の立女形の地位を占めてゐると同時に、左團次一派には無くてはならぬ役者になつてゐる。

これを松蔦から謂へば、左團次といふ亭主役者のあることは、大なる幸に違ないが、また左團次から謂つても、松蔦といふ女房役者の得られたことは大なる強味であるに違ない。何ンにしても左團次一派に居なくてはならぬ役者である。其程松蔦の藝なり質なり、役者の風格なり、または其の舞臺ぶりなりが、左團次の其とピッタリ適つてゐる。殊に新作の場合または自由劇場の場合に然うである。

極端に謂へば、松蔦といふ役者は、左團次に依つて生れ、左團次に依つて生き、左團次に依つて光彩を放つてゐる役者と謂つても可いだらう。少なくとも左團次といふ役者が居なかつたら、松蔦といふ役者の價値は大分下落するだらう。更にもう少し突つ込むで謂へば、もし松蔦が左團次一派を離れて、市村座なり、或は歌舞伎座式の座組に加はつたとしたら、松蔦の影は餘程薄くなるだらう。

よし其としても松蔦は、清らかに美しく、眞の女性のやうに優しく可憐らしい役者である。そして見てゐて、何ンとなく感じが好いと同時に、何ンとなくなつかしみのある役者である。そしてまた其點に松蔦といふ役者の強い生命がある。

要するに松蔦は「腕」の役者でもなければ、鍛えられた役者でもない。木地の役者、人柄の役者、または風格の役者とでも謂はうか。一口に謂へば、その價値も生命も、その役者ぶりから出てゐる。松蔦は未だ若い。何うかして其の美しさと清らかさを失はせたくないものである。がしかし、近頃大分松蔦が冷くなつて來たといふ噂を耳にする。

冷くなつて來たとは何ういふ意味であらう。色がうつろひかゝつて來たといふのか、美しさが衰へて來たといふのか。あゝ！　松蔦には年を老らせたくないものである。

先代坂東壽三郎の門。初め坂東豐作。

## 七十八、市川市藏

梅玉、巖笑につゞいて、大阪役者中、名題の金持であるさうだ。また盆栽家としても、ナカ〳〵聞えたものである。然るに此の人に金があるので、自分で遊んでゐたのか、それとも芝居の方から頼まれなかつたのか、左に右四五年前から、一昨年の春狂言まで殆んど二三年の間、全く舞臺を休むでゐた。そして播市の名も頓と忘れられてゐた。

それが一昨年の春、鴈治郎の「封印切り」で八右衞門といふ大役をつけられて、播市の厚ぼつたい顏が復舞臺に見られるやうになつた。そこで此の人も巖笑同樣金持であると同時に、巖笑同樣、好い役者か、大根か、些ッと見當のつけかねる役者である。

一體大阪の頭立つた人には、仁左衞門の引立て役者になつた人が多いが、播市も矢張其の一人である。播市は確か明治四十二年に、仁左衞門の手引で一等俳優の列に加はつたと思ふ。尤も白切符と謂つても、それは重に稅金の關係であるから、强ちそれで播市の役者がえらくなつたとは謂へないが、先づ以て役者も相應でなければならない筈である。而して播市は怪しい白切符連の多いうちでも、殊に末席に坐らなければならぬ人ではないだらうか。



何故とならば、第一播市は、播市の畑を持つてゐない。敵役か立役か、端敵か、半道か、老役か、それが甚だあいまいである。同時に此の人には確かな持役がない。役者としての持役のないのは、宗旨のないお坊さんのやうで、甚だ有難味が薄い。それも安ッぽい重寶役者といふならば大目にも見られやうが、播市は左に右一等役者である。立者の列に加はるべき人である。或は無理に加はつた人である。藝の上手拙は別として、單に此の一點だけでも、播市の親方、遂に白切符の末席を甘んじなければならぬ。

それは然うとして、惡達者といふか、重寶役者といふか、播市は安手に何でもやつてのける役者である。融通が利くと謂へば、可成融通の利く方と謂はなければなるまい。しかし自分は嘗て此の人の「岩見重太郎」なるものを見たことがあるが、これは當時延二郎の其に較べても、尙且つお伽噺の桃太郎位にしか見えなかつた。而して復活後の八右衞門にしても、所謂御苦勞樣に屬する出來榮で、もし故人延三郎、或は卯三郎が大阪に居たとしたならば、到底此の人にお鉢は廻らなかつたらう。

要するに播市といふ役者は煮え切らない役者である。藝にしても澁皮が剝けないとでも謂はうか、何うも一皮、突破つて貰はなければ、眞んとに此の人の藝の質が解らないやうに思はれる。然う謂へば何んだか此の人の藝が未成品であり、將來に幾分の望があるやうにもな

るが、それにしても播市は餘り年を老り過ぎて、舞臺ぶりにも役者ぶりにも元氣が無い。そして播市自身、もう一家を成した積りか、獨で納つてゐる風も見える。それで播市の藝はもう、要領を得ないは要領を得ないなりに、水ッぽいは水ッぽいなりに、もう固りきつた藝だとも謂へる。固り切つたといふよりも、藥も治療も利目のないほど、變な型に入りきつて了つてゐるといふ方が至當かも知れぬ。

して此の人の特色はと謂へば、大阪役者共通の臭味とアクとが――それも二流以下の悪達者の――が際立つてゐるだけで、低級な面白味もなければ、巧者もない。極めて平凡と謂へば平凡、無能と謂へば無能、何と謂つて取得のない人である。强て謂へば、何ンでもこなしつけて行くといふ點でもあらうか。それにしてもサ、ラで鳥黐をこねかへすやうな調子だけでも全てを打壞さずには居ない人である。何時かの鴈治郎の「椀久」の母およしの如きは、何うしても大歌舞伎の代物ではなかつた。

尤も小さな芝居で見ると、根が達者質の藝であるから、些々相應光つて見せぬでもない。「中將姫」の岩根御前とか、奴市助などは、それは勿論檜舞臺の物ではないにしても、播市としては先づ〳〵見られる方と謂つて可いだらう。それにボッテリした顏は、可成美しさもあり、押出しも好い方であるから、見てくれは些つと立派で、役者ぶりから謂へば、安くても何んでも、確かに座頭役者の資格はあるやうだ。座頭といふのが大仰であつたら、一かどの立者と謂つても可い。左にまれ、顏と柄を謂へば、播市もナカ〳〵捨てたものではない。

無器用か、氣が無いのか、左に右播市の藝風は、變に達者ぶつた子供役者といふやうな感じがする。藝も役者ぶりも然うである。老いたりと雖、播市君、緊褌一番、新規蒔直しと出掛けては何うだらう。そして藝道のいろはから習ひ始めて、せめて固有の臭味でも除去つたら、嚴笑あたりまでは漕付けることは出來るだらう。

## 七十九、中村東藏

中村東藏

中村歌右衞門の門、初名中村おもちや、のち中村駒助大正九年大谷友右衞門となる。

おもちやかから駒助に、駒助から東藏に、トン〳〵拍子に出世した人である。おもちや時代は謂はずもあれ、駒助の初の頃は、愛くるしくして且つ愛嬌に富むでゐたのが今に目に殘つてゐる。此の人がよく老役に廻る役者にならうとは思ひもかけぬことであつた。

此の頃では愛嬌はなくなつたが、男前は好い方である。それで市村座組のうちでは、菊吉

に續いて、勘彌と駢ンで、一方の旗頭をうけたまはると同時に、人氣もナカ〳〵あるやうである。而して此の人は些ッと市村座の澤瀉屋とでも謂ひたいやうな氣がする。必らずしも藝風なり、役者ぶりが似てゐるといふのでない。其の地位とか、役どころが似てゐるといふのである。そしてまた強ひて謂へば、藝風とても幾分似てゐる點がないとも謂へぬ。

段四郎が器用で、達者質の役者であるやうに、東藏もまた器用で達者質の役者である。藝の素養、または根柢を謂へば勿論比較にもならないが、東藏の役者の質、または舞臺ぶりが、今の大家連のうちで誰に似てゐるかと謂へば、それは確に段四郎にといふことが出來るだらう。そして恠しいことには、その出身と謂つたやうなものまでが似てゐる。そしてまた段四郎の舞臺ぶりに何點か安いところがあつて、常識的だとか平面的だとか、いふところがあるやうに、東藏の舞臺ぶりも然うだといふことが出來る。

若いにしては東藏は上手な役者である。しかし其の割合に面白味に乏しい役者である。段四郎は勿論上手役者である。しかし上手な割に光らないところのある役者である。然ういふ點も似てゐると謂へば然うも謂へる。

男前が好いと謂つても、東藏には所謂意氣といふ分子もなければ、麗しいとか、お上品とかいふところもない。と謂つて年が年だけに苦味もなければ澁味もなし、只些ッと華美なところがあるだけで、ふッくらしたところも、うまみもない。結局藝風が常識的であるやうに、役者ぶりもまた平凡である。然ういふことも幾分段四郎に似たところがあると謂へば然うも謂へる。

段四郎の舞臺ぶりは親切を極めてゐる。東藏も若い人としては、親切な方と謂つて可いだらう。段四郎は走り廻り、または走り廻り系の役が巧い。東藏も矢張然ういふものがお得意のやうである。

段四郎は兩刀をたばさむ役よりも、縞の羽織を着た役がよく似合ふ。而して東藏も矢張其方である。

強ち臆病とか神妙とかいふのでなしに、東藏は何うかすると、見物に相談をしながら舞臺を運んで行く風が見える。今は勿論然ういふやうなことはないが、以前の段四郎にも些々其があつたと覺えてゐる。

段四郎の舞臺ぶりは堅實であると同時に、役者ぶりにも堅い感じがする。東藏の舞臺ぶりは堅實といふ程ではないが、手堅いやうなところがあると同時に、役者ぶりにも確に堅い感じがある。

段四郎は老役を除く他は、奈何なる女形も殆ど絶對に行けない人である。行けさうでゐて

行けない人である。東藏も矢張然うである。

此う並べて來ると、東藏の藝風なり役者の質が、可成段四郎に似てゐるといふことが證據立てられると思ふ。さて假に東藏が段四郎に似てゐるとして、その輪廓に於て、內容に於て餘程段四郎よりも小さく出來た役者のやうに思はれる。これはしかし年の故とか修業のせゐばかりではない。「質」が然う出來てゐるのでは無いだらうか。

段四郎は舞臺の人として才人である。廿臺から座頭の地位を踏まへたほどの才人である。東藏は器用者には違ひないが、才人といふほどの役者ではないやうだ。そして藝の鍛え方にもヤワな點があるのでは無いだらうか。よしや紋三郎ほど酷目なことにならないにしても、若し此の人が市村座を離れたら、何程の活動が出來るだらう。

其の「質」から考へて、東藏には何うも座頭役者の感が無いやうに思はれる。何處までも上手なワキ役者として押通して行く人のやうに思はれる。所詮東藏は、東藏を今のまゝに大きく膨ませて行くしかない役者のやうに思はれる。

よし其としても東藏は手觸りの好い役者である。舞臺ぶりか、人柄か、ナカ〳〵人好のする役者である。所詮何點かに喰ひつきの好いとこがあるからだらう。そして東藏の人氣の源泉は其點にある。



東藏は確に喰ひつきの好い役者である。そして手觸の好い役者である。些ッと嫌味な點もあり、變な癖もないではないが、それが「手觸りが好い」といふことに依つて隱され、格別目にも立たない。だが、何ンとなしスッキリしない。齒切れの好くない點のある役者である。調子が低いからだと謂へば然うも謂へる。器に優れたとこが無いからだと謂へば然うも謂へる。

東藏に取つて最も心配になることは、東藏は東藏でなければならぬといふやうな物を持つてゐないことである。言葉を換へて謂へば、際立つた特長と特殊な味とを持つてゐないことである。

成程東藏自身から謂へば、得意藝もあり、當り藝もあらうが、それがハッキリと見物の眼に映つてゐない。而して是は强ち東藏に當り藝となり得意藝となるやうな役がつかぬ故ばかりではないやうだ。

しかし東藏は決して拙な役者でもなければ、惡い役者でもない。何方かと謂へば、市村座組若手のうちでは役者らしい役者の一人であり、また普通の見方よりすれば、好い役者に違ない。役に依つては男前の好いのが利いて、ナカ〳〵引立つこともあれば、光ることもある。けれども遂に何點に見込をつけて可いか解らぬ役者である。そして惡くすると、上手と

名のつく一種の達者役者になつて了ひさうな傾向を持つた役者である。

## 八十、片岡松之助

十一世片岡仁左衛門の門。死去。

寫眞は大石内藏之助に扮した片岡松之助

由來大阪は藝事の盛な土地だと謂はれる。殊に芝居は、昔から江戸と對抗して、名人上手を出してゐる。それだけ芝居熱の盛な土地で、今でもナカ〳〵見巧者が多いとか聞いてゐる。それにも拘らず、大阪には頓と松之助を云々するひとがないとかいふことだ。何故だらう。

或人は、それを松之助が餘り大阪に居据つてゐないからだらうと謂つてゐた。また或人は、小芝居から出た故だらうとも謂つてゐた。一體大阪の芝居好は、所謂大歌舞伎にゐた役者であらうと、何ンであらうと、一度大歌舞伎を離れたら、よしどんな役者であらうと、これを枝芝居の役者として、葬つて了ふといふ風があるさうだ。松之助が大阪の芝居好から閑却されてゐるのは、然ういふとこから來てゐるらしい。

仁左衛門が尙だ大阪にゐた頃には、松之助は、濱の芝居で我藏長太夫を凌いで、隨分重寶がられてゐたやうである。それも其の筈であらうか、松之助はナカ〳〵器用な役者である。



東京で見せた義士劇の如きは、所謂ケレン物として謂ふに足らないが、それでも內藏之助では些々味なところを見せてゐた。また仁左衛門の伊左衛門に、喜左衛門、「伊勢音頭」に萬野といふ役に廻つても、相應な腕前を見せてゐた。また其年、仁左衛門が大阪に歸つた時、「最後の重忠」で家臣某や、「梵字の德次郎」で按摩といふやうなところで、夫々腕を見せてゐた。

一體松之助は、地方と小芝居とで腕を鍛えてゐる役者だから、その柄にさへあるものでさへあつたら、相應にこなすだけの素養はあるやうだ。而して此の人を、所謂田舍廻りの達者役者として了ふのは氣の毒である。勿論藝は達者には違ひないが、割合に臭みのないのは買つてやらなければならぬ。

大阪の一部には、松之助の舞臺ぶりが、仁左衛門に似てゐるといふ人がある。成程然う謂へば然うかも知れない。義士劇の內藏之助などで見ると、あながち仁左衛門を張つてゐるといふのではないが、白廻しやなどに幾らか似たとこがあるやうだ。が物の可い惡いは別として、松之助の藝風は仁左衛門よりも餘程手堅いところがある。——所詮仁左衛門のやうに小細工をするとこと、妙な癖と、當氣とが少いやうである。

要するに松之助の藝は、尙だ枯れてゐるといふことは出來ないかも知れないが、巧者畑に

は入つてゐるやうである。そして其柄を謂へば、安價ながらも、座頭役者の資格はあると謂つても差支はあるまい。しかし其の本役は、柄から謂つても顔から謂つても、また藝風から謂つても、一種の敵役、または「吉田屋」の喜左衛門式のワキ役者であらう。何ンにしても大阪に於ける二流どころの老巧役者として、松之助は其の藝風に些ッと變ッた味のある役者である。

## 八十一、片岡市藏

四世片岡市藏の男、初名片岡十藏。死去。

つい近頃のことであつたと思ふ。「役者の顔」の記者は、顔から見た市藏の藝風に就て云々してゐた。それはそれ、これは是として、茲に復市藏の藝風を月旦する。

市藏といふ役者は、一時の勢からいふと、もう少し何うかなつてゐなければならぬ筈の人である。十藏時代の人氣から謂つても、藝から謂つても、確に然うだといふことが出來る。また家柄――といふことは出來ないにしても、父の子として、また市藏といふ名に對して、もう少し何うかなつてゐても可い役者である。

それが藝のせゐか、はた人氣か、但しは人柄のせゐか、今のところ地位も立場も甚だ煮えきらぬ人になつてゐる。役者になり損つた形があると謂へば然うも謂へる。小さな劇場へでも行けば知らぬこと、大きなところでは役らしい役のつくことは減多にないと謂つて可いやうである。

これに少しく同情を寄せて謂へば、市藏は今の若手のうちで最も不遇の立場にゐる人だとも謂へるし、また少しく冷酷に謂へば、それは市藏といふ役者に是といふ特色がないからだと謂へる。

役者が平つたく出來てゐるとでもいふのであらう。取得がないと謂つては言葉が穏かでないが、市藏といふ役者には何うも此うといふ特色が無い。役者としては勿論得手不得手はあらうけれども、市藏でなくてはならぬといふやうな形を持つてゐないやうである。別な言葉で謂へば、何が市藏の物であるとか、市藏には何をやらせて見たいとか、然ういふ物を持つてゐないやうである。もう一ッ皮引ン剝いて謂へば、市藏は何ういふ役をやつても、さして拙いやうなこともない代りには、また何ういふ役をやつても、これはと思ふほど好かつたことも巧いと思つたことも無い役者である。

繰返していふ。市藏は決して拙い役者でも悪い役者でもない。けれども何ンだか要領を得ない――煮きらぬ役者である。成程大きな舞臺で見ても、物に依つては、よく演つてゐると

か、神妙にしてゐるとか、些々巧いとこも見せるのであるが、それが何うもフワ〳〵してゐて、つい頭から消えて了つて、問題にならずに了ふ。損な役者だと謂へば損な役者である。

何ういふ意味から謂つても、役者として特長のないのは損な事である。而して市藏は、特長がないので損をしてゐるばかりでなく、役者がハツキリしてゐないとか、しつかりしてゐないといふ事でも損をしてゐる。

役者に限らず、すべて藝道で身を立てやうといふほどの者は、藝以外に（氣）がなくてはいけないやうだ。こゝに（氣）といふのは、ハラといふ意味もあれば、利かぬ氣の（氣）といふ意味もある。ところで、市藏には何うもハラにシツカリしたとこもなければ、利かぬ氣らしいとこもないやうだ。それで役者がハツキリしない。好い心持ちの人らしく見えると謂へば然も謂へるし、ボヤ〳〵したとこがあると謂へば然も謂へる。何ンにしても何點かにゆゝるむ、と謂つても市藏の舞臺ぶりが、薄ボンやりしてゐるとか、のろいとか、または間が抜けてゐるといふのではない。然ういふところは微塵もない。何方かと謂へば、正面に、正直に、控目に、自分の「役どころ」をよく考へてやつてゐる方である。氣がきいてゐるとは謂へぬまでも、そつのないやうに、手堅くといふよりも、用心深く、他の役者からも、見物からも苦情の出ないやうに心掛けてゐるとは思はれる。而して役者ぶりもわるくなければ、演ることも拙いとは謂へぬ。それでゐてどこかにゆゝるむだやうなところがある。何んだかハツキリしないやうなところがある。そして顔付にも白にも、姿にも、また藝にもシツカリしたとこも突張つたとこもない、同時に面白味に乏しい役者だとも謂へる。有體に謂へば市藏は面白味にも乏しければ、人を引付ける力も味も持つてゐない役者である。それで實力以下に購はれてゐる傾もないではない。もし市藏に、もう少しシツカリしたところがあり、突つ張つたところがあり、そしてもう少し面白味と味とがあつたならば、立派に羽左衛門と菊五郎との間に立つ人氣者となり、立者となつてゐたかも知れぬ。チト大まかな言分に過ぎるが、市藏は眞ンの少しばかりのところで役者になり損つてゐる形がある。藝の質から謂つても、役者の質から謂つてもそうである。

役者の質を謂へば、重寶だとも、また器用に出來てゐる方だとも謂へる。難しい註文さへ出さなかつたら、隨分好い役者であり、間に合ふ役者である。

先づ歌舞伎座でしてゐる役々に就て謂へば「先陣問答」に出る珍齋だとか、「伊賀越岡崎」に出る夜廻りの老爺だとか、「沼津」の池添孫八だとか、「勸進帳」の四天王だとか、「濱松屋」に出る頭だとか――此ういふやうな些ッとした役々をしてゐれば、頗る樂なものでもあり、且つ無難であることはいふまでもない。所詮世話も時代も、女形も立役も、或る程度までま

「大和橋」の長七郎は明治四十二年九月の歌舞伎座。

んべんなくいける人である。そして型物や踊にかけても、可成の腕前がある。

雖然改名披露の時の「大和橋」の長七郎となると、あの大舞臺では少々荷が勝ち過ぎたといふばかりでなく、市藏といふ役者の弱點を殆どさらけ出したと謂つて然るべきであつた。卽ち押出しも、調子も、することも全てがふやけてゐて、凛としたとこは勿論、此の役には無くてはならぬノンビリしたとこも、齒切の好いとこも、感じの好いとこも、また長七郎といふ殿樣らしい品位もなかつた。第一顏付のボテボテしてゐるのと、體つきのヅングリしてゐるのが目について、ハラにも形にもシツカリしたとこのないのが氣になつてならなかつた。で落付はらつてゐた其の落付も、心もちの好い人が無理に納りかへつてゐるといふ風で見てゐて何がなし齒痒くてならなかつた。而して市藏は何樣な役にでも些ッと齒痒く思はせるとこのある役者である。而してまた齒痒く思はせるといふのは、どこかに至らぬところがあり、ゆるむだとこがあるからではないだらうか。

長七郎に品位が無かつたと謂つても、市藏は滿更お品の無い役者といふのでは無い。役と舞臺に依つては、相應に品もないではないが、それにしても品があるといふほど品のある役者では無い。また貫目とか、落付とかいふものにしても然うである。市藏は決して落付があるとか貫目があるとかいふ役者ではないが、しかしまた滿更無いとも謂へぬ役者である。役に依つて場合に依つて、甚く押出しの立派に見えることもある。

例へば中洲あたりで「陣屋」の熊谷、または「扇屋」の熊谷のやうな物をやつたとする。また赤坂あたりで、大森彦七とか「辨慶上使」の辨慶とか、或は「千本櫻」の覺範——まア此ういふやうなものをやつたとする。すると市藏は、顏はいふまでもない、調子も押出しも、貫目も落付も、見違へるやうに立派な役者になる。所詮市藏は、役によつて、舞臺に依つて、立派に光り得る資格のある役者である。

元來幅に不足のない役者である。背と顏の大きさとに少し釣合の取れぬとこはあつても、輪廓に於て申分のない役者である。ハラさへシツカリ据つて來たら「陣屋」の熊谷などはいふまでもない、「八陣」の清正も、地震加藤も、或は天狗高時、河內山、長兵衞——さういふ物も立派にいけるだらうし、やつしも、伊左衞門や忠兵衞あたりなら樂なものであらうと思はれる。そして役者が厚ぼつたく出來てゐるだけに、加役として片はづし物の或物、些ッと謂つて見ると板額とか政岡とかいふ大物も惡くはないだらう。同時に調子にもう少し突ッ張つたとこさへ出來て來たら、走り廻りといふやうな物は、一番確かな此の人の領分ではないかと思はれる。何れにしても此うといふ特長がないだけ其れだけ役の領分は廣い人と謂つて可い人であらう。

それにしても市藏の愛嬌のある顔付なり人柄は、すべて敵役には不向と謂はなければなるまい。よし市藏の舞臺ぶりに鰭がつき引緊つて來てからが、貫目で見せる松永彈正あたりは左にまれ、仁木にせよ、光秀にせよ、瀧口上野にせよ、鐵山にせよ、乃至加村宇多右衞門でも、忠太でも、「惡」の名のつく役々は遂に柄にないと斷言される。して老役となると、今は勿論問題にならないとして、將來は權四郎役者としても、九郎助役者としても、または妹尾役者としても、彌陀六役者としても見込があるやうだ。

繰返していふ。市藏は今のところ、確に役者になり損つてゐる形がある。けれどもどう惡く考へても、今のまゝで終つてしまふ役者ではないやうだ。其の舞臺ぶりにもう少し熱が加はり、ゆるむだとこが緊つて來たら、必らず一方の立者として雄飛する時代も來るだらう。今の分では單、舞臺ぶりに大した癖がないのと、役者ぶりに毒と嫌味のないのを取得として、將來の大成を期待にして置く。

世の好劇家よ。その舞臺ぶりにゆるむだとこがあり、役者ぶりにシツカリしないとこがあると謂つて、市藏を閑却して了つてはいけない。よし面白味とハリは無くとも、穩で、そして厚味と丸味のある市藏の藝風には確かに見どころがある。あの和々したノンキらしい顔に苦味か辛味が見えるやうになり、そしてふやけたとこが固つて來たら、市藏は一躍して大きな役者になるかも知れない。

## 八十二、市川米藏

市川小團次の男、のち市川米升と改名。死去。

阿父が阿父だけに、質の好い惡いは別問題として、踊はナカ〳〵仕込むであるらしい。何ンにしても名人小團次の血筋の孫に當る人だ。家柄から謂へば勿論松蔦壽美藏輩の下風に立つ役者ではない。しかし父小團次が既に逆境に沈淪してゐる人である。幾ら名人小團次の孫でも、米藏は祖父の餘祿も受けてゐなければ、親の光は七光といふ有難味も受けてゐないやうだ。

それは何うでもいゝとして、米藏は、父に似て矢張小柄な方の役者である。そして顔の輪廓も父に似て小さい方で、そして寸のつまつた顔立である。けれども年が年だけに、白くても塗り立てゐると先づ普通綺麗にもなるが、さればと謂つてお世辭にも頭拔けた方とは謂へぬやうだ。先の米藏は高島屋一門の花形として、一時の人氣はすばらしいものであつた。これも柄は小さい方ではあつたが、顔は所謂馬づらといふ奴で、鼻も高かつた。それで舞臺が引き立つた。なんにしても團十郎の「須磨」の熊谷に左に右敦盛をしたほどの役者だつたから

奇麗な役者には違ひなかつた。して本役は娘役で、若衆役も若女形もいけた人だつたが、今の米藏も役どころは似てゐるやうである。所詮米藏は、娘役者で、そして若衆役者である。顔にも藝にも不足があつても何ンでも、役者の質がそう出來てゐるらしい。

鯱丸時代には一と頃、子役としてなか〳〵賣れてゐた。けれども米藏になつてから、役者ぶりもパッとしなければ、人氣もパッとしないやうである。そんなら棒鱈組の方かといふに然うではない。何方かと謂へば、舞臺ぶりは少しチョコ〳〵するかと思はれる位、器用にはやつてのける。明治座でやつた中將姫にしても、お品がないにしろ何ンにしろ、相應にこなしてゐたと謂つていゝやうだ。確かに身分だけに働いてゐたに違ひない——しかし結局それだけのことである。

要するに米藏は、見ただけの役者といふしかないやうである。强ち年が若いからといふばかりでなしに、顔にも柄にも、はた藝にも、此うといふ趣も味も持たない役者である。言葉を飾つて謂へば尋常に出來た花形質の役者で、別な言葉で謂へば平凡な娘役者、又は若衆役者である。

初め市川齋入の門人で市川福之亟、東上して團十郎の門に入り市川女寅となり、明治四十三門之助をつぐ。大正三年八月死去。

## 八十三、市川門之助

自分が此の藝風記を書出してから約一年半になる。僅に一年半——その間に如何に多くの役者が歿くなつたゞらう。先づ女役者の名人粂八の歿くなつたのを筆頭に、大阪の雁童が歿くなる。老優蟹十郎が歿くなる。最近になつて島十郎が歿くなる、虎藏が歿くなる——何ンだか無常を感ぜずには居られなかつた。正直なところさうであつた。

然るに八月二十一日の朝——卽ち門之助の歿くなつた翌朝、突として此の人の訃音に接して、自分の弱い魂は如何に顫いたことであらう。驚きと怖と悲しみとをまじへて、自分は果敢ない、そして淋しい考事をしながら、半日といふものをウカ〳〵經てゝ了つた。自分は最近に於て此の日ほど傷しい感じに惱まされ、そして暗い心もちで暮したことが無い。それは勿論門之助といふあたら女形の名器を失つた悲しみもあつたに違ひないが、幾度か門之助其人に接してゐたゞけ殊に悲痛の度が深くもあれば痛切でもあつた。

自分が個人として門之助を知つたのは眞ンの昨今である。只その藝談を聞かう爲に十數度

樂屋に訪れ、また一度は家に訪れてシミジミした話に思はず夜を更したこともあつた。

しかも自分にとつては、特に忘れ難い思ひ出がある。それは自分が抑々樂屋なるものの空氣にふれたのは、門之助の部屋が初めてであつた。同時に俳優に接したのも門之助を以て最初とする——それだけ自分に取つては、門之助といふ人は何ンとなし忘れ難い人でもあれば、またなつかしみのある人でもある。それだけまた印象も深ければ因緣といふやうなものも深い人のやうに思はれる。

自分の見た素の門之助は、矢張舞臺で見るやうな、すべて控へ目で、つゝましやかで、如何にも昔の太夫さんらしい太夫さんであつたとても謂はうか、自分は初めて逢つた時、成程眞の女形は此うなければならないものだと思はせられた。そして接するに從つて、益々深く然う思はせられた。その應接ぶりにしても、話振にしても、はた擧止や、動作にしても。これを温良玉の如き人と謂へば、何だか言葉が古臭く且つ平凡になつて了ふが、全く然ういふ人であつた。それは此方の氣持のせゐもあつたかも知れぬが、何時逢つても眞の女性に接してゐるやうな感じのする人であつた。それだけ當りがやはらかで、且つおとなしやかな人であつた。

樂屋には話を聞かうとする都合から隨分長く邪魔をしてゐたこともあつた。時に依つては隨分迷惑であらうと思はれることもあつたが、一度も嫌な顏らしい顏を見せなかつた。

何時も柔和な和々した顏で、何時も心もちの變らない調子であつた。

と謂つて强ひてお世辭が好いとか、如才が無いとかいふのでは無い。心からさういふ人であつたらしい。

然ういふ人であつただけに話などは決して上手な方とは謂へなかつた。一體が早口の上に、話の筋なぞは何うかすると混線するやうなこともあつた。然ういふ場合には男衆の留さんがそばについてゐて混線を整理するやうなこともあつた。「千早姫」の話を聞いた時なぞは、留さんに依つて餘程話が補はれたものだつた。また門之助自身も、些ッと思ひ出されないことがあると、直ぐに「留何うだつたッけな」と謂ふやうな調子で留さんに訊ねてゐた。その訊ね方に、傍に聞いてゐて心もちの好い位親しみと優しさがこもつてゐた。

聲は細くかすれた調子で、何うかすると聞取れぬやうなこともあつた。話のうちには、きつと「團十郎」といふ言葉が出ぬことはなかつた。そしてそれは何時でも團十郎の大技藝と德と恩誼とを稱へる言葉であつた。團十郎以外では、故秀調と故市藏のことがよく口に上つた。秀調にはその藝に服し、市藏にはその人格に服すると同時に、よく氣があつたらしい。

自分は一度何かのキッカケから、何ういふ役が一番好きかと訊いたことがあつた。すると

「寺子屋」の戸浪は、大正三年五月の歌舞伎座。

然ういふと怪しいやうですが、意氣な役が一番好きでそんな役がつとめたくて爲樣がありません。しかし何分此の柄ですから――と靜かな笑顔を見せながら、眞面目な答へであつた。自分は成程と思つた。そして其の心持に門之助の眞の藝術家らしい氣質があるのだと思つた。

しかし眞ンとに自信のある物を謂へば、矢張若女形どころと、或種の片はづし物と女房役であつたらしい。

今年の五月歌舞伎座で「寺子屋」の戸浪をつとめてゐたときであつた。俥から落ちて酷く腕を痛め、樂屋では腕を吊つて箸さへも取上げられぬ位であつた。それにも拘はらず、舞臺は何のこともないやうにつとめてゐた。

我慢で押張つてゐたのである。門之助の温順で控へ目な一面には、然ういふ利かぬ氣の烈しいところがあつたらしい。

確かその時の話であつたと思ふ。近いうちに何處かで「岸姫」のおそよと「無間鐘」の梅が枝を演じて見たいと謂つてゐた。そして、おそよには秀調に敎はつた好い型のあることも話してゐた。

門之助の出身とか、閲歷とか、または性行逸話等に就ては、諸家に依つて語られるとこが多い。自分も些か聞知つたことは無いではないが、それは諸家に讓つて、持場の藝風記に移る。

藝風記一派の見方から謂へば、門之助は女形として生れた人だと謂つても可いだらう。藝の修練に就て謂はずとも、先づその人からして女形らしい女形に出來てゐたと謂へる。當代女形を以て任じてゐる役者は多いけれども、しかも眞に女形の格を守り、女形の分に安ンじてゐる役者を擧げたら、二三の若手を除いて、門之助以外には、僅かに高島屋の莚女がゐる位のものである。無論其藝と柄のせゐもあらうけれども、門之助は、其程女形といふ分に對して節操を守つてゐた。

女形として門之助は、近年其の役どころが極めてあいまいであつたのは打消すことの出來ない事實である。卽ち姫樣役者ともつかず女房役者ともつかず、または娘役者とも、花車形とも、片はづし物役者ともつかず、謂はば妙な立場にゐた。これはしかし藝といふよりも役者の柄、または地位とか、時代とかいふものが、主なる因になつてゐたらしい。言葉を換えて謂へば、門之助は役のふられ方に依つてハツキリした、自分を見せる機會が少かつたとも謂へる。

露骨に謂へば、團十郎の居た頃の方が、門之助は餘程働きもしてゐれば、また光つてもゐた。故秀調といふ名家に頭を押へられながらも、有美氏の所謂女寅閣下と謂はれるだけ女寅

に生彩があつた。或ひは割合に好い役がついた故もあるかも知れない。また氣に張りつめたところがあつた故もあるかも知れない。何れにしても閣下は甚だ光つてゐた。それが團十郎の歿後、年々に光が薄らいで行く氣味になつた。そして門之助と襲名しても、さして役者をよくしたとか、舞臺ぶりに新生命を加へたとかいふやうなことも無かつた。而して門之助は年々に燻むで行くやうであつた。

燻むで行くといふ意味を悪く解釋しては可けない。こゝに燻むといふのは、門之助の役者ぶりに臺が立つて來たとか、藝が荒んで來たとか、またはぼけて來たとかいふ意味ではない。然ういふやうな意味は微塵もない。成程色彩と、氣力とに、幾分褪め、または衰へた氣味もないではなかつたが、大體から謂つて門之助といふ役者の價値に何ンのかゝはりが無かつた。

けれども門之助は何ンとなしに燻むでゐた。或ひは人氣がパッとしない故もあつたかも知れない。勿論それもあらうが、それよりも他の重なる理由は、元來光り得べき、また光らなければならぬ質と力の備はつてゐる人でありながら、光り得ないでゐたからではないだらうか。即ち光らなければならないものが、光るべき機會を與へられずにゐたせゐではないだらうか。左に右門之助が近年餘り會心の役をしなかつたことは事實である。

その燻むだとこのある役者であつたとも謂へる。燻むでゐたといふのに語弊があれば、地味な方であつたと謂はう。それだけ味に深いとこがあり、心もちにシンミリしたとこがあり、舞臺ぶりになつかしいところがあつた。それだけにまた前受がせず、パッとしない人であつたに違ひない。女形にしても立役にしても、これは餘り德なことではない。

もし門之助にもう少し華麗なとこがあり、そしてもう少し鮮で、美しかつたら、門之助は決して近年のやうに燻むでは居なかつたらう。言葉をかへて謂へば、仁左衞門、または羽左衞門の相方として隨分華麗な舞臺ぶりを見せ、また女形拂底の劇壇に絶對に重要な地位を占めもしたであらう。

しかし門之助は地味一點張の役者であつた。色彩も乏しければ、うまみも淡い役者であつた。陰氣といふ程ではなかつたが、舞臺ぶりに淋しいところがあつて、上手とか、うまいとか感心はさせても、理屈なしに人を引き付けて了ふといふやうな分子は少しも持つてゐなかつた。同時にその藝の質と、役者ぶりとがピッタリしてゐない點のある役者であつたとも謂へる。

元來門之助は、若い女房役、また娘役を、眞の自分の本領とし、生命としてゐたらしい。これを役々に就て謂へば、若い女房役としては、「彦山」のお園、「酒屋」のお園、「壺坂」のお

里、是等を重なる當り藝とし、娘役としては「岸姫」のおそよなどが、その代表的傑作ともいふべきであらう。而して是等の役々は、その藝から謂つても、役者ぶりから謂つても、門之助の物として所謂動かぬところであらうが、さて姫、または姫質の物になると、時姫あたりは結構として、八重垣姫や雪姫となると、卽ち前に謂つた藝の質と役者ぶりとが、何うもピッタリ一致しないとこが發見されるやうであつた。一言にして盡せば、八重垣姫では、艶麗でないと同時にふつくらしない不足があり、雪姫では柄が小さいと同時に氣品に乏しいといふ不足を有つてゐた。

柄が小さかつたばかりではない。門之助は顏とても決して美しいといふ方でなかつた。殊に顎に癖のあるのが目についた。してまた科白にも歩きぶりにも一種の癖があつた。歩きぶりには妙に急々と裾捌きの荒つぽいのが氣になつてならなかつたし、科白には訛のあつたのは爲方がないとして、聲の出し方にいきむやうな、改まつたやうな、謂つて見ると切口上めいた、妙に野暮ッたい碎けないとこがあつて、それが少なからず耳障りになることがあつた。しかし女らしいやさしい聲ではあつた。而して此の聲と顏と、そして柄とに依つて、姫樣役者としての門之助は、その價値の幾割かを殺がれてゐたやうである。

よしそれとしても、自分の見た物のうちでいふと、薄雪姫の如きは、その姿に於て、その

「封印切」のおえんは明治四十二年九月の歌舞伎座。

「桐一葉」の乳母お虎は明治四十三年十月の歌舞伎座

「道明寺」の龍田は大正二年一月の歌舞伎座。

擧止に於て、はた鍛へられた藝に於て、その味ひに於て、遺憾なく門之助の眞價を發揮して、自分は心から門之助名優論者の一人にならざるを得なかつた。してまた花車形、または或種の女房役として、門之助の腕前は大したものであつたと思ふ。此の種のうちの或物は、上手を通越して確かに名人の域に入つてゐたと謂へるだらう。自分は寧ろ若女形としてよりも、此の方面の役者として、門之助を推賞したい。例へば、「封印切」のおえんといふやうな役は、自ら其人になつてゐるかと思はれて、何時までも鮮やかに目に殘つてゐる。また些とした役ではあるけれども、「桐一葉」に出る乳母だとか、「菅原道明寺」の龍田だとかいふやうな物も、前の方はその腕前に於て、後の方はその味に於て門之助の有難味を思はせる物であつた。近いところでいふと、お名殘りの役であつた「實盛」の小萬の如きも、その俤が何時までもマザマザと目に殘されるものであらう。「寺子屋」の戸浪も、「野崎」の油屋の内儀などにしても然うである。また「佐倉宗吾」の女房だとか、「岡崎の猫」の繁藏の女房だとかいふやうな役にしても然うだと謂へる。その他此の種の役々を擧げれば際限がないが、要するに石持または小紋の着つけの世話味のある女房役或ひは年增役役者として、門之助は此の後またと見る事の出來ない技倆と味のあつた役者である。もう二十五六年も前のことだが、自分は嘗て此の人の「古寺」の黄昏を見たことがある。柄こそ小さかつたが、ふつくらしたと

ここそ無かつたが、その時分の女寅は美しかつた。千早姫で當てたのは確かそれから間もないことであつたと思ふ。而して活歴物の千早姫のやうな役とか、また古風なところで黄昏のやうな役どころも、門之助の重なる身上の一ッであつたに違ひない。やゝ世話がかつた娘役として、「野晒」のお靜の如きは、此の人の右に出る人は無かつたと思はれる。

片はづしに屬する或る種の物もまた、此の人の得意藝として數へなければならない。そのうちにも政岡の如きは門之助の人となりから謂つても優秀の物であつたに違ひない。しかし何分にも柄に不足があつた。況や板額などになると遂に門之助の畑の物でなかつたと謂へる。ましてや岩藤となると、その柄にも、また藝の質にも、微塵も「惡」の分子の無かつただけに全く畑違ひと謂つて然るべきであらう。岩藤系の時代は敵役ばかりでなく、よし其が世話味のある物にしても、すべて惡に屬する物は、その人にもなし、また演りもしなかつた。而して片はづし物のうちで、最も門之助に適した物と謂へば、尾上では無からうか。形をつけて謂へばその役者ぶりが、おとなしやかであつた點に於て、淋しみのあつた點に於て、沈みがちで、そして何ンとなし哀氣のあつた點に於て、更に別な言葉で謂へば、政岡役者として柄に不足があつただけ其れだけ八重垣姫役者として艶に不足があつただけ其れだけ、尾上といふ役はシックリ此の人に欲つてゐたと謂へる。

その役者ぶりに、沈むだところがあり、哀氣なとこがあつただけに、葛の葉なども確かに此の人の領分であつたに違ひない。自分は遂に此の人の葛の葉を見る機會を得なかつたが、其の話のうちに、自分では得意氣の一ッに數へ、また自信もあることを聞いたことがある。そして想像して見ても、それは確かに然うであらうと思はれる。自分の見なかつた物で、此の他に尚だ門之助が得意藝としてゐた物に照手姫とか「蹇仇討」の初花とか「洞ケ嶽」のおやすとか、「俊寛島物語」の千鳥とか、「嫩軍記」の菊の前とかいふやうな物がある。要するに門之助は、其の役者ぶりに、生眞面目なとこがあつたやうに、その藝も、また舞臺ぶりも甚だ生眞面目な人であつた。それだけパッとしないとこはあつたに違ひないが、演ることは手堅く且つ親切であつたと謂へる。同時に色彩の役者ではなく、味の役者であつたとも謂へる。

固より女形である。其の顔にも、また姿にも、はた藝にも、舞臺ぶりにも、色氣がなかつたとは謂へぬ。否、それどころか、何時も眞に女のやうな女になつてゐた人には違ひないが、それがどうも沈みがちで淋しかつた。それだけ母としてのやさしみも、女房としてのやさしみも、また娘としてのやさしみも勝つてゐたのであるが、所謂男の心を誘るやうな色つぽいとこが無かつた。

繰返していふ。門之助は何處までも内輪で生眞面目で、そして何ンとなし暖味とゆかし

みのある女形らしい女形であつた。思ふに門之助のやうな女形は此の後到底見ることは出來ないだらう。

## 八十四、中村芝雀

中村雀右衛門の男、のち雀右衛門をつぐ昭和二年十一月死去。

その役者ぶりに悪く濃厚したとこがあるにしても、その調子に嫌に粘つた耳障になる癖があるにしても、またその舞臺顔が變にデコボコしてゐるやうに見えても、その唇のどぎつく紅いのが目についても、芝雀は大阪で只一人の太夫さんである。奈何にも太夫さんらしい太夫さんである。大阪だけと謂はず、東京でても、女形らしい女形として立派な地歩を占めて行かれる人であらう。

器量は二ノ町であらうが、藝がスッキリしながらうが、芝雀の女形ぶりには、純なとこがある。昔の太夫さんの俤を見るやうな、古風な味らしいものと芬とがある。藝のせゐか、役者ぶりのせゐか、何にしても眞んとの女形らしい趣がある。これがまた芝雀といふ役者の價値であらう。

門之助が歿くなつてから、東京には此の古風な、眞んとの女形らしい味と芬とを有つた役者が居なくなつた。尤も源之助といふ特殊な人もあり、莚女といふ腕の確な人も居るけれども、二人ともに女形らしい女形といふには、いろ〳〵な意味に於て些か變である——として、門之助の歿後東西を通じて、その心もちにその魂に、はたその役者ぶりに、眞に昔の女形らしい風格のあるのは、芝雀一人と謂つて差支ないだらう。

「野崎」のお染は、大正三年十月の歌舞伎座

確か去年の秋頃のことであつたと思ふ。芝雀は門之助の後釜として、歌舞伎座の座附となるといふやうな噂があつた。そして間もなく上京して、歌舞伎座で「野崎」のお染を見せた。固々娘役を得意としてゐる人であるから、それに不思議はないとして、此のお染は、聊か四十島田の趣がないでもなかつた。幾ら鍛えて來た腕でも、年にも敵はぬと見える。

しかし色彩も濃厚なら、どつかに娘らしい色氣のあつた腕前には敬服しなければなるまい。必ずしも美しいの、お染らしいお染であつたのといふのでは無いが、扮装から、ものごし、どこやらお染らしい氣分を漂はしてゐたのは藝の力であらう。所詮芝雀は、今や柄や顔で娘役を見せる人ではなくて、藝の力で娘になつて見せる役者だと謂へる。

そこにまた芝雀の娘役の或物には、どつか不自然なとこもあれば、あくどいとか、わざとらしいとか——一口に謂へば四十島田とでもいふやうな嫌味がある。これはしかし强ち年の故ばかりでなしに、上方といふ濃厚した空氣の中で役者になつた故もあらう。左にまれ芝雀

は、口紅のさし方一つにしても、どぎつく紅い役者である。それがまた一部から、悪く脂つこい役者のやうに謂はれて少々ならず毛嫌される所以であらう。

けれども芝雀の特長も、また味も、面白みも、そこにあると謂はなければならぬ。別な言葉で謂へば、どつか嫌味があり、不自然なとこがあり、而してやゝともすれば鼻につくやうな脂つ濃いとこのあるのを嫌ふのは、やがて芝雀の特色なり、力なりを無視した人とも謂へる。

「櫓」のお七は、大正二年二月の新富座

「岸姫」のおそよは大正三年二月の本郷座。

蓋が立つてゐても、鼻につくやうなとこがあつても、芝雀は結局娘役を得意としてゐる役者である。といふうちにも世話物よりも、時代物または型物とでもいふやうな物が得意のやうである。役々に就いて謂へば——無論東京で演つた物だけであるが、「櫓」のお七「藏」のお染と、そしてお光、「岸姫」のおそよ——こゝらが娘役者としての芝雀の動かぬ役どころらしい。此の他に尙だ「帶屋」のおはんなぞも、此の人の當り藝と謂はれてゐる。而し芝雀は單に娘役をのみ自分の領分としてゐる役者ではない。芝雀には「紙治」の小春とか「梅忠」の梅川といふやうな立派な領分がある。また「壺坂」のお里のやうな役も、その領分内の物であらう。また或種の傾城物に、持役として數へられるだらう。特種な役として、鴈治郎の得意藝の一つだとかいふ「植木屋彌七」のおらんの方なども、芝雀の當り役だとか聞いてゐる。

しかし芝雀は、決して領分の廣い役者とは謂へぬやうである。言葉を換えていふと、自分の物といふのが至つて少いと同時に、女形として割合に融通の利かぬ役者ではないだらうか。

假に芝居道の所謂三姫役者として、芝雀といふ人を考へて見る、「三代記」の時姫は、好い惡いは別として、左に右其の領分内に入れることは出來るとしても、「金閣寺」の雪姫と「廿四孝」の八重垣姫となると、或は全く領分外の物ではないかと思はれる。無論女形で、しかもデン〳〵物の本場で鍛上げた腕前である。演れば一通やつてのけることは謂ふまでもないことであらうが、要するにそれは「やつてのける」といふ程度に止まりはしないだらうか。

何故となれば——

芝雀は、藝にも體にも、また擧止にも——引つくるめていふと、その舞臺ぶりに、設お人柄といふやうなとこは見えても、お上品といふやうなとこが無い。そして其の色氣が、不思議な位一種特色のある其の色氣が、或場合にはケバ〳〵しく濃艶といふ方になり、また何うかした場合には、不自然といふこだはりをまじへた、實感的の物となつて、それが何ういふ場合にも、對手を美しい夢の世界に誘込むといふやうなとこを有つてゐない。必ずしもお品が惡いといふのではないが、品位のないのは事實である。一口に謂へば、調子が低いとも、世

間並すぎるとも謂へやうが、艶があつて、艶麗といふ方でもなければ、豐麗といふ方でもない。それで假に藝の力で藝人らしくはなつても、遂に其人になりおほすことは出來ないだらう。芝雀は、三姫役者として、その天稟に於て、確に二三割方の損をしてゐる役者である。

次に「萩」の政岡とか、または「太十」の操とか「陣屋」の相模とか「鏡山」の尾上とかの——肩はづし物系の役々と、それから、「吃又」のおとくとか——「五斗」の關女とか「鳴門」のお弓とか——世話女房系の役々に就て、芝雀の舞臺ぶりを考へて見る。此のうちには無論、芝雀が幾度が演じたものもあるだらう。また演じないものもあらうし、またやがては何うでも演じなければならないものもあるだらう。

だが、しかし、今の芝雀の、舞臺ぶり、また役者ぶりから考へて、是等の役々は、其の領分内の物とは思はれぬ。謂ふまでもなく一味古風な歌舞伎味のある其の藝風は是等の役々に適せぬといふばかりでなく、其の柄から謂へば、當然其の役どころの人に違ないのであるが修養か、はた天稟か、或役には一種の色氣の潤澤なのが邪魔をし、また或役には餘りに娘にした心もちなりこなしなりが邪魔をし、また或役には、腹の据りとか、落付とか、ふつくりしたとことか、また大まかな鷹揚さとか、シンミリとした淋しみに乏しいといふ缺點があつて、結局シックリ其人になり得ないのではあるまいか。更に手つ取り早く謂へば、芝雀は何處までも親に泣いて貰ふ役どころの役者で、親になつて泣く方は不得手といふやうな質の役者ではあるまいか。要するに愁嘆の利かぬ役者だと謂へば、然うも謂へる。

熱が無いのではない、涙が無いのではない。情も、憂も、愁もないのでは無い。只それに人の親、または人の妻としての「苦勞」といふ奴が泌込んでゐない。

それはしかし、一面から謂へば芝雀といふ役者の長所とも生命とも謂ふべきであらう。此の不足があればこそ、芝雀は何時までも娘役者で通して居られるのである。そして癖があらうが、どぎついとこがあらうが、賑かで、派手で、艶があつて、何處までも紅い色の役者である。その色彩は單純であつても、それが濃やかで、ハツキリしてゐる。

色が紅い、艶つぽい、愁嘆が利かぬ、——と謂つても、芝雀の舞臺ぶりが、決して蓮葉だとか、浮氣ッぽいとかいふのではない。

何れかと謂へば、芝雀の舞臺ぶりは、穩當とか、すなほとかいふ方であらう。殊に娘役になつた場合などには、色氣がこつてりしてゐやうが、色彩がどぎつからうが、その心もちなり人柄が生ぬるいと思はれる位すなほなとこが微見える。すなほと謂つても、おとなしやかだとか、しとやかだとかいふのではない。然ういふには芝雀の動きなりこなしが餘りチョコチョコする。强ちこせつくといふのであるまいが、娘にならう、ならうとしてあせる結果か、

いが有り過ぎる。所詮細工のあとを見せすぎる。――舞臺ぶりに品位がなく、落付のないのは、一つは此のチョコ〳〵が目立つせいかも知れぬ。それにも拘はらず、芝雀の娘ぶりにも年増ぶりにも、如何にも心もちのすなほらしいとこが浮出てゐる。そしてまた芝雀には、此のすなほなとこがある他に、潤澤に色氣がある他に、一種の可愛らしさがある。

此の可愛らしさは、楚々として人を動かすとか、またはあどけないとか、愛嬌があるとかいふ性質の物ではない。芝雀は、顏にも調子にも愛嬌のある人でもなければ、あどけないとこのある人でもない。しかし一種の可愛らしさがある。そして此の可愛らしさが――純良とでもいふべき可愛らしさが、どぎつい色彩のうちに、脂つ濃い色氣のうちにボチリと光つてゐる。して此の可愛らしさの源は、眼にあるのではないかと思はれる。

芝雀の眼は、美しいといふでなし、愛嬌があるといふでなし、また艶ッぽいとか、活々してゐるとかいふのでも無い、何方かと謂へば、特色のない、極めて普通といへば普通、地味といへば地味な眼である。しかも此の普通で地味で、小じんまりした眼のうちに、すなほで純良な氣分がたゞよひ、そして、その氣分から人なつこいやうな一種の可愛らしさが釀されてゐる。して藝を別として、芝雀が肉體的に娘役者として成功してゐる要素を擧げたならば、先づ第一に此の眼を押さなければならぬ。



芝雀の眼は決して好い眼ではない。光にも、彩にも、乏しい眼である。しかも心もちに純なところがあつて、芝雀に取つては、寶玉のやうな價値があるといつて然るべきであらう。

何んと謂つても芝雀は、よし狹いにしろ、確な自分の領分を持つた特色のある役者であり、またどつかに古風な味のある女形らしい女形である。そして何處までも大阪のカラーに染め上げられた一種の艶と、色氣とに活きてゐる役者である。そしてまた心持のすなほで、純で、物優しい役者でありながら、それが、妙に野暮ッたい役者ぶりと、無理に美しく塗りつけたやうなどぎつい色彩と、それから芝雀式の一種の癖とにつゝまれて、やゝともすれば惡い分子のみが際立つて目につくといふやうな、謂はゞアラが目立つ損なとこのある役者である。

加之芝雀は、白が惡い。その訛は無論左や右う謂ふべきでないとして、聲其物にぼやけた響があり、その調子に耳障になるおかしな癖がある。聲から謂へば、芝雀は確に娘役者の資格がない。

要するに芝雀は、すべての點に癖があり、また缺點も少くない役者ではあるが、天禀の色氣と、たゝき込むだ藝から出來た一種の味とに依つて、その特色のある藝風は、女形拂底の今の芝居國に、女形らしい女形として異彩を放つてゐる役者である。

四世中村芝翫の門。初め中村翫之助、のち芝歌之助、また竹三郎。嵐雛助となり、明治六年六世三五郎をつぐ。大正中年死去。

# 八十五、嵐三五郎

變な役者を擔ぎ出したと思ふ人もあるだらう。しかし三五郎の役者の價値は左にまれ、三五郎といふ名に免じて少しばかり謂つて見たいと思ふ。雷子三五郎と謂へば演劇史上に光つてゐる大きな名前である。凡そ下落した名優の名前のうちでも、此の三五郎の名程下落した名も無いだらう。

そこで嵐三と謂はれてゐる三五郎は、今や大阪の小芝居ですら殆ど葬られたやうな形になつてゐる。只或る部分にその名が忘られずにゐるといふのは、三五郎といふ名に歴史があるからではなしに、例の宗十郎の遺弟子の中村珊瑚郎がゐて、此の「中珊」に對して「嵐三」の呼名があるからといふに至つては、名優の名も片なしである。そして此の「嵐三」なる、特別な呼名が無かつたならば、或ひはその名さへ疾に忘れられてゐたかも知れない。それ程三五郎といふ名が安くなつて、また三五郎といふ役者は影の薄い役者である。三五郎は正眞正銘の大阪の鈍優である。しかし何方かと謂へば京都を根據としてゐる役者である。それだけ大阪とは緣が遠くなつてゐる人である。

或る芝居好は、京都の見物は度し難いと謂つたさうであるが、三五郎はその度し難い見物



を度す積りでか、餘程以前から、時々京都の大舞臺に出てゐた。そして何時か京都に根據を据えるやうになつて了つたが、それも此の頃では京都に居るよりも旅に出てゐることが多い。三五郎は何時の間にか旅廻りの役者になつてしまつたのだ。

一口に謂へば、此の人の藝風は、巖笑に、濃厚な臭味をつけ、更に訥子式の場當りを加へて、そしてそれよりも餘程下品で且つ下手なのである。加之役者ぶりも貧弱なら、調子も悪いのに、何時も〳〵旅ばかり廻り歩いてゐるので、藝も荒み役者ぶりも荒れきつて、何に一つ取柄のない人になつて了つた。十八番だとかいふ栗山大膳や淺利與一などにしても、全く田舍向の藝と謂はなければならぬ。それでも此の人は白切符株の一人であるさうだ。尤も名前が名前であり、此の前は些ッと賣つてゐた人なのだから、それに不思議はないとしても、その舞臺ぶりを見ると何んだか滑稽なやうにも思はれる。それ程三五郎といふ人の藝は下品で、そして田舍臭い。だが役者は滿更大根とも謂へないやうだ。先づ出來損ひの達者役者といふのであらう。

何としても、三五郎といふ名は、腐るだけ腐りきつて了つた。慨しいといふのも、今時はやらない、野暮な時代な白かも知れない。

五世尾上菊五郎の男、初名尾上丑之助、明治三十六年六世をつぐ。

# 八十六、尾上菊五郎

現内閣總理大臣の大隈さんは、政治界の老茶目だといふ人がある。今世界を荒し廻つてゐる獨逸のカイゼルは、世界の大茶目だといふ人がある。而して我が尾上菊五郎――またの名六代目は、日本總役者中の茶目だといふ人がある。その舞臺ぶりか、その人となりか、六代目といへば茶目が附物のやうになつてゐる。

我が老茶目の大隈さんは、異常なる精力家で、また野心家だといふことである。世界の大茶目カイゼルもまた、非常な精力家で、且つ野心家であるさうだ。而して二人ともに一種のいたづら好で、且つ驕慢兒である。

我が六代目のいたづら好は頗る有名である。而して豪儀なる精力家で、また驕慢兒であり、野心もあるらしい。ここにいふ野心とは、「乃公はえらいのだから、えらくならう」といふ無邪氣にして、しかも熾烈なる慾望を意味するのである。

我が六代目は確に茶目である。あらゆる點に於て、茶目たる資格が備つてゐる。強ち牽強附會でなしに、彼は其の顏からして茶目式である。



六代目の顏は、よくとのつた、肉附の豐な綺麗な顏である。そして小面憎いやうにキビキビしたうちに、子供のやうな愛くるしいところがある。綺麗で、愛くるしくて、活々としてゐて、何時までも子供ッぽい顏――それだから茶目式だといふのではないが、六代目の此の何時までも子供ッぽい顏の眼にも鼻にも、頰にも唇にも、茶目式氣分が横溢して如何にも駄々ッ子駄々ッ子してゐる。そしてその顏には、正に判然とそのいたづら好が表象されてゐる。假にあのスベ〳〵した丸い顏をポンチ化したとして見給へ。凸坊によつて土藏の壁に描かれた其の仲間の顏の一つが思ひ浮ぶではないか。

由來茶目なる者は何ういふ意味にも素敵な活動家としてある。そしてその活動に伴ふ頓才と、頓才に伴ふ警拔なる行動が茶目の茶目たる所以を發揮するのだといふ。

我が六代目の頓才家であることは誰も知つてゐる。また頓才に伴ふ警拔なる行動のあることも誰も知つてゐる。而してまた舞臺に於ても、舞臺裏に於ても、はた樂屋にゐても、家にゐても、瞬間もじつとしてゐない活動家であることも誰も知つてゐる。要するに少時も心のじつとしてゐない人らしい。心がじつとしてゐないと同時に、口が喋る、手が何かする、足が飛び廻る、――肉體も不斷の活動をしてゐなければならぬ場合があるとすれば、あの活々した眼が何か對象を求めて茶目的活動をしてゐるといふ。

聞くところに依れば、樂屋に於ける彼の前には、絶えず四五人の客が詰めかけてゐるといふ。しかも白粉臭いのは禁制とあつて寄り付かず、殆ど「おい君」と出掛ける連中ばかりださうである。我が六代目は所謂一派書生的の應接振で、極めて無雜作に、活達に、且つ好い加減に、片つ端から此の連中をあしらつて、飽きれば突忽として部屋を飛び出す。そして守田の室あたりへ些と顔を出して、多くの場合立ちながら何か二三の雜談をやる。然うかと思ふと、大部屋で下廻りを對手に相撲をとり、片つ端から投付けてゐることも稀らしくはないといふ。相撲にかけては手捌きが巧者で、彦三郎の雄大を以てしても、ついコロリださうである。また家にゐて誰も對手のない時などには、ワン公を對手に茶目ぶりを發揮してゐることもある。また舞臺裏で出場を待つてゐる時などに、大道具の甲乙にいたづらをして、危くキツカケを取りはづしさうになり、廻りかけた舞臺に慌てて飛乘るやうなことはふんだんにあるといふ。

そして茶目ぶりが往々にしておとなし好の妻君の度膽までも拔く。

嘗て此樣なことがあつたといふ。家の風呂に入つて、常に似ず甚だおとなしく甚だ靜にしてゐた。何をしてゐるのかと、妻君は不思議に思つてゐた。軈てけたたましく呼立てる聲がする。急いで行つてみると、我が六代目君、顔から頭、胸から足、塗りも塗つたり、手足の指先まで、シヤボンの泡を眞ッ白に塗り立てて、宛然に、石膏細工、細君は呆氣にとられる。六代目はドンブリコと風呂の中へ——それでその湯を拔いて風呂を沸かし替えなければならぬことになつた。話はこれだけである。何の他愛もないことであるが、しかも總身へシヤボンの泡を塗り立てた丹念ないたづらと、突然風呂へ飛込むでその丹念ないたづらを刹那に水の泡にした警拔な行爲と、そこに六代目の茶目ぶりが活躍するではないか。而して此くの如き茶目ぶりなどは、我が六代目に取つて家常茶飯のことであらう。

確か本誌の第三年、四、五、六、の三號にわたつてゐたと思ふが、「名家眞相錄」の尾上菊五郎のうちに「いたづらの卷」といふのがあつた。それで見ると、我が、六代目が少年時代のいたづら好はづばぬけたものであつたらしい。築地橋の欄干を高い竹馬で渡つたやうな危い藝當は何ンでもないことである。

マンリキをかけて土藏を粉碎しやうとしたり、巡査の長靴へ疳癪玉を投込むだり、いたづらがすべて思ひ切つてゐた。またそれは故意とでなかつたにしても、狼狽を作えて、故團十郎をマンマとそれへ落したことさへある。

而してそのいたづらには、すべて工夫と丹念と、機敏と警拔と大膽が伴つてゐたらしい。

此のいたづら好の腕白さんの、大人になつたのが、今の六代目の茶目ぶりである。

我が六代目は、奇警なる工夫家であると同時に、それを完成させる熱心と努力と丹念と執着とがある。輕く平つたい言葉でいふと凝り性といふのであらう。しかしその其の頭は始終クル〳〵クル〳〵働いて、瞬間もじつとしてゐないらしい。そのジツとしてゐない頭がしばしば奇警なことを考出す。そして其が警拔な行動となり、奇想天外的な言辭となり警句となる。

彼は近頃芝公園内に家を新築した。此の建築に取かゝる時に世間並に棟梁を呼んでは間取等を相談したが、何度相談してもどうも思ふ壺にはまツて來ない。工夫家の六代目はじつとして居られなくなつた。そこで大工を引きつれて代々木ケ原まで出掛け、そこへ繩を張ッて間取等を割出し、その眞中にキヤタツを立てて、そこへ登つて具合を見た。——何んの事はない、本職の建築師が設計でもするやうな調子であつた。此うして初夏の暑い日盛を幾日かつぶして代々木ケ原に通つた。そして工夫に工夫をし、研究に研究をして出來たのが今の家の構造だといふ。その構造のうちに壁が襖になるやうな仕掛があり、開閉が自由になるやうな部分があつて、しかも其が彼自身でなくては、妻君の手にも開閉の出來ぬ仕掛であつたが、しかしこれは壁土がボロ〳〵落ちたり種々故障があつて、一ト先づ中止になつたとのことである。

此の家の構造に就いても、我が六代目には、六代目式理想といふやうなものがあつた。それは丁度舞臺の上の家體のやうに、家全體が何方へでも思ふまゝに廻すことの出來る構造である。この話を聞いた時、自分は、多分それは客を玄關から廻して何時の間にか家を廻して置く、これが歸る時に、玄關と思つて出て行くと、そこが臺所であつたりなどして、大に客の度膽を拔かうといふ、例の茶目的理想であらうと思つてゐた。ところがこれは見當違ひで、六代目自身の考は、實際的で、また眞面目であつた。

六代目自身の話によると、家を廻轉式にすれば、冬は思ふまゝに日當りの好い方に家を向けて行く事が出來る。夏はまた、それとは反對に、自由自在に日射を避けることが出來る。それと昔氣質の老人などは、家の家相方位をやかましく云ふ。我が六代目も、また妻君も方位などに頓着せぬ方である。さればとて老人達や家相方位論者の說も無にすることは出來ぬ、そこで家を廻轉式にすれば、家相方位論者のいふまゝに何方へでも向けることも出來れば、事實に於て其家に家相方位がないとも謂へる——そんな考から廻轉式構造を企てたのであるが、しかし然うするには、基礎をコンクリートで固めて、柱梁すべて鐵骨にし、且つ電力を應用しなければならぬので今度の新築には、此の奇拔にして大仕掛なる理想を實現させることは出來なかつたといふ、——しかし彼の執着心は、何時か一度此の飛びはなれた

計畫を實現させることが無いとも謂へぬ。

我が六代目の廻轉式家屋の計畫は、此の如く眞面目に考へられたことで、決して茶目式の面白がりからではなかつた。よし其としても、此の類例の無い樣式の家を實現させやうと企てた我が六代目は、恰も茶目化した豐太閤のやうな放膽性があると謂はなければならぬ。

放膽と怜悧と、凝り性と負嫌と、それに皮肉と穉氣とを加へて、我が六代目の「固性」なるものは頗る氣難しく、且つ複雜であるらしい。從つて、氣にムラがあるとか、氣が變りやすいとかいふ傾もないではないが、しかも一面には一度捉へた物は容易に放すことをしない執着と根氣を有つてゐる。獵銃に凝ればそれを生命のやうにし、玉突をやり出せば一躍して儕輩を凌がねば置かぬといふ意氣込である。

我が六代目に接した者は、よく彼が氣まゝ者であるとか氣嫌かひであるとか、または慢氣滿々、傍若無人であるとか――いろ〳〵なことをいふ。勿論所謂世のお坊樣として誰からも頭を押へられずに育つて來た彼の一面には然ういふ傾もあるだらう。しかし其の氣まゝにしても、機嫌かひにしても、はた慢氣にしても、すべて明敏な常識から濾過されて、「程」といふ締く、りがついてゐる。而して彼の茶目ぶりもまた然うだといふ事が出來る。彼が如何に飛はなれた茶目ぶりを發揮する場合でも「此のくらゐまでは」といふ「まで」の垣根を飛び越すやうな事はないらしい。されば、舞臺的にも、また社會的にも、傍から見てハラハラする位脫線はしかゝつても、彼自身決して脫線はしない。何れかと謂へば脫線しかけると見せかけて、キチンと踏止まり、傍がハラ〳〵するのにペロリ舌を出して面白がつてゐる位のものであらう。此の意味に於て、我が六代目は甚だ人が惡いとも謂へる。

また或向では、我が六代目はヤンチヤ者ではあるが、活達で磊落で、恰も竹を割つたやうに、スツパリした氣象だといふ人がある。然うかと思ふと、また一方では煽が利かず、嫌かして可けず、況して威嚇などは鼻の先で吹飛ばして了ふ方だから、全く「手におへない」難物であると同時に、意地ッ張で、變屈で、些ッと應接する場合にも、對手が叮嚀であつて可けず、と謂つて狎過ぎて可けず――別の言葉でいふと、固くて可けず碎けて可けず、その呼吸が餘程難かしいといふ人もある。何方にも我が六代目の一面が穿たれてゐると思はれる。

要するに我が六代目の性格は多角形で、殆ど捕捉し難いほど複雜である。しかも其の一角一角が、時と場合に應じて、外に現はれて來る形は極めてハツキリしてゐて、そこに微塵の遠慮ッ氣もなければ、讓步も妥協もない。嫌な物は何が何ンでも嫌で突ッ張つて行く。好な物は何處までも好で押張る。これを弟子等や知己などに就て謂へば、愛する者は何處までも愛し、疎む者は何處までも疎み、憎む者は何處までも憎むと謂つた風で、その差別が實にハ

ツキリしてゐるらしい。思ふに彼に取つては、「まんべんなく」といふことは何よりの禁物であらう。

此ういふ觀方からすれば、我が六代目は一本氣の人だとも謂へる。卽ち自分に向つても自分を僞ることが出來ないやうに、他に對してもまた自分を僞つて見せることが出來ないらしい。更に別な方面から見れば、すべて物事を「好い加減」にして置くことの出來ない質ではあるまいか。一にあらざれば二、是にあらざれば非——藝談を一つするにしても、底の底まで話せるだけ話すか、さもなければ頭から口にしないといふ方である。よし絕對に然うだと謂へぬまでも、然ういふ傾向を有つてゐる。で場合と對手に依つては、甚しくつむじ曲りに見えることもあらう。

しかし根が聰明で、性格も心もちも複雜な人である。その一本氣らしい態度にも、またつむじ曲りの態度にも矢張「程」といふ垣根がチヤンと出來てゐる。そして時にガラリと打つて變ることもあるらしい。而してそれが餘りに鮮にハツキリしてる爲に、餘りに男らしくテキバキしてゐる爲に、往々にして他の反感を招く。

茲に我が六代目が、すべて物事なり態度なりを、「好い加減」にして置くことの出來ない二三の例を引く。

「茨木」は大正四年一月の市村座。

「髮結新三」は明治四十四年六月の市村座が初演。

確か今年の春のことであつたと思ふ。六代目は市村座で「茨木」をやつた。その時六代目は持前の丹念で、五代目の型をスツカリ調べ上げて、一絲亂れぬ五代目型でやることにした。すると兄の梅幸が、その前自分が帝劇でやつた型といふのは、劇場や何やらの關係から、五代目の行方とは幾分變つてゐたのださうである。梅幸が自分の型の方でやつて呉れと謂つたのは「茨木」は家の物であるから、型が二樣になつては困るとの考へであつたらしい。ところが六代目は家であるからとの理由で、斷然それを拒絕した。所詮大義親を滅すの意氣で「好い加減」に出來ないを發揮したのである。親密な兄に對してもこれである。況して他人に對しての場合などは想像されるではないか。

近頃やつた「髮結新三」の新三住居のところに、例の「鰹は半分貰つて行く、云々」の有名な白がある。あの場合、鰹は半分といふのが眞ンとか、片身といふのが眞ンとか、これが樂屋内の問題になつた。これは自分のいふ白ではないが、好い加減にして置くことの出來ない我が六代目は、いろいろと詮議をして、遂にこれを魚河岸の古老に糺し、それは骨のついた方の半分を「半分」と謂ひ、骨のつかぬ方の半分を「片身」と謂ひならはしてゐることを突きとめた。そこであの場合、大家さんは鰹は半分といふことにしたのださうであるが、蓋し六代目の此ういふ詮議立はふんだんのことだといふ。

今でこそ我が六代目は、若いに似合はず所謂花柳の巷なるものから超然としてゐるが、今の妻君と一緒にならぬ前は、隨分思切つた遊び方もすれば、盛に物いふ花も折り廻つたものださうである。それが此うと發心してからは、つぶし島田の女なぞは大嫌ひ、四十五十の婆さん藝者でなければ話對手にもしないと高唱して、一切酒色を近づけぬ。此の道德的態度が何時まで持續するか、それは六代目自身の他は保證される限りでないが、しかし「我」の强い彼は、意地にも或る期間此の態度を押張つて行くに違ない。そしてこゝにも、遊ぶなら遊ぶ、遊ばぬなら遊ばぬ——「好い加減」にしてゐない態度がハツキリしてゐる。同時に若し對手が好い加減で、好い加減にあつかはれた場合があるとすれば彼が心中のムカ〳〵や大したものであらう。

去年の初春、彼には「兄さん」に當る羽左衛門が木挽町で「對面」の五郎をつとめた。此の五郎は世評も思はしくなし、また羽左衛門自身も思ふやうに行かぬとこがあつたらしい。そこで一夜、芝居がハネてから、羽左衛門は龜藏を引きつれて六代目の宅へ出かけた。六代目は團十郎直傳の「對面」の心得があつたからである。六代目も丁度芝居から歸つたばかりのところで御飯をたべてゐた。が「兄さん」の來意を聞くと、御飯を中止。諄々と「團十郎の型」を說出して、角々では立つて見せたりして頗る馬力をかけた。廿分卅分と時が經つ。羽左衛門の方は參考に二三急所を聞けば可い積りでもあつたのであらう。時が經つに從つて、飽が來たかフト傍にゐる龜藏に「おい、よく覺えといてくれ」といふやうなことを謂つた。と聞いて、六代目はガチンと來た。これが對手が羽左衛門でなかつたら、六代目は怖い顏をして「勝手にしやがれ」と出掛けるとこなのであらう。しかし對手が對手だけに、ムカ〳〵腹を怺へて、後はお茶漬サラ〳〵にして、此の話を片付けたといふ。

此の話は「噂」の「また聞」である。話の筋道に多少のアリヤコリヤの無いとも保證されぬが、それにしても此の話のうちにも「好い加減」にしない主義の六代目の一面と「好い加減」主義を看板にしてゐる羽左衛門の一面が窺はれる。

此の種の話を持出したら、自分が聞いてゐるだけでも尙だ尙だ材料は盡きぬが、こゝには大概打切ることにして最後にもう一ツ——確か一昨年の春のことであつたと思ふ。歌右衛門の祕藏ッ子、兒太郎が東京座で初役の「道成寺」をつとめた、我が六代目は此の指南役として毎日々々稽古をつけた。段々稽古が叩込まれて行つて、初日近くなると六代目は、四肢の變化から筋肉の動——要するにハツキリした形を見る爲に、兒太郎を下帶一つの素裸にして稽古をさせたといふ。而して六代目の此の態度は、只此の時兒太郎に對してのみでなく、現に手許で仕込むでゐる男寅や丑之助に對しても然うであるらしい。

要するに我が六代目は何事に對しても「好い加減」にして置かれぬと同時に、何様な場合にも「好い加減」にして居られぬ質である。此の點から見ると、我が六代目は神經質だとも謂へる。然うである。我が六代目の一面は驕慢兒であり、傍若無人であり、茶目であり、稚氣あるいたづら者に違ないが、その一面は確に神經質である。

これを大づかみに謂へば、我が六代目は、頭は神經質で針の如く鋭い。そして始終ビクビクしてゐる。而して心もちは多血質で、奔馬空を行くが如くに不斷に躍動してゐる。而してまた底の性根を謂へば膽汁質で、始終冷靜に苦りきつてゐる。されば彼は頭に於て敏鋭に感じ考へ、そしてそれを行ふ場合には心もちに於て奔放となり、しかも其の底にしぶとく太々しい性根を据ゑてゐる。結局彼の氣まゝも機嫌かひも、氣むづかしさも、磊落も、はた剛情も、意地つ張も、茶目ぶりも、すべて明敏なる常識の糸に操られながらの發露である。而して其の舞臺ぶりにも、また藝風にも外の多角形なる性行の片影が閃く。

さて本題の「藝風記」に移る。茲に彼の藝風を叙する前に自分は嘗て五年前に本誌へ「役者の噂」で書いた「尾上菊五郎」のうちの二三節を抜書する。

前略——羽左衛門は、藝度胸を以て、役者ぶりに箔をつけてゐる役者である。菊五郎も其にあまりひけを取らぬ方であるが、度胸の据ゑどころが大分違つてゐる。羽左衛門のは何うかすると、藝度胸といふ奴になるが、菊五郎の方は何處までも神經がピリついてゐる。羽左衛門は柄にない役であつたら、頭から遣らうとしない。よしやつても投げてかかる風がある。菊五郎は柄に無い役でも何ンでもやれるだけやつて見せやうと努力する。で舞臺に出れば一生懸命で、少しの油斷、少しの隙もない。——尤も「勸進帳」の義經などをやつて、長い間後向になつてゐる時には、お囃子の連中を笑はさうとして、顔で藝當をするやうな茶目も發揮することもあるが、——羽左衛門となると、遊んでゐられるやうな役であつたら、舞臺に穴をあけぬ範圍で何時でも遊んでゐる。

羽左衛門はヅボラと見せかけて、自ら餘裕があり、菊五郎は眞劍で、強て餘裕を作る。羽左衛門は何ンでも拋出してかゝるといふ風があるが、菊五郎は何ンでもシツカと捉へてかゝらうとする。

羽左衛門は、由良之助をやつて、これでしくじつても、俺の身上に傷がつかぬとづらかるか、さもなければ、由良之助といふ役はからわけのない役だ位のことをいふ。菊五郎は難しいには難しいが、俺も役者だ、やるだけはやるさと力む。

羽左衛門は見るから冷たさうである。菊五郎は冷たさうでゐて熱がある。羽左衛門は尖つてゐる、菊五郎は丸い。その癖羽左衛門は氣に適つたことがあれば、無邪氣に、開つぱな

「櫻ふゞき」の勝子は、明治四十四年二月の歌舞伎座。

「桐一葉」の銀之丞は、明治四十三年十月の歌舞伎座

しに笑ふこともあらうが、菊五郎は何様な場合にも苦笑である。

羽左衛門は間違つたら、贍の大ッかい腹ッ玉位のことは平氣でいふ。菊五郎は何う間違つても、贍の大つかい贍つ玉以上のことは謂はない。

菊五郎は活達てゐて神經質である。羽左衛門は神經質でありながらズボラである。羽は鋭く輕い。菊は鋭く重い。羽はサッパリしてゐるが、菊はしぶとい。もし直侍のやうな人物に扮したら、羽は巾着切り染みるし、菊は出刄を呑むでゐる位の强盜じみる。それで羽左衛門は何時見ても感じが好いが、菊は何うかすると憎々しく見えることがある。

細に觀察すれば、その柄に於て、藝風に於て、二人には尙だ〳〵比較する點が多い。何故とならば、二人ともに音羽屋畑から出た世話物役者だからである。そして二人ともに純然たる江戸前の役者だからである。中略——世間では近頃菊五郎がメキ〳〵腕を上げて來たと謂つてゐる。これは事實に違ない。此の一兩年、菊五郎は何役をやつても、餘り失敗をしないやうである。殊に古い型を守りながら其の型に新味を加へて行くといふやうな新味を見せて來た。近く「櫻ふゞき」の勝子も然うであつたが去年の「桐一葉」の銀之丞の如きも然うであつた。銀之丞といふ役は「桐一葉」のうちで重い役といふのでは確に難役である。魯で、我儘で、それで戀にやつれて死ぬといふ哀な少年である。今迄の芝居には類



のない詩的人物だけに仕勝手が悪い。扮するには扮しても、爲活すといふことは難しい。此の役に生命を吹込むには歌舞伎役者としての素養だけでは駄目である。

菊五郎は此の難役を引受けて、殆ど不足を謂はれぬ位に銀之丞になつて見せた。取分入水前の所謂氣分の如きは息を凝らして見てゐる價値があつた。歌舞伎劇の型に捉へられずに、歌舞伎味を出してゐた仕打——表情にも態度にも、新しい工夫を見せて、昔の人の所謂無類といふ出來であつた。他の人々は、芝翫にしろ松助にしろ宗十郎にしろ羽左衛門にしろ、はた仁左衛門でも八百藏でも巧いには巧かつたが、何れも各自の手馴れた藝で巧さを見せてゐた。菊五郎だけは斷々乎として此の姑息の遣方をせず、若い勇氣と工夫とを以て「桐一葉」の役々を通じて第一の成功を納めてゐた。此の成功を以て見ると、彼は徒に古い歌舞伎劇の空氣に呼吸して、古い型にのみ縋つて活きて行かうとは思つてゐないらしい。

彼は一度歌舞伎劇の型に沒頭して、更に其の型から說出して自ら新しい領土を拓いて行かうとしてゐるのではないだらうか。近頃の彼の態度には其傾向が微見える。菊五郎には覇氣がある。そして藝術的向上心も熾であるらしい。目端も利く。時代の推移も朧げながら解るらしい。加之負嫌である。劇界の動搖を默つて見てゐるに耐えないだらう。しかし彼

には、推移して行く時代に向つて、何う自身をあつかつて行つて可いのか、その見當が的確についてゐないらしい。

これを舞臺に見ても然うである。彼の藝は纏りがついてゐるけれども、其の藝を何ういふ風に舞臺に浮かせて行くかといふ見當はついてゐないやうである。所詮開拓しやうとする領土への路を探り當てゝゐない。路は探り當てゝゐても、行着くべき領土が解つてゐない。中略——彼が歌舞伎役者の上手として、安穩に、そして凡庸に活きて行くことは、彼に取つて何ンでもないことである。

此のまゝずッと進むで行つたら、音羽屋は安全に、且つ榮え、彼自身は歌舞伎劇には無くてはならぬ大事な役者として、好い地位を占めて行かれるに定つてゐる。しかしそれだけでは、彼の野心が滿足すまい。何うも滿足して居られさうでない顏付である。藝が出來て、才がある、そして覇氣がある。何事か仕出來さずには居られないだらう。

近頃菊五郎は、時代劇の新作を片ッ端から手をつけて見たい、ト、いふやうなことを謂つたのを何かで見た。

これは何ういふ意味か、その眞意は解らぬが、自分は菊五郎が新らしい物に心が動いてゐるのだと解釋した。そして然うあるべきだと思つた。慌てずに、落付いてゆつくり遣るが可い。彼の柄なり藝風は、世話物や或種の時代物にばかり適してゐるといふのではない。努力さへしたら、何ンにでも行ける天分を持つてゐる。また何にぶつかッても相應にこなすだけの腕前もある。

彼は廣く動いて行くことの出來る役者である。役者として、今の青年俳優中で最も好く教養された役者である。音羽屋といふ家柄に生まれた便宜もある。頭も利く、氣性も烈しい。中途でボケさへしなかつたら、また餘りそッくりかへるやうなことさへなかつたら、彼の前途は春の海の如きものである。中略——

菊五郎は何うかして舞臺では甚く傲岸な面魂をしてゐることがある。これは仁左衛門にも然ういふことがあるが、しかし傲岸の心もちが違ふ。仁左衛門は、眼中、他の役者のないかのやうに超然としてゐる。菊五郎は糞でも喰へといふやうな顏をしながら、他のすることをよく見てゐる。仁は獨專的である。菊は批評的である。

菊五郎に第一の弱點は、自の悪いことである。自體聲が好くないのに、その好くない聲を補ふ鍛練に不足があるやうだ。悪いは悪いにして見切をつけてゐるのか、それとも幾ら鍛練しても引立たぬのか、何れにしても白の悪いことは、彼に取つて小さな損害ではない。

中略——

顔についていへば、肥つてゐても、柔な線に括められてゐるから、優しくもなれば強くもなる。剛悪にもなれば豐麗にもなる。變化は自在である。只いさゝか輪廓が小さい憾があるやうだ。中略――

丸く肥つた菊五郎の體、彼は大分それを氣にしてゐるらしい。中略――成程役に依つては肥つたのが邪魔をするだらうが、勝子をしても、八重垣姫をしても肥つてゐるから何うといふことは無かつた。忠信にしても勘平にしても、また十次郎にしても然うである。菊五郎は肥つてゐても體に艶があり、しながある。顔つきに近代式のきついところがある割に、體に色氣がある。以下略――

此の貧しい見方のうちにも、我が六代目の藝風なり役者ぶりの一面が語られてゐる積りである。しかしこれは五年前のことである。六代目自身の藝風も大分變つた傾向を示して來れば、當時自分に疑問であつた部分でハッキリして來たところもある。いざや一と息入れて、先づ彼の顔と體とそして藝風との調和と不調和から考察して見やう。

我が六代目の那の肥ッた體と其の藝風との調和、これには種々な見方もあれば、また見る人々に依つて、いろ〳〵異つた見解もあるであらう。我が六代目の體は、すべて品位で見せる役とか、貫目で見せる役とか――これには年輩の關係もあるが――または落付で見せる役とか、愁を利かせなければならぬ役とか、淋しい役、哀ッぽいやうな役――ざつと此ういふ系統の役は向かないやうである。

具體的に謂へば、「湯殿の長兵衛」の水野にはなり得ても、「大盃」の掃部頭には不向である。また「陣屋」の義經などになると、あの肉付の好い顔も體も、不思議に小さく綺麗になつて了つて、恰も山車人形のやうになる。その癖「勸進帳」の義經で成功するのは、此の方は山伏姿であると同時に、踊に鍛えられた姿形に好いとこがあるからでもあらうか。

貫目に就ていへば、我が六代目には押出しに根強いとこはあつても、どッしりと大きなとこが無い。それで「金閣寺」の大膳とか、「妹背山御殿」の入鹿とか、下つて瀧口上野といふやうな役でも所謂「柄に無い」方に屬する。また落付に就ていへば、「實盛」には文句を謂はせないが、「盛綱」の方では何うかと心配がある。と同時に、「菅原」では梅王櫻丸で腕を見せても、松王は少々危く思はれる。況や相丞樣となると、家の藝でありながら、吉右衛門に役を持つて行かれて了つたのは、强ち吉右衛門の身分を立てる爲に、役の割當の都合ばかりではないと思はれる。

シンミリと愁の利かせることの出來ないのは「筆屋幸兵衛」の如きが好適例であらう。「魚

「宇都谷峠」の文彌は大正四年九月の市村座。

屋宗五郎」や、「御金藏の富藏」の饂飩屋の場の如きも然うだと謂へる。また哀氣とか淋しみの薄いことを謂へば、「宇都谷峠」の文彌の如きが其の例である。文彌は決して失敗の出來ではなかつたが、此の役に無くてはならぬ哀氣と淋しみに乏しかつた。別な方面ではあるが、「竹雀」のお三輪とか、「揚屋」の宮城野なども哀ッぽいとこが缺けてゐたので、二三割方の損をしてゐた。出世藝の一つともいふべき「十段目」の十次郎などにしても然うである。

六代目の十次郎は、確に彼の傑作の一つに數へられる。二度目に見た市村座の時は、大分荒むでゐた氣味があつたが、歌舞伎座で見た十次郎は、今に眼にチラ〳〵する。初々しくて、綺麗で、ふつくらとしてゐて、到底名代の茶目などを聯想することも出來なかつた。それにしても矢張「十次郎の哀さ」を出し得なかつた。――殘る蕾の花一つ、水上げかねし風情にて――の此の文句の性根を出しては居なかつた。

六代目の肉體は役者として以上述べたやうな不足がある。所詮餘り賑であり、壯麗であるからである。また强くあり過ぎ、明くあり過ぎるからである。別な言葉でいふと餘り活々したとこがあり、ハッキリし過ぎてゐるからである。從つて二枚目式の色氣は皆無である。

と謂つても、六代目の肉體に色氣がないといふのでは無い。それは若いからといふばかりでなしに、六代目の肉體には一種濃な色氣がある。――色氣といふより一種の艶とでも謂ひませうか。それが或る種の若い女形なぞをやると、よく發揮される。例へば、八重垣姫だとか、道成寺だとか、戻橋だとか、紅葉狩だとか、日高川だとか、鏡獅子だとか、または女になつてゐるうちの辨天小僧などが其である。それでゐて立役になると、二枚目はおろか、切られ與三式の色氣も覺束ない。但し直侍や鬼薊の清吉、または髪結新三となると、腕の力か、若いからか、男前に此の種の人柄の色氣が出る。時代物の方でいふと、「千本」の忠信「太十」の十次郎、または「五段目」の勘平などにしても然うである。――とすれば、よし二枚目式の色氣はないにしても、六代目の肉體には色氣がないとは謂へぬ。而して此の一種の色氣、または艶は、年を老つても容易に衰へはしないだらう。

一體六代目の顏には、何時までも稚氣が失せぬ。六代目はこれで損をする役も少くないがその代り顏の生命が長い。恐らく六代目は、五十六十になつても、お三輪や八重垣姫が樂に出來る人であらう。顏ばかりでなしに、肉體の質から考へても確に然うである。

六代目は父五代目から系統を引いた或種の世話物と、踊または所作を其の得意藝としてゐる。しかし彼の性格が多角形であるやうに、その藝風もまた多角形で複雜である。そして其の藝風と體とが釀してゐる味とても然うだと謂へる。

尤も彼の舞臺ぶりには、ともすると才氣が逝る。そして器用である。そこで劇通はよく

彼に向つてチョンキナを慎めと警告もする。其程に彼には何ンでもやッてのけ得る器用と才覺と腕と意地ッ張とがある。雖然夫然り、豈然らんやである。先づ第一に彼の體が彼の役柄を拘束する。

その藝風か、それとも其の役者ぶりか、六代目の舞臺ぶりには、何ういふ場合にも「人間の惡」の氣分が輕く鋭く出てゐる。それが役に依つて扮裝や仕草――謂はゞ腕で以て巧に蔽ひ隱されるが、ともすると其の鋒が露れる。例ば魚屋宗五郎などをやると、此の宗五郎が何ンだか人が惡いやうに思はれる。それがギス〳〵してゐるとか、冷ッこいとか、または胸に一物あるとか――然う謂つたやうな強い刺戟があるのではないが、「惡の性根」が輕く鼻先にチラ〳〵してならぬ。殊に醉つてから惡體をつくあたりになるとその本性に那の「勝手にしやがれ」と謂つたやうな心もちがあるやうに思はれる。而してこれがまた、「魚屋宗五郎」よりも「髮結新三」で成功し、「筆幸」などよりも、直侍や富藏や鬼薊の清吉で成功する所以であらう。遺に「實盛」系の役や若い女形――八重垣姫やお三輪などになると、此の「惡の性根」がスッカリ消えて了つてゐるが、「政岡」になると、どつか邪慳の角が見え、お谷では哀が薄く、更に「大盃」の掃部頭になると、水野十郎左衛門と水魚の交を結んでゐるやうな人になつて見える。更にまた「お祭り佐七」をやると、好い惡いは別にして、その人柄に二つ名のある風が見え、「鹽原多助」や「牡丹燈籠」の孝助になると、やゝともすれば、空ッ恍けてゐるやうな心もちが飛出す。しかしこれは六代目といふ「役者」の好い惡いの問題ではない。その體のせゐか藝風か、六代目の舞臺ぶりには然ういふ傾向があるといふのである。

然らば彼の體と藝風とがシックリ調和する役柄はといふことになる。

それには先づ六代目の體には、全く異つた二つの氣分とか調子とかの漂ッてゐることから して謂はなければならぬ。一つの方は豐麗とでも謂はうか、色彩がハッキリして活々して、しかも柔な感じがする。一つの方は剛惡とでも謂はうか、しぶといやうな、太々しいやうなきつい感じである。そして何方にも強い反撥力とでもいふやうなものが加はつて、其處にキビ〳〵した小氣味の好いところがある。そしてまたそれに輕い一種のユーモアが加味されてある。

そこで前の方に屬する感じと藝風とがピッタリ一致する、または或る程度まで一致する役柄はといへば、先づ「道行」の忠信とか、「菊畑」の智慧内とか、「太十」の十次郎とか、「扇屋」の小萩とか、「對面」の五郎とか、または實盛だとか、梅王櫻丸だとか、八重垣姫だとか、お三輪だとか、それに、「道成寺」の花子、「鏡獅子」の彌生といふやうな役々であらう。

また後の感じの方に就て謂へば、髮結新三や御金藏の富藏や鬼薊の清吉や直侍や――是

等生世話物の役々、此のうちには柄行の合はぬ物のあることは謂ふまでもないが、しかし何れも或る部分に一致があるのと、その腕前とで、前にも謂つたがすべて六代目の畠の物になつてゐる。而して「天下茶屋」の元右衛門や「加賀蔦」の道玄となると、彼の肉體と藝風の一部とが最も好く一致して、彼の一面が鮮に發揮される。されば「村井長庵」「法界坊」の如きも、彼の領分内の物ではないかと想像される。「大晏寺堤」の加村宇多右衛門の如きもさうだと謂へる。とすると芝居道の所謂敵役——或種の實惡も色惡も、また二枚目も、三枚目も、その藝風に體に一致すると謂はなければならぬ。よしそれとしても前にも謂つた如く、王子鬘の「妹背山」の入鹿や「新薄雪」の大膳、色惡の「金閣寺」の大膳や「躄仇討」の上野——此う謂つたやうな系統の役は全く可けない。但し色惡も「皿屋敷」の鐵山や、大月藏人となると、彼一流の味を出して、先人とは異つた成功を見せるかも知れない。實惡の方では、仁木彈正の如きは的確に彼の物である。もし是に半蔓が入るとすれば、それは年輩の問題である。仁木は「對決」のところはまだ見せたところがないと思ふが、市村座で「床下」と「双傷」だけを見せたことがあつた。もう五六年前のことである。そして此の若い仁木には團十郎の莊重がなく、團藏の險惡味がなく、また五代目の「清涼なる凄味」といふやうなものも無かつたにしても、體に藝風に、「惡の性根」の漂つてゐるのが利いて、見るからに太々しく、剛惡の性根がハツキリと浮き出してゐた。そして一種の壓力——謂はゞ押しの強さうなとこもあつた。尤も敵役系の役をやつて、その舞臺ぶりに巧まずしてしぶとく、太々しく押の強いとこが濃厚に出るのも六代目の一特色である。それから「鮨屋」の權太——これもう瀨踏が濟むでゐる。權太は今に羽左衛門も手をつけずにゐる。それには年輩の關係が重なる理由になつてゐたらしい。況して六代目の年輩である。手負になつてからなどは殊に尙だ〳〵危いに違ひない。けれども體にはまる、藝風にはまる、此の役の如きは五年十年の後には、六代目の「極附」のものとなるであらう。次に光秀であるが、これは「十段目」の方にしても「馬盥」の方にしても、仁木權太から系統を引いて、體にもはまり、藝風にも一致する。殊に企謀人らしい根强さを持つてゐることは、團藏と異なつた味を以て、五代目のそれを凌ぐかも知れない。「忠臣藏」の師直の如きも、いろ〳〵な意味に於て、やがて彼の持役の一つとなるであらう。また「矢口」の頓兵衛の如きも、一度はその剛惡ぶりを見せなければならないものである。

此の敵役式の氣分と、豐麗な氣分とが融合つた場合に、「關の扉」の關兵衛のやうな傑作が出來る。一部の劇通は關兵衛を彼の當り藝の一つに數へてゐる。而してまた、彼の藝の質、または根抵にも關兵衛で成功する所以があると思ふ。してまた關兵衛で成功する彼には、や

がて「陣屋」の熊谷などにも成功する素質があるのではないだらうか。

更にもう一つ我が六代目には「ユーモア」とでもいふやうな一面がある。藝の質か、それとも性格か、左に右或種の世話物などをやつてゐると、此の「ユーモア」とでもいふやうなものが、ともすれば輕いとか輕妙とかいふ調子になつて表現される。これを三枚目式氣分と謂へば謂へもしやうか、勿論役によつては全くそれになりきつて、大に三枚目ぶりを發揮することもある。時代物でいふと、「千本櫻道行」の早見藤太とか、「盛綱」の御注進の藤太、今度の「寺子屋」の權助の如きがそれであらう。所作事の方でも當り藝の一つなる「身替座禪」を始として、彼のユーモアを發揮する物が少くない。要するに喜劇役者としても、彼には彼の一生命がある。

さて茲に「助六」と「勸進帳」の辨慶役者としての彼に就て謂つて見たい。此の二役を通して見る彼の長所と短所——それを瞥見的に詮考して見ることは、六代目といふ役者を知る上に於て、強ち無駄ではないだらう。

「勸進帳」も「助六」も、その意味は違つても、六代目に取つて、何れも所謂畠違ひに屬する役どころと謂つて然るべきであらう。先づ「勸進帳」に就て謂へば、日頃の舞臺ぶりから見て、またその體、その調子から謂つて、若しこれが凡庸の役者であつたなら、頭から「柄にない」として一蹴し去らるべきであつたのだ。それを彼が「勸進帳」をやると聞いた時、苟も芝居を見やうといふ程の者は、彼に向つて何者かを期待した。そして彼自身また、その「藝の力」と「一流の自信」と「舞臺度胸」とを以て、此の柄にない役を或る程度まで自分の物にして見せた。して此の「勸進帳」は、一般に前半に於て非難があり、後半に於て推賞された。前半に於て非難されたのは、白に姿に態度に、最も此の役に期待される、莊重とか豪宕とかいふ體が無かつたからであらう。別の言葉でいふと、幅とか、鰭とか、落付とかに不足があつたからであらう。殊に揚幕の出、抑々の白からして、勸進帳の讀上、問答——此の間の白が悪かつた。成程白廻しには慘憺たる苦心はあつても調子に辨慶らしい氣魄が乘つてゐなかつた。所詮前半に於ては六代目の弱點が殘らず暴露されてゐたといふのである。

しかし一部には三座の「勸進帳」のうちで、六代目のそれが最も優れてゐたと主張する人もあつた。中にも或能樂研究者は、三座のを見くらべて、六代目のを以て、一番本行に近いものと斷定を下してゐた。しかも一般が最も悪いとした白が最も本行に近くその「呼吸」なるものを會得してやつてゐたといふのである。自分は本行に對する知識がないから、此の說に批判を下す資格がない。として此の能樂研究者は、芝居に對しても具眼の士であり、且つ六代目とは何ンのかゝはりもない人であることだけを謂ひ添えて置く。

「勸進帳」辨慶の初役は、大正三年四月の市村座。

「曲輪菊」の助六は大正四年四月の市村座。

要するに此の「勸進帳」は、藝と意氣に於て豐な天分を示し、「役者としても木地」に於て一缺陷を示したとても謂はうか。されば前半に於ては、白に形に、慘憺たる工夫と努力とを以てその缺陷を補つて持ちこたへ、そして後半に於てその雄渾活達なる藝風の一面を思ふがまゝに發揮したのであつた。

次に助六である。「助六」の芝居は、江戸ッ子の洒落と惡體といたづら好と氣勢とを、豐麗な色彩と、古雅なる時代味とにくるめた芝居である。そして「助六」の仕草は――例へば人の刀の柄へ足をかけたり、または人の頭へ餽飩をぶつかけたり下駄をのせたり、或ひは股をくゞらせたり、隨分思ひ切つた茶目を發揮する。そしてその惡體の如きは、キビキビとして痛快を極める。而してこゝに此の役と素の六代目の一面と共通する點がある。しかも六代目はその役者ぶりに豐麗な光彩がある。とすれば「助六」は彼の藝風とも、體とも、はた性格ともピッタリ一致する役柄であるとも謂へる。

けれども「助六」は正德享保の頃から、寶曆明和、安永天明、文化文政、天保慶應明治と、此う古い各時代を舞臺に活躍して來た茶目である。助六といふ若え者に時代の味が加はり、優美な色彩が加はり、人物が甚だ古雅になつてゐる。そこで潑剌たる意氣に於て一致しても、心もちに味に、はた色彩に大きな相違がある。もし六代目の「助六」に慊らぬ點があつたとすれば、主因はこゝにある。殊に前にも謂つた通り、六代目の顏は、白く塗れば塗る程顏が小さく見え、そして不思議に稚々しくなる。「助六」の顏も然うであつた。姿にもその傾きがあつた。それで顏に姿に豐麗な光彩はあつても、優雅な風情と味に乏しかつた。そして角前髮の若衆が急に元服して來たやうな氣味もあつた。それと時代めいたあの小氣味のよい白が、何うも仕草のやうにキビ〳〵と行かず、そして響も惡かつた。

勿論「藝」の方面から見れば、張りきれるだけ張り切つてゐて、殆ど間然するところがなかつた。取り分けて花道の間など、柔かなうちに凛としたとこがあり、凛としたうちにしなやかなとこがあり、大手に、また細に、傘の柄の持どころ一つにも細心の注意を拂つて、形に、動きに、それこそ一擧手一投足、息を引きつめて見てゐる價値があつた。されば此の「助六」も「藝」に於て充實し、またその充實した力に依つて、「木地」の缺陷を補つてゐたとは謂へ、結局幾分の破綻は免れなかつた。

無雜作にいつて了へば、我が六代目の「藝」は充實し緊張してゐるが、その「木地」にまだ實の入つてゐないとこがある。稚々しいとこがある。それで非六代目黨は、此の人の舞臺ぶりに底がないとか、上つ滑りがするとかいふ非難を加へる。此の非難は一應は肯けもする。しかし此の人々は、六代目の「藝」の充實を輕視して、一向に「木地」に實の入つてゐ

ないとこをのみ突いてゐるのだと謂はなければならぬ。

加之彼の「木地」は謂ふまでもない、その藝にも、舞臺ぶりにも尙ほ陰影がつけられてゐない。すべてが餘りにハッキリし過ぎ、餘りに明る過ぎる。從つて他の者ならば目立たぬ程のシミも目につくといふ風がある。しかし彼はまだまだ伸びもし膨張もする役者である。また伸びられるだけ伸びやうともしてゐる。そしてこゝにも、我が六代目の一特質と、豐な天分が認められる。

さて前に述べた役々の他に、六代目にはまだ「目貫の後藤」といふやうなものもあれば、「三代記」の佐々木や「知盛」の相模五郎と謂つた種類のものもある。また五代目讓りの、「め組の辰五郎」とか「清水一角」とか「鳥目の一角」とか「白井彌市」とか「土蜘蛛」とか「茨木」とかいふ物を始として、新作に、所作事に可成の廣さを持つてゐる。そして此の領分の廣さを謂へば、彼は一面に於て團十郎畠の一角に突入し、一面に於て親の物は子の物として五代目畠の大部分を繼承してゐる。もし五代目畠のうちに、彼の手に「收穫」爲難い物があるとすれば、それは「四谷怪談」のお岩とか「皿屋敷」のお菊系に屬する物その他二三に過ぎないであらう。

話は少しく餘談にわたる。昔から「千本櫻」の忠信、權太、知盛、此の三役の眞ンとに出來る人を上手とか、好い役者とか謂ひ傳へたものださうである。そこで饗阿彌氏の說に依ると、明治になつてから此の三役の出來た役者は五代目だけであつたといふことである。團十郎は、忠信と知盛は立派であつたが、權太は全くいけない、團藏は權太と知盛はいけても、忠信は全く駄目であつた。五代目となると權太、忠信は無論のこと、知盛も出來た。だから五代目は好い役者だつた——といふやうなことを何かに書かれたのを見たことがある。自分もこれは正に然うであらうと信じてゐる。そこで六代目の役者の質を此の三名優にくらべて見ると、父の子として誰よりも五代目に似てゐるのではないかと思はれる。よし彼は知盛の出來る質でないにしても、權太と忠信では既にその手腕を見せてゐる。而して權太に於て、剛氣の勝つた點に於て、團藏に通ずる一角があり、忠信に於て、豐麗なる色彩、または豪宕なる意氣に於て、團十郎に通ずる一角がある。六代目がその少年時代に、團十郎の薫陶を受けたことは誰も知つてゐる。その故か、我が六代目の或る種の舞臺ぶりには、團十郎の意氣が通ひ、形にその俤が浮動することもある。少くとも六代目は、形に、動き方に團十郎を追蹤してゐるとこが見える。さればまた强ちその故のみとも謂へないが、彼は性根に於て、どつか五代目に優つたとこがあるやうにも思はれる。五代目は洗練に洗練された「才」の役者である。六代目も「才」の役者である。而して洗練に於て、到底父に及ぶべくもないと思は